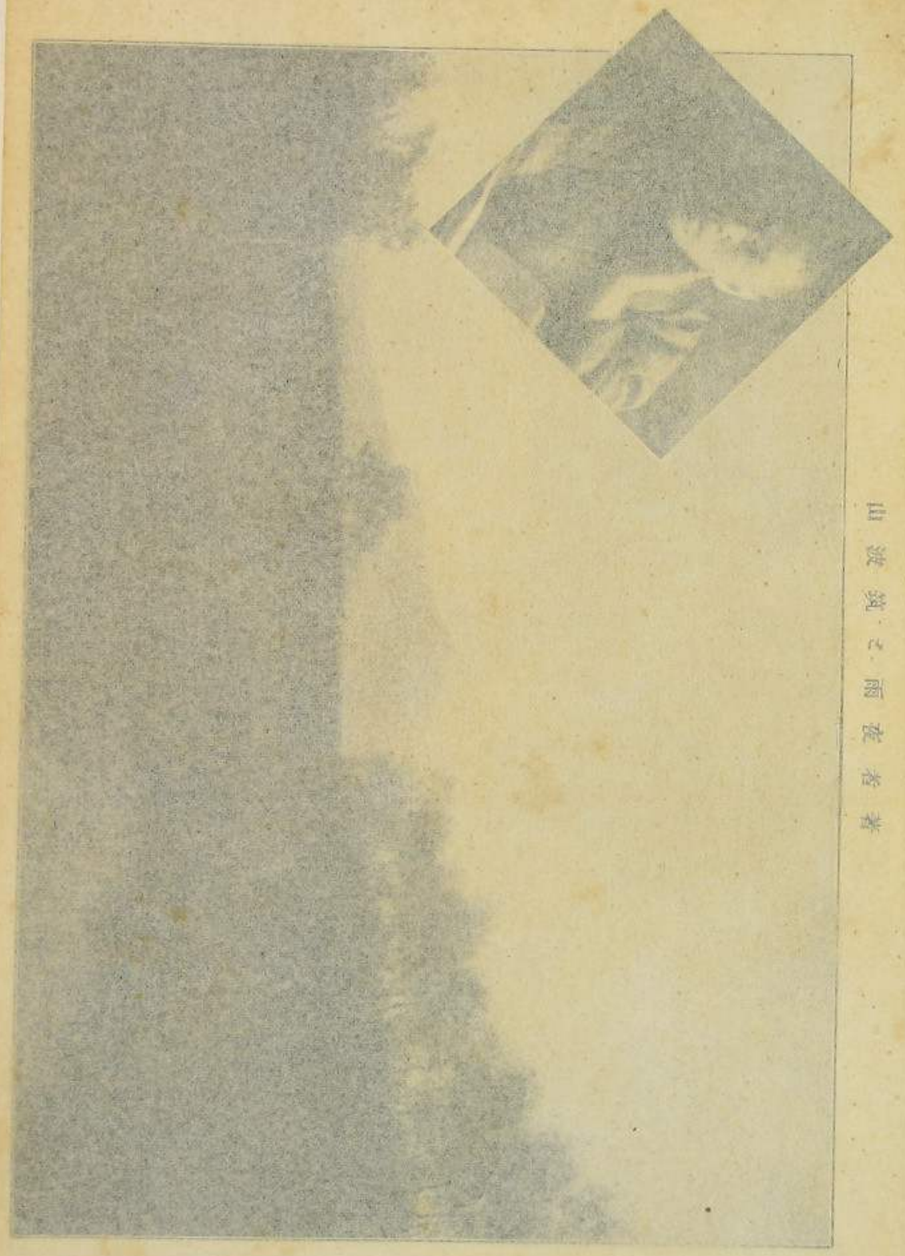
東方學會藏書



山渓鎖さ雨霧

我れは不斷の坐禪に在り。寂しけれど清し、誰か我が日中の靜寂を疑ふや。我が夢は湖の水の如し、動けども終に鎭まり、行けどもやがて反る、誰かわが床に醜き影をうかがふや。

著者夜雨と筑波山

目次

△七本櫻……一
△傀儡子……一三
△お才の國へ……二一
△火……一〇一
△蘇生……一一六
△『蘇生』の後に……一三〇
△鹿……一五八
△吾アルバム……一六三
△雲雀鳴く野より……一六七
△かげろふ……一八四

△海　燕……一九〇
△冬　の　蝶……一九七
△いつぞやの日記……二〇七
△五月雨草紙……二二二
△筑　波　雲……二三一
△角　　笛……二四四
△こほろぎの草紙……二五二
△歡　　喜……二〇二
△峠より麓より……二二六

——（終）——

夜雨集

七本櫻

横瀬夜雨著

むかし高佐士の野を行く七媛女があつた。兵の伴の司なる大彖命は、磐余彦命の袖をそと引いて

大和の　高佐士野を　七行少女ども　誰をし覓かむ

と歌ふ。媛女の一さきには伊須氣余理比賣が居つた。磐余彦命。

かつかつも　最先立てる　美をし覓かむ

とあるので、媛に近よつてからと言うと、裂けるが如き其命の目を仰ぎ見て

あめつち　威足大人嚴　など裂ける利目

かと問ふ、剃刀も當てぬ髭面の中に、目ばかりが鋭かつたらしい、

少女に　直に逢はむと　我裂ける鋭目

ぞと答へたので、姫は人皇第一代のすめらみことの正妃として仰がるゝに至たのだ。

自分がこゝに歌はうとする『七本櫻』は、わが知り得たる七人の少女を題にした一聯の詩のその一節である。神武天皇さんに見えた彼の七人は實在の人だつたけれど、『七本櫻』の七人はわが想像上の人なのかも知れぬ、或は現實界の人であるかも知れぬ。

或るものは死に頻せる肺結核の人である、或るものは九重雲深さあたりに仕ふる人である、雪白き越路の人と柑子金なす南海の人と、未だかつて浪を踏みしことなき島の人と、甲斐の嶺の横折伏せる山の人と、ひとり名も告げず所も明さずみちのくの果てにて埋れ草とのみ傷心の文を寄する覆面の人との七人である。紫者灰指物

曾海石榴市之八十街爾相兒哉誰と問はれて、足千根乃母之召名乎雖白路行人乎孰跡知而可と答へた飛鳥の宮の才女は知らず、月前花下涙おつることありて終に『七本櫻』を作る。

七夜の夢の七つ脱けて
彼と此とにまぐれけむ
眼をかすめたる七少女
七人行く影は薄かりき

髪にして言へば、五尺の
地を曳く人と、目を言へば
星の如きと、眉が根の

淡きと、蜂腰細と

七本櫻？　人ごとに
霞む影だに捉へんと
腕あぐれば七人は
つとかくれ去る春の山

街に拾へる留針の
矢の手明けぬを返すとも
鋭目して過ぎむ、櫻皆
一重の花の光れるのみ

噫、君が胸ならで天地に
魂は籠もらさじ、丸き乳は
人の指には觸れむやと
出羽の人の契れども

しつりの帶を
執るにすら
母が手借るを
知らば——君
月波に來れ
紫は
袂に絞る

色のみか
見よ金泥の
大柱
羽虫の族の
蝕みて
傾き來とも
愛の家
なじかは君を
放つべき
くみ所の奥の

繪屏風に
懸くる素絹の
緋は燃えて
黄なるは沈む
氈の上
二人は在らむ
灯の下に

ただ——生きながら
土に
葬られたる——
吾爲に

夢に設けし
可愛兒に
乳を含まする
母たらばよし

それはりう子であつた。
ある夜、またうたへる
かつては雲の
紅く浮く
山の蔭の
國戀ひて
草の音聞く

野にしては
一人の上を
忍びしか

芒の塚の
火こそあれ
煙は霜に
靜めされて
夜の東雲に
龍膽の
花の常陸に
咲きぬれば

轎だに置かぬ
荒牧の
駒は嘶えて
地を蹴るに
霧橋架くる
大川の
川門に、秋は
過るらむ

今、遠人を
夢にして

涙ぞおつる、
夢に逢はゞ
死なんと言ひし
瞬間の
顔よき人の
名は知らず

わが生くるべき
天地の
狭くなりぬる
心から
飽浦の濱の

埋れ草
しきりに人の
見まほしき

傀儡子

一

大雪小雪。

朝からふりやまぬ雪だ。

一寸二寸つつ跳ね跳ね、趾の跡と尾の型とを雪につけて雀の子が歩いて居るきり、庭は静だ、白いのがはらりと頭へ戴ると雀は頸を縮めてふり落す。

『村童を傭うて溪芹を摘まんと欲すれば、滿藍の香泥牛は是雪』芹はまだ秀きぬが雪は溪を埋めたらう。

上見りや埃のよう。下見りやわたのやう。

頭へ前掛を被つた女の兒が二人ほど、門の前で乾き切つた聲で唄うてゐる、が雀はまだ逃げぬ。

おゝ寒む小寒む、筑波の猿めが啼いて來たと囃しながら、往來から、竹足に乘つた一群のわんぱくが押込んで來て、女の兒を追ふ。手袋もはめず、襟卷もせぬ。唇は桑實色にかはつてゐる。雀の足跡は、先棒の一人に、躡いで踏み荒す竹足に消されて無くなつた。

雲こんこん、霰こんこん、常陸は空寒き三月の一日である。

文庫藏の片づけに今日も朝から籠つてゐた母が、髪の上に雪片をかぶりながら、島臺の尉と媼とを持つて來た。母が嫁入つて來た時使うた切り祕藏して出さなかつた品だといふ。出すときつと自分が男だてらに弄にしてだいなしにしちまつたかも知れない、揃うてゐた雛すら散々に疵をつけて、緋の袴をはいた官女の首と、太鼓を叩いてゐる絲びん奴の首とを篏げかへたり、金卷繪の乘物に內裡さんを無理におつべし込んだりするので、たうとう姉に持つてかれてしまつた位だから、島臺をかくして見せなんだのも最である。

けれど、母も尉と媼が、蟲に蝕れることは拒げなかつた……。

尉が髭蟲蝕きて
落かかりたる婆裟ら髪
肩に小蜘の這ひ摺るを
はらふ熊手も折れぬれば

十二一重は綉びし
表の錦に映ゆれども
姥が大事のはながしら
嵐は花を過にけり

菱に刻りたる雛すら
桃、咲く春は籠に召す
誰ぞや二人をおく庫の
隱所のおくに囚へたる

檢非違使は母だつた。

菜の花がぼんやりと路に匂うてゐた晩だといふ。七五三の杯に滿々と酌がして、長い髯を搖りながら『君は千代ませ』を唄うたおぢいさんは、母が自分を護つて、大學病院に入つたあとで亡くなられた。が奥の燭火の下にめいめい盛裝して、新人に侍した伯母や叔母やどんなに花やかであつたらう。二十一と十七と、母は十八であつた。

大雪小雪。

今わが心は雪の如し靜かに地に落ちやうとしてゐる。

すべての人は我を辱めたれど母には可愛がられたし、萬人は皆背いたが、母はかはらなかつた。

葬られたる希望を、くらやみのあなたに顧みて、みづから傷む時なほ母在るをおもうては、いしくも生きたる命よと嘆かれる。おもへば最初の上京は、わが數奇なる運命の門出であつた。

絶え〳〵の命の母の纖手に護られて、降りしきる大雨の中に千住の大橋まで來て、水に映る千の火萬の火、紅き青き都のともしびを俥の母衣の中から望み見て、小さな魂はどんなに躍つたらう。倉のような——瓦ぶきの家ばかり有るところと覺えたのもはかなき印象の一である。

病院はもとの和泉橋の上に在つた。抱かれたまま窓に立つては橋の上を通る人を見い見、幼きかなしみを忘れさせられたが、一しよに湯に入つて水でぬらしては、

髯をこくのが好きだつたお祖父さんが居ない。二歳違ひの僻に結付帶で負つてくれる姉さんも居ぬ。凧を上げてはよく逸す長三郎や、炬達の前で太鼓を叩くとしかたなしにひよつとこ踊を踊る清作や、知つた顔が一人も居ぬので考へ出しては泣く。泣くと母が抱いて窓に立つて賺したのだといふ。金魚屋が橋の下で鐵杓子で、川から錦魚を撈つてゐた。唐もろこしの毛を冠つた女を乘せてぱかぱかと行く白馬があつた。

ゴムの尺で胸を括られた。瓶の臭い油をべつとりと背へ塗られた。板でぐるぐると胴を卷かれて、寢臺の上にころがして置かれることもあつた。

長い脚で布團の上へ乘つたり、齒を光らしては背を嚙む兎がゐて、夜不圖すると來る。痛い、痛い、退しやらして呉れ〳〵と泣いて、ねむつてゐる母に縋り〳〵した。その頃まで——次の弟が生れたあとまでも——私は母の腕を枕にしなければ寢なかつた。骨髓に徹れる痛は五歳の兒どもに、幻の白い兎を見さしたのである。

白い兎が來なくなると足だけ起つようになつた。

一たん足駄を穿いて馳けて歩いたわげくの病氣だつたから、母に兩手を引張られて、歩けるやうになつて見ると、二人切りの室の中ばかりではやうやく歩き足りなくなつた。蜜柑の皮を剝いて一房一房、絲で括つて『猿』だといひ〳〵した。生きた猿を買うてくれる筈だから買ひに行くと駄々くつて、たうとう外へ連れて行つてつた。

猿は鈴生に生つてゐた。馬屋に嵌める栓のような鐵棒の上下に、段になつて大きいのも小さいのもごつちやに繫がれてゐた。にんじんの千六本に刻んだのが小さな杓子の中に入れてある。猿にくれるとお辭儀をして喰べる、自分は押合ふようにひたとくつついて母の袖の下に居た。

赤いつらのもゐた。しら茶けた顔のもゐた。小さいのに呉た人參を横から長々と足を出して奪取にかゝるのもゐた。終に上のと下のと、搔つ裂きころ喰つさきころ

を始めて、遠くに居るのまで、歯をむいて母に飛びつきさうにしたからいやになつて。

赤い大きな門の中に、赤い大きな提灯の吊てある所へ來た。鳩が提灯の下から出たり入つたりしてゐる。卵があるのだらうと思つた。門の柱との間には、金網を張つて中に牛がゐる。それから白い斑馬も居た。牛は怖かつた。

青い砂、紅い砂、白い砂できれいに掃いた地べたへ繪をかく婆さんがゐた。片肌ぬぎでしなびた乳をぶらんぶらんさせながら、砂を掴んで、指の股からすつすつと落して行つて、義經らしい甲を被つたいくさ人を描いて見せた。その砂が欲しかつたけれど。

母に帶を押へて貰うて、欄干につかまつて下を見下ろす、と低いところにからくり人形の荷を下して休んでる男があつた。赤いいかつげな奴ひげ——白い長い毛のうちかけの奥さまが、臺の竹の上にしをれ切つて。

今おもへば、それは觀音堂の廻廊に立つて見たのらしい。病める兒を護りて人ごみの中を切り拔けるまでに、母はどんなに苦しんだらう。わが初めての觀音詣の裝は、長い袖の黄八丈のきぬで、あたまはぼんの窪を圓く剃つて殘りを垂らしてゐた。金絲でかがつた巾着はまだ母の白木の簞笥に保存してある。寅年の男兒當年五歳と書いた迷子札も入つてゐる。

傀儡師は草色の袴をまち高く穿いて、頭は耳だけ出した角かくし。わきには三味線ひく若い女もゐる。赭面のどてらを着た奴を臺から外して、左の手にはもの〳〵しく槍一本。

これは肥前の唐津より
船に帆かけたくわいらいし

おまんが出るか源五べが出るか
醉狂人の業くれは
お笑ひやるな一人の我ぢやに。

そもそも人形は、京ではそろまと申せども
お江戸で野呂ま、何故痴鈍とおしやるやら……
振れ振れ、渡邊半三は鎗半三
鎗が降らうが矢が流れうが、やつこらさ。
奴が尻を風の吹くまで。

『徳川さまはよい人持ちよ。服部半三は兒半三、渡邊半三は鎗半三、渥美源五は首取源吾』、、、ふれふれ奴が毛んもく槍は空の稲妻水の月と女が歌ふ。

寛々と襠袍の襟を明けて半三が鎗を使ひ出した。眉が柳の蟲の蠢くように動く、髪の毛が草の如く逆に立つ。天を睨む、口を曲げる。

不思議のつらつきをするので、お堂の上に見てゐる子はべそをかき初める。奴は盛んに力で槍を槍をふる。

三味線をひつかき廻してた女は三味線を臺の脇へ吊して角鍔を指した尻からげの人形をとり下し、するりと拔いた竹光で、鎗の奴とわたり合ふ。ちやん〳〵、ばらばら、手もなし刀を跳ねとばされ、そり下げ頭を發止！と鎗で喰はされると、ばかんと顎まで二つに割られて、血みどろの顏のまんなかに穴になつた目玉がぎろぎろと廻轉して突き立つ——。

と見た子は聲をあげて吸はるゝように母親の腰にからみついた。

脅かされてから、おびえ易きわが魂は久しく熱を病んだが、觀音堂下の傀儡師よ

來りて霏々として降る雪の中にふたゝび槍をふらずや。三度足起たずなりし蛭の子は骨凍る楚痛をいだいてまだながらへて居る。

二

多少でも動けば、尻だ腕だと熱いのと衝突つてやけどをしさうだから、母の胸にかぐり凭つてばかりゐた。これは鐵砲風呂といふのですよ、自家にも有ります、お父さんが窮屈がるからたてないけどと母が説明する。湯槽の中から鐵の太い丸い奴がずつと上へ出てるので、手拭を丸めてぴちや〳〵叩くと、そこだけ濡れてすぐまた乾く。濛々と煙立ちこめて誰も誰も來ぬ明るい小さな浴室で、窓からは青い空に引きわたした鐵線が見える。

『あれは何なの』

『あれはね、こゝに居て遠くの人と話するもの。鬚おぢいさんから、今朝もまあちやんに早く歸れ、土橋のとこに待つてるぞと言うて來たよ。』

『虚言！』

『いゝ、虚言ぢやありません、だつてまあちやんはもう治くなつたぢやないか、下駄が穿けるし、獨樂が廻せるし。』と笑うて抱きしめられた。

『さうだ俺は治くなつたんだ』と小さな頭にもそれは信じた。起てぬ足も立つた、白い兎にも嚙まれなくなつた。家へ歸つたら馬に乘つて學校へ行くんだと思つた、きつと四郎がうちで泣いてゐよう、母さんを取り返されるからもつと東京にゐたいなとも思うた。

大きさは鳩の卵ほどゐるビイドロの玉の青いのや赤いのや、餅花のように枝垂柳の枝へ附けたのを天井から吊してふら〳〵動くのを見た、頭は母の膝へ仰向に載せて。

かさ〳〵するけれど母の手は白い、それを掴んで胸の上へ持て來て掌と掌とす

つて見たり、指を逆に曲げて痛がらして見たり、兩岸の家々にぼんやり點つた灯の何處までも何處までも續いてるのも見た、行き合ふ船で黑い炭(石炭?)をぢやりりと大十能へ突つかけては火の中へ入れるのも見た、血が止らないでナイフも梨も眞紅に染めたまゝ手を舵の上にもたせてた蒼い顏の母も見た。

東京より下妻までは陸路十八里、船に乘れば深川の高橋より中川に入り江戸川に出で、溯りて關宿に達し、大利根の流れを横に下總の境へ、境より七里、鬼奴川を渡れば、大寶の森ははやくも眼に落つる、水田遠くつゞいて白き壁黝き茅家、路は村を串いて東筑波に行くのである。

(……都の雲を西に見て、川を常陸に越す舟の、棹かすむるはよしきりかと、歌ひて美しき混血兒をいたんだのはさらに十年ののちであつた。鈴なりに生れる柿の赤々と實ばかり殘つて離には夾桃竹——毒ある草の花やかに咲いた家で、仔馬のいななきはぬる黃金ケ原は櫚の野になつてゐた。)

髯おぢいさんは店——上り鼻の段ばしごの下に大きく跌をかいていらした、忘れたように行燈がぼんやり點つて、神棚と佛樣とにもさゝやかなお燈明が上つてた、としか覺えてゐぬ。

姉さんにお土產にするのだといひながら、病院でおもちやにした大人形は病院で失くしたようにも聞いてる、姉は二歲下の自分を負ひたがつて手ぎはよく負へず泣かし泣かしゝた癖にまだ人形の欲しい年だつた。

怠屈すると附添の看護婦に負はれて燒芋と草雙紙とを買に出るのが日課で、今日は地雷也あしたは白縫とだん〳〵本の溜るのが無性に嬉しかつた、その中に綺麗に彩色までして、イト、イヌ、イカリに初まり、酒と煙草は養生に害ありでおしまひになる小學讀本があつた、初の頁になまいきに髮を分けた若い先生が、キド、キノシシと書ける塗板の前に立つて、下の方には机を并べた生徒がかしこまつて聞いてる繪がある、キノシシはこれと紙をめくつてすぐ見つかるやうになつてた。仁田の四

郎忠常がうしろ向に乘つて刀を尻へ突ッとした毛物だと後で知つた。それから間もなく父が今にキノシシになるぞというて、黑い犬ころ見たいなのを外から貰うて來たことがある、朝起きると、けふはきんばが生たか、けふもまだかと母に聞き聞きしたが、いつまで待つても生へず、尻尾は中坪の市齊先生が髯に似て、卷いてあつて短く、ヴヴと鳴く奴だつた。

キノシシから、シシ、トラ、ヘウとまあちやんは、とう〳〵母さんの膝の上で、小學校初等六級の本を卒業してしまつた。繪がきれいなのでその方へは獨で入門した、○の中へポチポチと點を三つ書いて顏とするのから覺えて、加藤清正の虎退治よしつねの九艘飛などの名畫は、今も東の藏の內壁に殘つてゐる。奧坐敷の壁にも、母の知らぬ間に母の顏が描いてある。床の間の壁には、歷然として巡査の首がころがつてゐる。大坊主小坊主、前藏の白い壁には、腰卷をめぐつて行列を作つてゐる、皆墨だ。なぜあんな落書をしたか、今になつて消さうとしても消えず、人に見られ

るたび羞をつゝかれるような氣がしてしかたがない。棒ちぎれ持つて騷ぐことはせぬ代自分のいたづらは繪具を解くことと筆を嘗めることとに於て極まつてゐた。

太鼓もよく叩いた、勿論人のぢや無い、人のよりはちと大ぶりなので、擔いでも提げても歩けず、しかたなしに、往來をころ〳〵轉がしてとなりへ行くと、椿のよく咲いてる家で、下に稻荷樣があり、その屋根へ上げては、シャンギリやら馬鹿囃やら、何が面白くてかくたびれるまで鳴らした、椿の花をくはへて唇を少しそらして、どうかするとピイと鳴る、源一は花を口にして桴もろ共に鳴らすのが巧みだつた。

朝、雨が降り風が吹くと、腕白の小畫伯は定つてしやくりに苦しんで、泣くことも出來ぬほどに痛めつけられる。さうなると、夜具戸棚の間へ入つて足を縮めて寢てしまうか、家中探し歩いて母を見つけると、倒れるように膝の上に突伏すかした。よく狂ふ時計だと醫師は笑うた。夜は朝とちがつて來るし、今日は昨日と異つて、

壞裂四出、母は手のつけようも無くて、たゞかゝへ通しに明かした夜さへあつたらしい。

けれど自分は、母の乳を弟の唇より奪ひ取つてなほわが物となし得られたよろこびにまぎらかされて、朝に去つて夕に來る苦痛を忘れてゐた。眼を明いて見えるところに母が居れば滿足して、一生をぶちこはした病鬼を憎むことすら知らず、わが生の値なく、わが悲みの慰めらるゝ期なきをさとらず、求めて飲みにくき肝油を飲みつゝ、じつとしてなほる日を待つた。

頭もからだも綿のように疲れてしまつて、辛くてたまらぬ時もあつたが、母の柔かなる眼の光を追うて幼き希望は輝いてゐた。

お才の國へ

一

嫁聟の里歸する日、といふ陰暦正月四日、自分は曉早く筑波の麓を立つた。野はまだ黯く沈んでゐて鳥すら飛ばねど、十二天の森の西に銀色の富士を仰いだ、朗かなる朝。

大寶を驅拔ける頃、あちらこちら萱家の軒に白い煙が見えて、小鮒橋の脇で米炊ぐ女の手がつめたさうであつた。

黑子の千妙寺の森は年々荒くなつて來る、髮の如き大道に十丈の影を落すあまたの杉もだん〳〵に切られるのであらう。宅の菩提所だけれど、死んだつて坊さんなどに用は無い。

寒さうな顏をしたふところ手の小學生が通る、一番あとから女が三人、埃だらけ

の頭をいてふ返に結て、やはり本包をかゝへて行く、通りすがりに白い眼を俥の上へ投げたが、すぐとそらして友達同志くす〳〵と笑ふ。女にならうとするころの女はにくいものだ。

野殿の橋にかゝる、田を隔てて東南にこんもりした森が見える、姉の家だ、森の家！森の館！『姉さんさよなら』と暇乞した。

月下に鳴る太鼓の音を散り來る空の華と聞いたのはをとゝしの祇園に醉茗が常陸に旅せる時の感じであつた、一年を隔つて自分は森のやかたの木がくれに更け行く月を仰ぎつゝ、邦子と共におなじ祇園のはやしを聽いた、蚊遣の烟ゆるく流れて人の膝なるうちはは動くことすくなかつた。泉水の水の音は寂かであつた。

シグナルも霞んで見えぬばかりの驛柵を越して東にぼんやりした筑波が立つてゐる、大寶からは一つとしか見えぬ峰が、男體女體二神東西に岐れ立つて、木は密に影は深い。……

あすこを切らなくちや駄目だ、足尾の背面から沼田へかけて引けばうんと儲かそあなた一つ袒を脱いぢやどうです、金は溜めるばかりが能ぢやないといふ髯。今では山はトンネルの方がわけなく掘れる、切通しは却つて面倒ですといふ脚袢。さうすると現今馬の背中で駄け出す炭や何かもこつちのものとなるわけだな、一つ後藤に話して見ようかなといふ山高。日本の鐵道院を三人で背負てるような話をしてゐる、伊勢崎から乘つた烏打帽まで釣りこまれて妙なアクセントだつたが、何處かで子供を連れたお婆さんの赤切符なのを見つけて車掌にいつけたことを話す、『だつてあなた其お婆さんはあゝ好かつた、三等ぢやあんなにこんでるのにと言つてるんですもの、青と白とを知らないのとは違ふ、あんまりずるいからね。』

頂上まで閃綠岩をごろたに積んだやうな小さな岩舟山を汽車の見える側から崩し採つてゐた。山といへば不二のように輪廓の正しいもの、筑波のように頂上まで木の茂つてるものと思つてた小さい信念は、大きくなるにつれて破れて來たが、それ

と共に巖々たる巨石のかさなり合へる男らしさも初めて知つた。山を壞すといふことは筑波の北、蘆穂、樺の方でも行てゐる、あたら名山を切賣するのはひどい。自分の村には萬葉集に歌はれたる騰波の海(大寶沼)がある、千年湛へ來し水を干して大方田にしたのは去年からで、當時或新聞に『騰波の淡海滅亡す矣』。又『その子はとばのあふみの讃美者、その父は大寶沼の破壞者』との諷刺が出た、自分の父は破壞にあづからぬけれど、名勝を保存せざりし罪は負はねばならぬはめにゐた。美しき毛野の山の、南より北より崩されつつあるを見て心が娛しまない。休んぬるかな。

日光連山と秩父連山とは常陸からはくッついて見えるが、汽車は上毛野下毛野を横斷して、西しつゝ、北しつゝ、武藏の山は南に、雪白き黑髮山を右北に見て轟々と利根を越えた。

河沿の堤に旗など立てて眞黑になるほど人だかりがして、田の畦からも、畠の路からも、林からも藪からも、やい〳〵と寄つて行く、紅い旗、赤い毛布、あかい帶の女も多かつた。汽車は笛を鳴らした。

髯と靴との間に坐つて、初めから口をきかずきちんと澄してゐる若い奧樣があつた、髯から比べると靴の方が若さうだからそれを新婚旅行の相手に見立てておいたら、男はいつの間にか下りて、片方の髯も、一人の脚袢も消えてゐる。

前橋で蜜柑を買つた、見せて喰ふのもきまり惡いから二個だけ敬意を表したら、しとやかに受けてくれた。しばらくしてわきにおいた信玄袋を明けかけるから林檎でも出すのかと見てゐると、水引をかけた紙に半襟らしい紅いの青いのの透いて見えるのを出して、鉛筆で一つ一つのしと書きはじめた。くにどのへ。はなどのへ。さては今日里がへりの君なのであらう。

高崎から一人となる、名知らぬ山を見るともなしに明け放した窓にもたれながら今夜着くTの家の構や細君の顏を想像した。

さらに一歩一歩近づき來る小諸の町と、弟をうしろ手に負ひて好んで小諸の城あ

とをあゆむと言ひしつかさ子をおもつた。Tはつかさ子を奪ひしわが十年の友である。

Tは醉茗と共にわが詩の道の師にして、やごとなき姫宮すら齋宮となつては不犯に終るならひならば、君も望みを捨てて孤獨の世を終へよと言つてくれた。君の病ひは治すべからず、人を迎へてやがて泣かしめんよりは、さびしくともひとり常陸の草にかくれよとまで言つた。つかさ子が背いたのはその言に脅かされたためであつた。

ピストルを懷にして淺間の山を下りながらおめ〳〵と信濃にかへるつかさ子を送るとて『立つは月波の山かへるは淺間の麓、若きはひとり君のみならぬ、夢の姿のはかなさよ、燃ゆらん花の地に落ちて、綠にさむる夏の天』と醉茗が嘆じたのも夢となつた。呪はれたるわが命はなほ有りて。

二

赤城も榛名も何時の間にか見落して、角に切つた氷塊を馬車から何臺ともなく降す磯部を寒い處だと思つた。ふりかへり見る西の方は雲閉ぢて桑畑には烏が啼いてゐる。右の窓に見た尖塔形の山は、車輪千轉、左に移つて碓氷は近づいて來た。雪が降出した。

碓氷の山は霜をおいたやうに皆白かつた。左なる遠き山は凍れる雲を額にして、輝ける日はそなたに落ちたのであらう、だん〳〵とくらくなつて、淺間は峰に這ふ煙の末も見えず、筋交にも横にも入り亂れて雪は降つてゐる。

磊塊たる山の石、葉無き山の木、灰色の山の雲、粉と飛ぶ山の雪！明暗いく度か心憂きトンネルを過ぎて汽車は遲々として信濃に入る。落葉松の林が黑くつゞいてゐる。

熊の平といふ停車場で大きな水盤のふちにつかまつて、髷の上、肩、背と雪でまつ白になりながら子供に水を呑ましてゐる上さんがあつた。水盤のわきには楊らしい木が植えられて、水は始終あふれてゐるらしかつた。

灯が點いたけれど、乘る人はやはり一人も無い、高崎から此方まつたくの獨になつて、たまに扉を開けるものがあるかと思ふと、それは湯タンポを入れかへる驛夫が、小さな草帚を持つて來て、有りもせぬゴミを拂ふ赤帽である。旅客掛りがどうか切符をと言ふたとき、そこにころがつてる帽子に挾んであるからとそつけなく言つて退けたが、捉へて話すればよいものを。

毛布を肩に纏かうとして不圖見ると、ガラスに吹きつかる雪はびたとくつ着いて着くそばから消える、あとから〳〵と白く吹きつけては消える。溶けるのだ。

寂しい。

草の影も木の影も映らずなつたガラスに、ちらと動く光を見る、おぼつかなくも

山の峽に沈まんとする月だつた。雲はちぎれ〳〵草の上を飛ぶ。

嗚呼高原の月。雲多き佐久の平。つかさ子を生み、はゝき木を生み夢殿守を生みし國の冬の月よ。萬人みな背ける中にありて、死にいたるまでわが心を傷つけざりし百合子の墓をまもれる信濃の月よ。

夢殿守は知らず。つかさ子は嫁して○○に有りといひ、はゝき木は桔梗ヶ原に病めりと聞く。……

ひとり百合子は死んだのだ。

百合子が新體詩を初めて作つたからと見せたのが四十二年の一月である、どうせ嫁に行くまでのお慰みだらうとからかつたら、私は肺がいけないのですから嫁きはしません、いつまでも〳〵敎へていたゞくのだと言つた。間もなく七くさ正月に從姉の家でかるたをとつた晩、胸が切なくなつて喀血し、ハンケチを當てたまゝ足袋はだしで家へ戻つてから、どつと寢ついたと覺えてゐる。冬子さんが懇ろに看護

して、あなたが亡くなれば誰れの手にも觸らせずに、わたしがきれいにして送つてやるからと、泣いて慰めたことも聞いた。

が、他手にかけずに淨めてやると誓つた冬子さんは故ありて病める君をおいて遠く肥前に行き、そこから歸れなくなつて亡くなられた。

後るゝこと三日、百合子の魂も眠つたのである、人を見れば叔母さんは？とよく聞く、今來る今來るとすかしてばかり居つたけれど、かなはなくなつて皆に永別の辭をのべ、昏睡に落ちようとしてまた冬子さんを尋ねたので、父君、叔母さんはお前を待つてるから、安心して行けと告げたけれど、其意味はもうわからなかつた、十八の子は童貞にして終つたのである。

百合子の遺書の自分の手に入つた時、山田邦子がそばに居た。

先生もう今日がおしまひ

でございます、これまで、いろ〳〵

わがまゝをいつてすみませんで
した　どーぞお許し下さい
ませ　一人で生れて　一人
で生きて　一人で逝く
私は一人でした　なぜ生れ
たでせう　をばもゐないし
今　私の臨終を見るべく
あつまつた人はありますけど
心つよく手をあつけて逝く人が
ないんですもの、あゝ今
先生　どうしてゐらつしやる
でせう　あひたいわ

先生　さよなら　御大事に
遊ばせ　今死なんとしてはさすがに
おなごりがをしまれます
長く〜〜〜生きてゐらつし
やいませ　死は決してのぞむ
べきものではありません
かたみとして　日記をさし上
たいと思つてゐます
私の最後など誰が先生に
おしらせするかと思ふと
ほんとにしにたくない
わけもなく涙が出て

十八の身
今逝かんとして……
ノートに寫したのはその時の邦子である、覺束なき墨の跡をたづねて一字一句も
とのまゝに、原書は遺族の人に贈つた。從妹から來た手紙も寫さした。
伯母に宛てたまひしお文拜見つかまつり候、ゆり子樣はまつたく亡くなられ候。
私ことは生れ落しよりはたとせ近く、時には諍ひつゝも、共に遊び共に學びたる
いとこに候へば、おうはさは常々承り申候。
三十五日もすむすまずに伯母は須磨へ參り候ため御通知は忘れたりと覺え候、
東京から廻りて常陸へ行つてお目にかゝると申越し候、その折くはしうお聞きあ
そばされたく候。
彼の君は計判の美しきかたにて、うまれつきやさしかりしかど負けることはき
らひに候ひし。

先生の事は非常に心を痛めて、とてもなほらぬものでせうかと醫師に問ひしことを幾度も耳にし申候。臨終の二三時間前にもおうはさをなされ、お寫眞を出して、たうとう私の方が先へ逝きますよとお暇乞なされて靜にほゝえまれ候。

雄一樣はやつと間に合ひ候。少しは泣くやうにて候ひしかど、やがて、しづかに、何の悶えもなく逝きたるはクリスチャンなりしせいかとも存じ候。

日記は十五六のころよりのが半紙にて山と積むほどありしを、いつの間にか自分にてやきすて候よし。

先生のものはお寫眞も、花守も、二十八宿も、お手紙も、みな持つて逝き候、ながき旅路も寂しかるまじく存じ候。

涙こぼれ候。お許したまはるべく候。

はる子

ノートは幾度かひろげて膝の上においた。水戸で柱のかげから見た邦子の帶が描

いてある。こはい兄さんと題した顏の人もある、蚊帳の吊手に風絶えて、夢も吾身もしづかなりと、邦子の手でらくがきがしてある。緣に塗つた金泥が指に着く。

許嫁の人が有つてすら、ひとりで生きて、ひとりで逝くと百合子は泣いた『天地よまづ行くに路無きわが軀をかくせ』とペンシルを走らした、頁はいくらも殘つてない。

『小諸の灯は寂しかつた』と次いだ。

『しなのなるちくまのかはのさゞれ石も』と書いた。

『君が門今ぞすぎ行く出でて見よ』と書いた。

消して、

『苦しきかな、わが記憶は鮮明なり』

と改めた。

『髮の多き』

『おもかげの寂しき、』
『指のかひづめなるを恥ぢたる女』
『衿に針刺すくせある女』
『あからめ過すべき姉の祕事を見て泣きたる女』
『湯上りの軀を鏡にうつして、明日は死ぬる命なるをなげきし女』
『嗚呼十七の寺の子』
『苦しきかなわが記憶は鮮明なり』
『彼れは BITCH なり』
『一たび賣りて足らず、二たび買ひ手を求めし玉のあたひいくばくぞ』
立つて窓をおろした。けたゝましき風の聲が耳に鳴る。

三

その一

信濃のくににまゐり候。

たゞ今北行の汽車の中に在り、寒くなれば麻のきれかけたる湯たんぽの上に坐し、席にかへりては仰向になりてノートにらくがき致し候。灯はあをく點きをり候。

碓氷も淺間もすでに越しぬ、右に山有りや、左に川有りや、月落ちてより窓の外はたゞ怪物の如き闇の走るを見るのみに候。

卒然として彼の羽後の人をおもひ出候。新婚の夢まさにこまやかなるべく候。

夕ぐれ起る木枯に
ちまたは塵のあがれども
水とすみ行く家の中に

居るは二人の無言哉

富士の高根も一頃の
水に縮まる思あり

古き詩歌に目をさらし
倦んずともなき夫のさま

燃々と燃えたる灯に
時の移りは見ゆれども
運びなれてしぬひはりに
妻のしごとの手捷こき

また

妻とはいへど夢のごと
何の氣もなう日を經れば
ほゝえむのみに見かはして
寂しきものは眼かな

あつき心もたぎりおつる
涙もひとの世に見れど
輝かしくも今様の
ふりにならはぬ二人なり

新人、年十八、才色ふたつながら聞えたる君に候ひしが、今、好俤を獲て濱松に在り、戀々の情、慕々の心ねがはくは、松相生に久しかれと祈候。

水の如く流るゝ悲みをいだいて、あをく寂しく搖ける灯に對す、瓦に鴛鴦有り、自雙飛の義を羨む、簾に翡翠を編めり、空しく共會の娛を嘆く。われ豈人を哀れむに暇あらむや。

天馬空を駛くは止みがたきわが心の欲するところ、やがては海を越えて行きて石かりの野に終のすみかを求めんとさへ存じ候ものを、旦月波の麓を去つて、夕淺間に到るほどの道ならばとて、終に母にゆるされて旅立ち候。來ん秋には會津より山形を經、最上川を下りて遠く酒田に入らんとおもひをり候。

所詮は、われを背きしビッチの國を見んが爲に、否ひと度は其山其水其鄕其家に冷笑の目を投げんが爲に候のみ。

知り給ふが如く、わが命は執着に生き、わが心は復讐によりて鋭くさる。

されど君よ、おもへばつたなきは世をひとり行く人の涙に候かな。

獨對寒窻恨明月之易過
孤臥冷席悲長夜之不明

河井幸三郎様　　孤客

その二

早速ながら。

一人ぢや行けなからうから同行してやらうとの御親切を無にしてたうとT君のところへやつて來た、夜になつちやつた『常陸にはまだ曲录据ゑて馬で嫁入するものあるといふが、僕の國では正月には花嫁花聳を上り端(玄關)に据ゑておいて廻禮者に一人一人ひき合せる、それがつまり披露なんだが、しかし僕は弱つたよ』さすが

の豪傑もよほどよわつたと見える、細君に逢つた。

いかゞですか、烏水さま、あなたもその正月にはお雛樣になつたでせう、どの正月などととぼけてはいけない。

君がこの前信州へ來た時鱗つきの鯉を出されて妙な顏をしながら一つ一つ鱗をのけて喰べたといふぢやないか、さう言つてゐた。横濱あたりには鯉はゐないからな、喰べ法を知らないのも尤もだとはちとひどい。其くせ蛸臭いこくしようだ。

實は僕もびつくりした。不意におしかけたのでT先生うしろの田ン中からとつ捕へて來た鱗を取る隙が無かつたのだらうと思つて。

わたしやお前のそばがよいのそばは知らないが、一九の膝栗毛に據ると、信州の人たちは朝起きおくれに赤ん坊の頭ほどのおむすびを嚙るところ、とろゝを摺つた摺鉢へ飯をぶち込んで啜りこむところと覺えてゐたら……あとを何といはう。

雨

小島烏水樣

その三

無事鹽尻着。

高崎よりすわり心のよき室を獨占して寢るも起きるも好きの上、湯たんぽも備へつけてあつたし、そんなにふるへもせずに參れ候。

飯塚からは、停車の度にかはる〳〵出て來て面倒を見てくれ候。三人は明日故郷へ着くべく候。

只今秋君一家の歡迎に包圍されをり候。すべて御安心下さるべく候。

炬燵は客座敷の眞中にこしらへあり、お客をはひらせてからそれから御挨拶をする由に候、主人方も主人方なら來る客もべら棒に寒むがりばかりの國と見え候。

秋君のおつかない顏はピンとした髭によりて一層おつかなくなり候、あつちのが

かかあ、こつちのが妹と若き二人の方に炬燵でひき合はされて繪葉書帳や寫眞帳やを說明していたゞき候へど、顏も寫眞も覺える下から忘れてしまひ申候。

寢る少し前に椽に出申候。風高原の草を鳴らして、星に聲あり。紫かすむ常陸の山はさもあらばあれ、雪白き科野の山もなつかしく覺え申候。

母上様參る　　なるか

その四

Tに逢つた。

逢つて見ると——舊き道の師、十年の友!! やつぱり口が利けなくなつて涙がこぼれた、僕は弱い。自分の幸福を奪ひ、生命を咒ひ、心を傷つけ、情を荒れしめたる常識の紳士!! と手を握り合つて床を丁字形に敷いて貰つてねむくなるまで話をした。

烏水君はまた候行違があつてはならぬからおれが一緒に行かうと心配してくれたけれど、不倶戴天の讐敵といふぢやなし人まぜせぬ方が解決が早いと思つて、單身敵城に乘りこんだだけはあつた。

『君は小諸で僕の命を長いことはないと言つたか』『言つた』『ドクトルSが今まで生きたのさへ不思議なんだつて話したと言つたか』『言つた』『折角かたづいてもすぐ後れるから其ささの若い身のふり方をどうするつて言つたか』『言つた』『親たちの在るうちは僕同樣溫かに保護されようけれど引きつゞいて世を去れば多勢の兄弟から薄遇されるにちがひないと……』『待ちたまへ、僕はたしかに君の希望の一つを破壞したのだから瞑目して怨嗟の聲を聽くけれど、お兄さんなり令弟なりが君たちを薄遇しようなどとゆめにだつて思つたことはない。また言へもしない御兩親が亡くなつてからは氣がねをするのが大へんだらうと言つたまでである。誰に聞いたのか知らないが、途方もない』『……さうか。N君もそれは言つてた、殆人格に關する

ほどのことだし、まさか君がそれまでにさげすむ筈もないとは思つてたが……』つとめて冷靜の態度を保たうとしたけれど、呼吸が逸んで聲が出なくなつた。つと枕をのけて布團の上へすわつた。歩かれるなら庭へ出たい、野へ出たい、峰といはず尾といはず路をたづねて山の中へ行つてしまひたいと思つた。

君、風をひくよ、折角來さしてわづらひつかれちや、常陸のお母さんにすまないから、横になつてくれたまへ、冗談ぢやないよといふのをきかず枕もとのカバンをひきよせてかくしから一封の書をより出した、枕に顎をあてて腹ん這ひになつてる人に見てくれと渡す。

……今は悲しいかな本人の心が動いた先を案じてやはり君と兄妹として交りたい、兩親の悲みを見て行くことはできぬ、家に背いては嫁かれないと言つて來た、おどされて恐ろしくなつたのだ。兄妹として交はりたいといふやうな平凡なことは僕の取次を待たぬ、僕は世間並の仲人をしようとしてたのではない、空想を實

現して、明治文學史の奇蹟を作らうとしたのだ、むざ〳〵と失敗してしまつた。君よ、Tを怨みたまふな、つかさ子をもうらみたまふな、たゞ君自身の不運をなげきたまへ、再『神も佛も』を作つたむかしにかへつて、泣きたまへ。僕も今朝つかさ子の手紙を見て君の爲に心から湧く涙を禁じ得なかつた。

遠慮なくいふ。

君の運命はすでに盡けり、本氣になつて一切の煩惱を捨て、あらゆる憧憬を忘れて、新しき『生』の立場に立ち、君の筆と君の聲とを以て『人』を呪ひたまへ、而して世を救ふの人になりたまはずや。

度すべからざるは女子なり、似而非同情を甘受せんよりは、むしろ憫むべき彼等低級の人間に同情せよ。

Tは我等より賢なり、沈默するの更に賢なるに若かず。

六月二十六日夕

二人の握手はかうして成立したのだ。

君が豫言の通りならおれは今ごろ墓木が雨ざらしになつてるのだ、字は遺言して君に書かせるつもりだつたといふと、『何だ馬鹿な』といふ。

『鎗にも鐵砲にも『常識』を使つて僕の空想を叩きこはしてくれたが、おかげで大分利口になつた、自分は妻帶してゐながら他には不犯――『齋宮』たるをすゝめるかと嘲つたのが氣になつてすまないと思ふ。努力の結果長いことはないと言つた君の言に復讐はできた、けれど僕の世にはぐれて來た生涯はかへつて君にうら切らうとしてゐるのだから詮がない。かしこい人の目から見たら戀などするのは阿呆だ、その爲に泣いたり笑つたりするに至つては痴愚の骨頂であらう、しかし人は百尺竿頭一歩を進めて結婚は愚劣のわざだとなぜ言はないのだらう。かんにんしてくれ、君には細君がある。細君があるからことさらに罵倒するのではない僕の深刻なる印

象に據れば、女といふ女は誓約の尊いことを知らない、昨祭壇に供へたいけにへを下げて今また新しき神に捧げて平氣でゐる、一度人に賣つた貞操を斷りなしに又賣して代價を受取つてゐる。刹那の衝動を追ひて全心全靈を無視するとならそれは別問題だが、女はことごとく娼婦では無い……』言ひかけてはつとした、何といふ暴言であらう。現代的女の多くは舊道德には縛られたくない、花やかに生れた上は花やかに暮したいやうに考へてゐるが、心から一人の夫に賴るのと、媚をふたりの男に賣るのと、どちらが女の恥か。自分は法を執る判官ではない、また人の個性を批判する能力も無いけれど、みづから其軀のなほ他にゆるさざりしを誇りとして嫁ぐ女ありとせよ、而してその心には過去の時代にすでに相許しゝ人ありきとせよ、處女の價値奈邊にか有る。

けれどTは何ともいはなかつた。遣方なきわが痛恨と寂寥とを知りて、冷笑熱罵わづかに慰めてゐるのだと思つたであらう。

かつて光明にあこがれ、詩歌にあこがれ、花を愛し戀を戀した時代があつた、そして皆破れた。君よ、わが惝恍は皆空想だつたのだ。

冷笑すれど、心にこゝろよきは畢竟一時のみ。かぞへ來れば、Eや、Yや、Kや、Eや、むなしく殘酷なる印象をとゞめて、道すでに千里。わが涙つひに湧かざるを得むや。

一色義朗樣　　虎壽

四

丸い光の輪が天井に映つてゐる、炬燵の上へ吊したランプはもう白茶けて見えるやうになつた。

夜明に寒くなるよと嚇かしたS君は、頭も髭も布團に埋めて動きさうにもしない鷄はさつき鳴いた。

三枚のかけ布團のうち一枚だけは願ひ下にして、彦太郎同樣炬燵へ足を入れてねなすたら？と勸めた細君の親切を斥けた罰かして、てきめんに寒くなつて來た。

手をのべて上の毛布をたくしあげる、少し出すぎた夜着の衿が鼻にかぶさつてひやとする、けれど重いからなほしようがない。

欄間の刳物にちらと次の式敷の灯が動いた、襖にさはる物音もする。K子さんが起きたのであらう、ねくたれし髪を梳くにしても、手さへ龜む曉である。

夜着に呼吸がかゝると小さな水滴になる位は常陸にもある、冬の常陸は雪は滅多に降らぬ代、西風が寒い。何を探すか鴉がよく田へ下りる、地鼠は穴に潛みて出でねど、鶉のかくれ家なる草は枯れて、列を爲して南へ南へと飛ぶ雁の聲は朝毎に聞かれる。煙絶え塵をさまりて、天青く、地しづかなり。

まれに降れば、犬の叔母さんがやつて來た、ほうとはやしては縁側を跳りゐるいたものだ。母と共に馬に乘せられて八重十文字に降る中を田甫にかゝつて手も足もどゞめいろ(紫がゝつた土色)にしたこともある、誰だつたかに百舌鳥の瞼を絲で縫つて貰ひ、觀音堂のはだかの木(猿すべり)へ宿らせて、黏を袖へつけて雪でこすつて落さうとあせつたこともある、學校のかへりにひとり降りつめられて堀も橋もたゞ眞白になつて野の中を村を目あてに辿つたこともある。來るべき運命の非なるをさとり得ざりし十二十三の頃は、悲痛にのみは囚へられてゐなかつた。

そして雪がふると姉さんとよく燈籠をこしらへた、手をまつ赤にしながら、幾個も幾個もこしらへるそばで『これ、火をつけンのかい、とろけはしないかい、どこへ建てるの、ほとけさま(佛壇)?』とうるさく聞くので、まあちやんは何でもくどぎゝだねと叱られては、おてさんはよくおこると甚不平だつたことも覺えてゐる、われ〳〵姉弟にはかねのどびんで通つてゐる錫の急須へ入るだけ雪をつめて、炬燵へかけて、おてさんもう溶たらう見てくれと櫓の下ばかり氣にして、蓋が凍りついて取れなくなるので、かはる〴〵齒でぐるりを嚙んだこともあり、三尺ばかりの桑の燃えさしを釜所から持出して來て縫絲をつけて、先きへX形の木ぎれをしばりつけ、縁側から雪を釣つたこともある。

度々降つて一年に三度、二尺から積ることは、十年に一ぺんも無い、筑波の紫は三冬なほ色を變へぬから餓ゑて梢に啼く猿もない、二月菜の花咲き、三月すみれが匂ふ、春ははやくより常陸少女を醉はしめて、姉は十五にして人に嫁いだ『受くればたまる沫雪の、輕きを打ちて丸めなす、雪燈籠は脆くとも、灯入れて君の眉を見む』

K子は靜なる女である、海無き國に生れていまだ漠漫たる水の大いさを知らぬ女である、北大蓮華、東鉢伏、山はこの人を守りて、風も雲も雨も霧も、路に跳ぶ蛙

の聲も、草にからむ晝顔の花も、皆其夢を靜かならしめたのであらう。

天上の星の悉く北に拱き、人間水の東せざるは無きが如く、K子も亦まさに人の妻たるべく行かうとするのである。

お母さんのようには慣れてないから上手にしめて上げることができませんけれど

と言ひながら、肩につかまらして帶を卷いてくれた。手を曳いて、てうづの湯を汲んである緣へ誘うてもくれた。

寸斷されしわが心をおもひ、靜かなる女のしづかなるあこがれをおもへば、寂しいかな自分は世にはぐれたる一人子である。

三山、秋の水凍みて
凋落きざす木々の色
木立の奥のふかぶかと

見よ蠱として立つ白かんば
な白き脛、細き腕に木暗背負ひて
朝は『休息』奪はると
暮は『くらやみ』攻め寄すと
戰きつゝ慄へつゝ
幽なるどよみつくりて連るを
川霧は白々と
明方の萬象に
覆するバラヒンペーパー
そここゝに毀みありげに
黑き森

黒き森、黒き森
強きキスにわが瞳ひたと吸はれて
痛かりき涙流れき
しかはあれど

ほのぼのと黒き影に添ひ
眞白き、然して
なげき隙なき姿浮び來ぬ
誰か知るこの明方を——
紅きといふ溫きといふ
すべてを包める少女ありて

野のたゞ中に裳すそとり
しづかにをどる魂を
際涯なき宇宙の心に調じ合して
溶けも見む念願有つとは
是彼れなり。

釧路の沖の龍卷に
放らかされし海百合の子
七つは君の家におちて
乙姫の手心の
玉と曇る七人の
中の姉と生れけむ

わが母のひろひしは
一粒なれば今年迄
君と違ひしはるあきの
寂しかりけり一人子は

核ごと溶かす山梔色を
山の花なる桔梗色を
紫といひ黄といふと
教へられつゝ不思議やな
君は教へし人なればか
戀築くべく生れ來て
すぐに二十の年となり

今、笄を髪に挿し
花ふり花ふる灯の中に
羞かしさうにおはします

ノートを見せると、いきなりひつたくつて、『あなたは私の「眞」まで疑ふのですか、よくいぢめるのね、けれどちつともうらめしくは無いの』と言ひ言ひペンシルを走らして、

海渡り行くこの女
心の鞭の強きを見よ
命傾けなげきよる
人の一人われからすてゝ

神もかくれし吾心
遠く離る

見つむれど行手はろばろ
三千里外、すがらんは情の手
吾は母ともなりぬべき
人の一人つひにはなる
離れ去んで悲しき思ひ
母あれど、父あれど

指輪に寶石の數入れて贈りこす人
唇を紙にうつしてさゝやく情

それらには心うつらず
たゞ海の外に
強きまずらを、
強く立つべく
われは行く

とうたふ。

滅びんとする青春の命をおもへば、しづかなる女にもこの涙なかるべからず、鸞鳳の圖を心に忍がいて花くれなゐなるエデンをのみおもふ女ならば人いかで泣くべき。

吁空想の天地は奈地、しづかなる女も終に行く。

『私は女だから女にくみしたい、あなたのイリユージョンを破つたRさんは本當の女ではない、Yさんは危ない人、杼の鐘を衝いて葬りの歌をうたうた方はどなたか

知らないけれど――』と云ふ、『女の中にもまことの人がある、まことの涙を有つてるものもある、あなたはすべてを否定なさるけれど、一たび人を欺いて足れりとせず、へい氣で他に逝く人は或るときぐは羞しさに死なゝければなるまいとおもひますみんながみんな娼婦ではないもの、個性を認めて下すつたらどんなに嬉しいでせう、けれどもうあなたの心は人を疑ふうたがひに充ちていらすでせう、いつはりの誓ひを立てた女は、またいつはりの結婚をも敢てしたけれど、かへりみてむかしの戀を思つたらどの顔を他に向けませう、それでも十年二十年の後には子どもに貞操といふことををしへるでせうか』といふ。

自分は應へなかつた。鉛筆を拾つて『神は彼をゆるさん』と書いて止めた。K子はじつとペンシルの尖をみつめてゐた。

五

暖かき光を追ひて三冬なほ花咲く竺志に行ける君よわれは呪はれし命を護りて野篠生ふる信濃に來れり。昨日は秋和の人を千曲川の上にたづね、今日は紫の帶した る桔梗ヶ原の子と別れ、而していまお才が國に赴かんとす。

昨夜月清かりき。天飈絶えて纖雲うごかず。烏の首を高く吊りたるくすり屋も見き、萬龍の眉も目も雨にさらさるゝ酒やも見き、行人稀なる町を過ぎて鹽尻の在に入らんとせし時、七日あまりの月はわがひとりの路を照ししなり、唯看る宵海より來るを、いづくんぞ知らむ曉雲に沒するを。

天は吾れを容れず、地もまた吾をいこはしめず、人つひにかくさんや、あゝ人つひにかくさんや。

君が病ひの癒えん事を禱る。

S兄

冢中骨

お才が『三國峠の阻路を越えて歸るは何時ぢややら』と歌うた頃は北越鐵道は通じなかつた。新婚後たゞちに起ちて石油事業に身を投じたる兄も、沼田より三國峠を越えて北の方古志の野に下りたのである、今自分は吾妻白根の山々に白く置ける雪を仰いですたれたる街道の冬けしきを想うて見た。『躍りこめ蹴こめ下駄の前歯の折れるまで』をどり狂ふて、月下を過ぐる行旅の人——わが長塚節君を驚かした中津川盆地の煙も見えず。汽車は千曲川の溪谷を沿ひ、山を繞り山を卷いて、まつしぐらに北に走つてゐる、國境近くに戸隱がある筈だと、左の窓を睨んでゐたけれど近きはたゞ白く遠きは鼠幕のやうな雪雲につゝまれて山ははつきりしない。

『昨日の輕井澤が勿體ぶつた圖たら無かつたね、奏任驛長で候が聞いて呆れらァ、これで以てわれ〳〵迄劔を下げたらよく見えて海軍だ』『さうさ大臣もつまらぬことを考へたからね』『繰延もいゝがあまりけちけちして服まで古物でがまんさせろはひ

どい』などゝ其筋の役人ばかり乘り合ひて、お客さまは自分ひとりだ。左側に毛布を敷いて坐つてた一人が、一枚だけ明つぱなしになつてるガラスを上げうとするけれど氷りついて動かぬのでやつきとせゝつてるのである、いつか雲晴れて頭を出した高い山を指して、あれがあの黑姫ですかと聞くと、さうですと言つたのが、さうぢやないと言つたやうに聞こえた。

驛長連は長野で皆下りてまた一人となる。『巴里』をひろげたり閉ぢたり、一つには山も川も見のがすまいとするから、眼はとかく窓に引かれる。どこまで行つても右の山は低く、左の山は高く且深い、左の方が遠いからであらう。

柏原に入る。雪が積つてる。關へ來ると停車場の木柵が埋つて近い人家はまん丸く雪の上へ据ゑたやうに立つて家根の雪と軒下の雪の間にやつと壁が見えるだけ、煙一つのぼつてゐない、人の動いてるのは停車場の中ばかりだ、それも驛夫が三々五々腰まで漬つてあちこちするだけだ、大きな聲をするものも無い。

高田。高田は長岡と相竢つて雪の名所として知られてゐる、案のでう汽車が動かなくなつた。直江津から來るのを待合すのだともいひ、線路が埋つちまつて雪かき最中だともいふ。着いたばかりには蓄音器を持ちこました羽織の人、何したのか顔中白布を卷いた外套の人、プラットホームまで見送りに來てシーヨルも髪も雪片だらけになつて立つてる美人、その前へこれはまたうんと立ちはだかつて、裾をひろげて立ちながら雪を消してる婆。湯タンポを自分の足元へ搔きよせてあたつてるのも紳士なれば髭のさきへ氷れる水涕を傳はらして知らずにゐるのも紳士である。撫肩の寒さうにして窓の下に立つてるいてふ返しは、どの紳士に目をくはしてゐたのか見おとした。

藁の蓆を半裂にしてチャンチャンコのやうに仕たのを着て頰かぶりしてる男があつた。藤蔓で編むだのであらう大きさは鍋蓋ぐらゐで、圓い中を八重にからんだ物を足の下に穿いてるのもある。滿洲の馬賊が穿きさうな重くるしい藁沓をどたりど

たりと踏み鳴らして行くのもある。

わらぐつを見てふと業半を思ふ、忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは、馬ぢやない牛でもない、どうしても藁沓だ。

ところどころに立つてる雪除けはきりぎりす籠のやうで、ギリヤク土人の家とも違ふことは違ふが、横に重ねた板のすき間から雪はめつた吹きこむから、柱は上から下まで片かはだけ一樣に白く、やはりすき間だらけの天井(屋根?のうち)にも吹きこんだのが白くくつ着いてゐる。ガラスに當る雪片は分明に六稜角をあらはせど、すぐ溶けた氷の小片となつてへばりつく。スチユームの湯氣でぽつとする內面のガラスは拭いても、そと側の氷片は手がつけられぬ、牡丹の花のやうに大きなのが降つたり、粉となつて渦卷いたり、照つても降り、曇つても降る。

行く行く人家の屋根には人が乘つてゐる、穀押に似た木で造つた四角な杓子で雪を尺立方位づゝに切つては投げ下す。箒で掃くのは天から降る灰かぐら、灰かぐ

らは下から上へ昇るものだけれど、兎に角白たへの雪を埃あつかひにしてるのはあつたらだ。あゝして庭へ家の棟よりも高く積んでは、春風春水一時に來らば人家は海の底に沈まねばなるまい。

汽車は小便たれ〳〵行く牛よりも遲くなつた。或停車場では踏み固めた雪が鏡のやうにすべるといふのでプラットホームでない所へ止つた、驛夫の或者は例の藤蔓で編んだ鍋蓋を穿いて胸まで埋まつて、雪を踏づけてゐる。足を揚げてづと一つ踏むと雪に大きな穴が明く、づとづと泳ぐやうにして踏んでるうちに切りどほしができる、初め頭だけのが胸が出て、握りかためたかなこぶしが見えて、全身があらはれて來る。裾に袖にへばりつく雪は足を二三度踏みならすとばらばら落ちるのであつた。

直江津からは海が見える筈だと思つて、雲はれて日ざしあさらかなる窓の左側をのみ注意してゐた、蓮だか葦だかの枯葉があをい水にそよいでる堀割があつたきり、

町の一角を突破したれど海は見えず、松原がただ雪の中に續いてゐた。

六

雪の野は長く續いてゐた。頭をガラス窓にもたしかけて、行つても〳〵白い山白い木天地一色の白を見るばかり、『さあさ押せおせ下の關までも押せばにがたが近くなる』にがた女郎衆は碇か綱かけさも出舟を二そとめた、』口の中でよい加減に節を伸縮して汽車の進行に合して、そつとうたつて見た。たいくつしたのである。愛、宕の山に入殘る月を旅路の友として……。

海は鉢崎近くで初めて見た。築き立てたように兩側に連れる雪のつゝみを突破して、直にあをぐろき海の岸に出たのである。

鐵路を走る汽車の音の轟々たるにまぎれもせず沖より來る海のひゞきを聞き。はろ〳〵としべりやのくにかけて見る目のかぎり舟一つ行かず、鷗の影すらささず、

たゞ水と天と。

浪打際は柔かき曲線を描いて、雪は渚の巖の上に段段をなして積つてゐる。白く碧く且つ黄に、捲き回す泡浪は、岩の上に踴り上つては崩れ躍り上つては崩れる。浪の觸るるあたり雪は皆消えて、天は鼠色の雲の幾重にもたなびけるすき間から爛爛たる日の光の矢を落とさうとしてゐる。あをく黄を帶びた水が海一面に脹れ上つてはあとから〳〵白い泡を嚙みながら遠くより陸をのぞんで走つて來るのだ。

嗚呼日本海！胡沙吹く風に煽られて、冬は鳥だに飛ぶを憚る北の海！　空は絶えず曇り地はつねに雪ふる北國の海よ、わが行く道は新津に果つれど、新潟よりさらに北、海に添ふて念珠が關を越え、行く行く荒れ狂ふ浪に枕すれば、飽浦の濱の埋れ草、飽浦の濱にはわがおもかげに見るひとつまあり……。

海を戀ひ海を慕うて若き心を踴らしながらなほ降り得ざる山の女——太田きし子をいたんで、飽浦に來よ暗き海の色、暗き海の聲、冬の海を見しめんと慰めたのも

『ひとづま』であつた。或時は紅燈の下に人に侍してあけの袂を翻して舞ひもせし利根河畔の若杉はま子と、共に海に沈まんと契つたのも『ひとづま』であつた。

雨の舞子を行きなやみながら、煙の中の五劔山を仰ぎし時も、砂白き大和川を越えてちぬの浦曲におもたき足を曳きし時も、あたゝかに、柔かに、海はわが心を浸しき、南、常陸の海は明るく、おき津はま松の海もあをきに、暗きかな北の海！

やぶれたる憧憬よ、海をなつかしきものにしたのは疇昔であつた。

たける浪、くるふ浪、さらに浪と爭へる巖を見る、浪のかぶる巖は雪消えて、黝く、浪の底にかくるゝ巖は浪靜まれば紫に、高く立てるはあぐらを組める羅漢達か、低く頭のみあらはせるは鰭の尖れる海豚とも見える。

浪を打ち、巖をたゝいてはひとり海を怒らしむるばかりか、夏から秋へかけては乾き切つた砂を吹き上げ吹きためて、目も明かれぬまでに人を打つといふので、海岸よりにずつと板塀をめぐらして海をかくした停車場があつた。砂は知らず、一夜

の中に二尺も三尺も積る雪が、辛き海のけぶりを伴ひて、今、列車を襲ふたら？と思つた、文目もわかぬ暗ならで、突きすゝむは雲の峰か霧の海か……。

ふと霞に浮べる筑波をおもふ、母の顔が頭の中に浮んですぐ消えた。

高田で蓄音器を掛ち込んで向う側へ座つた男、いつかなめこい毛布にくるまつて長々と仰にねそべつた。肱かけの外へはみ出してる頭には二の字がたの禿がついてる。東京歸の若旦那珍らしい物を家づとに買つて來たのだと睨んだ、煙草をふかさぬのは感心だが、だらくはしさうな肌合だ、反對の側に痩せた洋服がゐる、本を讀むぢやなし、窓に凭るでもなし、始終靴を湯タンポの下へ入れてだまりこくつて人を見る。

WCの建札は雪の中へ斜にかしがつてゐる。鯨波は海水浴の盛り場だといふが、今は海岸に人の子一人通らず、黒い巖が浪をかぶつて立つてるばかりだ。

中等はあつたかかッぺなと呟いて窓の下を通る婆さんがある、淺黄に染めた眞綿

の三角なのを肩にあてゝゐた。

窓へ腰をかけるやうにしてのび上ると海が見える。やはり暗い雲が沖を罩めてゐる。動くのは浪のうねうね白く立つて、暗くかゞやける沖の雲、大魚の群の突進するに似たる沖の浪、目ははるかなるながめに疲れて、心はだんだん沈んで來た。

朝から卵のうでたのを一つ割つたまゝ雪の中を長く行くせいか腹がしくしく痛んで來た。

任他、憂さ身世にいくばくの苦楚に堪へ得るか、一つには小室より淺間の煙の東するを見、二つには暗くしづめる日本海の光を見べく、われから放り出した命である。生れて三十三年、一日として明るい生活を送つたこともなかつたし、母の爲に生くるが生の全部か、人を呪ひ人を咀ふがせめてもの復讐か、それすら知らぬ。孑身孤立、無期にわたるわが涙をかなしむ。むかしは夢にあはゞ死なんと契れる人があつた。

夢にあはば死ぬといひしか、あひければ死なんとはいはず、二夜さながら
あはゞ泣く君とおもひし、うつむきてもの言はむ人とおもはむやわれ
『今日こそ』頬とすれ〳〵に眉をよせて『來つ』と告げたる夢のりう子は
落ちんとするかしらかかへて袖ながら纏かしめし手のしなやかなるも
釋くは七重袴のしたのしづり帶、ほそきを恥ぢてぬか伏せてありし
おなじ舌におなじ契約をのするらむ、あはれむかしの、今のひとづま

たとへ汝王の后とめさるともひざまづくべきわれと思ふや
わが握れる祕密は他に語るべからず、かへりみれば信濃の山は雪ぐもり空遠けれど、彼のひとづまに代りてわが夢を守りし人すらいたづらなる冷笑をとゞめて去つたのである。
むざんなる印象なりしかな。
自分ははじめて女子の通性を知つて、その純潔とその貞操とに對する惝恍を棄てた。娼妓をあはれむに先だちて人の妻をいたまねばならぬこともさとり得た。必要なきに身を夫の家に賣る人妻と、萬止むをえずして涙をつゝんで辻に立つ人と・・・・
笑止なるかな女に何が有る。
澁色に塗つた石油タンクの遠く近く突つ立てるのは柏崎である、かねの手に建て

られた倉庫の家根が海にまだ續いて、はては淼々たる水となつてゐる、家根は白く、四壁は煤に海はやゝ底光のする鉛いろを湛へて。

柏崎から路南に折れて一歩一歩日はやうやく暗れはじめた、けれど米山のトンネルのべらぼうに長い暗やみを通る時も灯はつけなかつた。一つの草も見ず一本の木も生えてゐぬ廣つぱを信濃川と知らずに越えた時もまだ點けなかつた。さあさ參りましよ米山の藥師と甚句に殘れるよね山は嫂さんは歩いて通つた、お才も歩いて通つた。山百合がたくさん咲いてゝそれや綺麗でしたとお郁さんは語つたけれど、雪の中に咲く彼岸花すらまだ出ぬ。トンネル掘の坑夫等にからかはれ嬲られて泣き泣き通りぬけたお才は十五であつた。足の底から傳はつて來て頭から肩から全身を搖る大音響。トンネルぐらゐ氣もちの惡いものは無いのに、短いのゝ幾つも連なれる碓氷と違つて、一つのくせに長いし、黑暗々たる大鐵橋の上をくろがねの車が轉がつて行くのだ。

直江津には巾着を編むことの上手なKがゐる。長岡に近づくにつれて千手町のSを思ふ、北越美人のタイプを備へてゐる女だ。はげしい文章を書く時もあるかはり、山も川も無き無法の詩を作る。停車場に侍つてくれるかも？と思つたが、またも雪が降り出して、珍らしくもなき立往生を喰はされた。長岡のプラットホームは建物からはずつと離てゐるので洋傘をつぼめたなり、汽車の中へかけ込むとようなたやすいことにはいかない。見送に來たらしい四五人の洋服が外套を頭巾ごと冠つて窓の下に立つてる、頭巾も白く袖も白く裾も白く、言ひ合したように三々五々二三間づゝ歩きながら車中の人と語る。新潟へ着くまでには四時間おくれますと驛夫が告げゐるく。

物賣の聲も何となく寂しい。一人偉丈なる新聞賣があつた。陣笠の小さいのを顎のくびれるまでに締めてかぶつて、しんぶーん、たいようとうなるように言ふのがその男の口から出る聲とは思へず、窓をうそうそと覗きこむ目が大きく、唇は微動

だにせない、素手にかゝへた新聞は一枚も賣れなかつた。

列車の家根を人が歩いてランプが下げられた。柵を透して沈んだように雪の中に暮れ行く町にも灯がはひつた。雪はます〳〵降る……。

こらこら、まだ早い〳〵。

簑笠でたちの男女あり。女は底すぼまりの籠を負ひ男は手ん手に木の鋤を杖ついて十五六人、箱の前を後から前の方へ過ぎようとするのだ、笠も簑も雪だらけになつて……。

もつと片づけてから歸らなくちやいかん、見ろ汽車はこの通り動けなくなつてる、あとから來るのもかうなるんだから、冷たからうが皆きれいにしてくれと驛長に喰ひ止られてあと戻りさせられるのであつた、旦那さん、わしらァだけも歸らしておくんなさいやあとでも言ふのであらう、ちつとも美人國の美人らしくもなき嬶たちがじぶくつて、どつこいしよと軒下に簑ながら籠ながらねしかるものもあつたが、慰

撫いたらざるなき旦那さんに免じて皆戻る。笑ひたいような泣きたいような面を笠の下にかくして大股にかへり行くほゝかぶりの男もある。

降つたる雪かなと嘆ずるまでもなく、ステーションの内外雪は三尺積つたのか四尺積んだのか、どこを見ても土の色が無い、風吹けば綾に、風止めば縱にかげろふの天切り飛ぶが如く、うんかの目を打ち眉をかすむるが如く、霏々として降る雪の中をば一町ほどあと戻りして線路に下り立つた手あひは、男は一人一人女をそばに立たしておいて背後から背負つてる籠の中へ撈つて入れる。女は懷手して雪の一杯になるのを待つてはわきへ行つて撒ける、若い女でもあつたら籠へ入れるふりして笠の上へ撒きはせぬかともうれふる。

長岡は兄が新婚後第一に足跡を印した土地である、嫂の嫁いだのは自分が二度目に足の起たなくなつた年で十八であつた。春まだ淺きささらぎの夜を、點しつらねた大らふそくの光のかげに美しき人として見たのも、明くる日の朝次の間の障子のき

はに立つて花やかな姿を驚きの眼を以て見たのも皆十五年の前である、郁さんはよめ入りて六ヶ月と經たずにはる〳〵と兄のあとを追うて長岡へ來るまで自分の唯一の友であつた。よく手をひかれてはお室へ遊びに行つた、わたしたばこが呑みたい、お母さまに叱られるか知ら？と笑ひながら言ひ〳〵した、八歳から覺えたのだといふ、よくおこられるので戸棚へ入つて呑んだのを見つかつて、それからうちでは許されてゐたのといふから、ぢやお上んなさい、内しよにして上げますとすすめたけれどついぞ烟管を手にしたのを見なんだ。長岡では荒屋敷に一家を構へて若い主婦として買物になども出たといふし、雨の夕、雪の朝、郁子さんを見た人も現に長岡に在らねばならぬ。こちらの女は四十になつても六十になつてもぴちやんこの島田を結ふ、丸髷の人は外來人の證據なので、わたしなどもやはりよその人なのでございましたと今でも寂しがつていふ。ぴちやんこに結ふのでは氣がないが、六十七十の婆さん達がどういふ顔で島田を頭へのせておくか、あひにく雪掻の女連は手拭で

顔を包んだ上に笠が邪魔になる……。

五時深沈としてたそがるゝ雪の長岡をうしろにした。行々線路をさしはさんで、鋤を荷ひ籠を負ひて立てる幾十幾百の男女に護られ、轟々、殷々、ひゞきを雪の大野に傳へて汽車はまつしぐらに進む、危く窓へ壓され落ちやうとするまでに雪の積れる處もあつた、脚下たゞちに谷？に臨んでほの暗き木立の中を行く處もあつた。川にあへど水の音を聞かず、藪をくゞれど折れ笹のひゞきを知らず、萱家の窓の七つ八つ赤く洩るゝ火をのぞみつゝ、滿天滿地の雪に心をおびやかされつつ、荒凉たるかなわがたびの路。

蒼然として遠くより暮るゝ松原があつた。一帶の山林、木くらく地白く、雪の野はまさに夜天の帷につゝまれんとするころ、頭を手拭ようの白いもので包んでトンビを着た人が向うから來る、バツバツと雪を蹴つてたゞひとり急いで來る、裾のひらくのが女らしいけれど、見る見る人は歩みおくれて、林や、森や、影たちまち消

えて雪の夕やみ、雪の夜となつた。

七

向うの座敷でたたきをかける音がする。障子は上の方だけ白くなつて來た。やがて鳥も飛び煙も這はう。寒かりし雪の一夜よ。

縁側寄の柱に背をもたして戸の明くのをただ待つた。退き切らぬ暗の色はまだ室を罩めて、床の大幅も山か雲かはつきりせず、壁の方へ建廻した金屏風の金の色がおも〳〵しう輝いて、冷たい朝である。

すつぽりと脱けた寢床には人が居るようにも見える。今まで自分が睡つてた溫柔郷と思へばなつかしいが、枕元には洋鐵臺の安つぽい不釣合な臺ランプが立つて、『美術大觀』が黄ふくさの上に廣げたままになつてゐる。

だん〳〵明るくなるにつれて、襖の金箔や二樅草蘆の額をかけた欄間の刳物やが

見えて來る、三分通の減つたランプの壺の葡萄色の油も透く、二枚襲ねたかいまきの花やかな色、柔かい夜具の袖に白く拔いた桔梗の模樣……。

ビール正宗アンバン屋が帽を引くり返して忽赤帽になつた、俥が一臺も無くて小さな橇が人を載せて歩いてゐた。戸を閉め切つた待合室の土間でじん〴〵と火を焚いてどてらの手合が股をひろげてあたつてゐた、汽車は雪に凍てたレールの上をなめらかにしなやかに辷つて、沈々たる夜の新津に自分を運んだのである。橋すら架けぬレールを横ぎつて雪の夜北國の一寒驛に下り立つた時は寂しかつた。

迎への人は一人も來てゐない。

田家の吉川からも柄目木の眞柄からも誰一人出てゐなかつたのだ、亡くなつた眞柄道三郎さんのうちなら上の旦那でせう、さつき茨城縣のお客を待つんだつて人が來て居りました。なあに一里はありません、俥は出ない。橇にしますか初めてですかなどゝからかふようなれどさすがに股火の連中は遠來の客を慰めて口口に問ふ。

停車場は森として窓より見た町は雪白々と更けてゐたのだ。

一二等待合室には皎々たる瓦斯の灯のみ、卓の上には新聞が二つ三つ斜におかれたまま人は一人もゐない。

不圖入口の扉が明いて提灯二つ三つ。はッはッと白い息を吐いて年よりらしいのや若いのやショールを着た女や這入て來た。

『奥のあんちやんだ、』

『母ちやん、あれ』

好一とたかと先づ聲を上げてかけて來た。お才と其父と其叔父と……。

『まあ遲う厶いましたね、汽車が通らなくなつたなんて言ふもんだからどうかと思つてましか、嘸か寒かつたでせうに』頭巾を脱ぎながらお才。』

眞柄と記せる提灯も來た。其紋が不思議に今思ひ出せない、どんなにか待つてて見つけた提灯なのだけれど忘れてしまつて。

はたきの音は一間一間近づいて、わが凭れる柱と直角を爲せる側の障子に人の影が映つた。そと寄りて中をうかがふらしかつたが、それを音せぬように明けてつと中へ入つて來た、あねさま冠の下から髪のはしがこぼれてゐた……。

それから……。

雨戸を明けてくれた。皆槇の一枚板なのよと言つてたようだが、上半分は障子になつて樞の穴もさゝ毛立つてゐた。雨戸の外には目の荒い格子戸がある、上の方はおつ通しに三尺位明いてゐる。おれが盗人なら格子を傳つて行て、雨戸の上の方から入れるような構だ。

庭は雪。

瓢箪形の池も汚ない氷が張つて、枯れ草が頭を出してゐる。松二三本。八橋越しに燈籠も見える。

Wは右に在るといふ。鎧戸に突當つて、それを明けると眞暗な廊下になつてまた

戸が有る、左手の欅の鏡戸を明けたら上の風呂だつた。

『Kさんは矢つぱりS先生の許にいらッしやるのでせう。お才さんが言つてましたよ、あなたを訪ねて行つた爲に大へんな評判になつたつて、そんなに別嬪なのですか。』

『どうだか知らない。しかしお才はKを見やしないよ。』

『でも……大寶沼で船に乘つて水が洩つた爲に人に援けられたでせう、手は白かりきと「二十八宿」に歌つてあるぢやありませんか。』

『そりや人が違ふ……。』

『あらよくつてよ、』

『馬鹿にしてやがる。あらよくてよなんて、あの〻そののの廣子先生、あづま言葉が上手だね。』

『えゝ、どんなに惡く言はれたつてかまはない。そしてあのねEさんはどうなすつて、あの方はクリスチャンだし、優しい人らしいから、嘘はいはないでせう、きつと常陸へいらすわね。』

『どうだか。やつぱり狐さ。』

『ひどい事を。』

『ひどくても構はぬとして、こん度は私が訊く。雲井の雁さんはちつとも便りをせぬが時々は村へ來ますか。』

『えゝ。馬を牽いて薪賣に山から下りて來ることもあるさうです、薄命だわね。』

『しかし、心に染まぬ男を持つよりか、あゝして山ん中へ世を避けて馬を追ふのは面白いぢやないか。あなたにや年貢の取立こそ出來ようが米なんか磨げまい。でも先刻の姉さんかぶりには驚いた。あの姿で見合をするといゝ。』

『だつて私もう定つてるのに。』

『堪忍堪忍。誰はどうしました、學校の先生……。』

『森まさ子さんですか。をとゝひ御祝儀よ。急に話が纏つたので着物だの帶だの貸して上げました。弱々しい色の白い方です。明日あたり里歸りかたゞ〳〵あなたにお目にかゝりに來るかも知れません。』

『弱いと言へば、あなたは日外邦子として、河野槇子さんのような赤ん坊を生むんだつて言つたさうだが、河野も痛々しい程よわい女だ。あれで妹のお貞さんと揃つて、三味線も踊も上手なのだから、旦那樣のお氣には召すまい。』

『ヤドなんぞ、何て言ふもんですか。』

『小ぬか三合かね。』

『知らない〳〵。』

『門の脇の櫓は「草生水日記」に書いた石油櫓でせう、上まで蓆圍にしてあつたが、

油は出ないんですか。』

『出るのは瓦斯だけです、煮炊から風呂の下からあかりからあれで澤山なの。』

『けれどあゝ大仕掛ではたかく附くだらう。門の外に凸凹だらけの欅があつた、枝が上の方に少し有るだけで、なん度か火と煙に燒かれながら生きてるといふ風がよかつた。あちにもこちにも櫓が立てゐるから一つ火をつけて見たい、樅もあつた、お才がよく柄目木の樅の木と言ひ〳〵した、それがうちのなんだ。』

柄目木の二樅草蘆の瘤けやき日に千石のあぶら噴く家。

夢見しは十丈のけやき炎して、草生水やまに火のふりかかる。

御めんなさい。私は詩人です。

君見よ、わが持つ一つ火は

兎の毛白う化る臘月の
草に投ぐれば草を燒き
石を爍き野を燎き山を赭いて
千里ほのほの海たらしめむ
況んや、鑽れば臭水の
空さまに噴く越の國
煙がくれの千本やぐら
ねらひて松の火を振らば
百萬由旬の石油の油脈を
傳へて地獄に入りぬべし

火よ、十丈の旗樹つる

欅は朱の丸柱
上枝下枝を吹き撓めて
半天の虹と燃え上れ

油槽は縱に、油管は横に
重くたたへし石油をば
大き舌もて嘗めつくせ
火よ……

炬燵に頰を伏せたまま弘子さんはじつとして聞いてゐた。桃割に添へたる赤い花が動く。

火

千代もと我れは祈れども
母は子ゆゑに死なんといふ
世にひとりなる母を除きて
わが有つ物はあらじとおもうに

——花守——

暁方からの雨でまた候足が冷たくなり縮めても腹へおつけても矢はりづきぐ〜痛い、ゆふべから左枕のまゝ動かぬから胸も切ない。不圖眼を明くと床のかけ物がうすらに明く見えて、下に小さく切つた紙きれが散らけてゐる。あんなことまで放つたんだらうかと今さらふしぎがる、枕のわきにもシーツのはしにも狼藉として亂れてゐて。

かさかさと小さな音を踏んで猫が來た、納戸へ行けこらと一つ喰はせてまた頭を載せると枕のはしにもまた有つた、欄間ごしの覺束なき光にかざして見る裂けぬのは歯で喰ひ裂いたし、ナイフか鋏で斷つたのとは違つて多く横筋交に裂けてるから手にとるもとるも皆よみにくい。これだけにしておけばのちの患はない起きたら通草の籠に詰めようと思つた。

新しき年は來た、りう子は十九になつた筈だ、くに子は二十一、はゝき木はきく子は、人は皆花やかなる日を迎へて花やかなる衣をかざつたであらう、ひとりわれよ、生くる命のせんもなく今年もまたひとり眼が覺めて。

覺めてまづ何をか見る、壁の色の黄と障子の桟のくろさと、一生を通じてわが朝に見る色はこれあるのみ。しかたが無い。

彼のプライド多き子がちかひのふみに垂した血すら處女の祕密の一つであつた、名を孝行に假りて新しき人に嫁いだのはその秋である。

女を信じたのが愚であつた。孤獨十年の苦に泣かんよりは、雙棲一年の樂を享けんことをおもひ、僞ならざる眞をおもひほろびざる靈をおもひて奇蹟をつくらうとしたのが惡かつた、現實はつひに人を禽獸たらしめずば止まず彼女にはかつて、美があつた。

太陽は惡人をも照らすとセネカは說く生きながら葬られたる墓を出て、明かなる日に當らうとはもう爲まい、日も月も星もはじめから照つてゐなかつた。

つかまつて立つて見なさい、帶を締めてやるからと母が言ふ、雨は止みませんかときくと、えまだといふ、手と一しよにつかまつてる肩が動くので重心がとりにくく、つい膝の上に重なつてへたばつてしまつた。

それでも笑ひながら、締めてくれて、足袋はといふから、何ひとりで穿けますと

斷つて散らかした紙の中から片ッぽ。かい卷の下から片ッぽと探し出してやつと穿く、ゴムだからつるりと突つこめばいゝのだ。

雨だとまた終日苦しまねばならぬ、元日から、つまらないと思ひながら、紙切を片よせて机の前へすわる。戸は行きしなに母が明けた。水の如き冷氣寢起きの肌に泌みて眼鏡の蔓が冷たかつた。

羽根布團を折つて右の痛い腰へ當てようとすると中からしわだらけの『冷淚記』が出た。しまひの方をよみかへす。

落葉の風に吹かるる。
寂しさを笠に受けつつ、
旅立つかよわき君よ。
縒りてよろぼふ足の

危ふさは誰か助くる。
頰にのぼる寂しの色は
迷ひ出し夕の空の
雲に似てはてなく暗し。
雲よかへれ、わが懷に。
わが胸に乳房の玉の
かがやきは君ぞ知るなる。邦子

こんな女もあつたと書いてある。金絲の縫をした紅い小さな片袖に添へてあつた
と書いてある。
今夜も月は輝いてをります、あの別世界。
歸つたのがゆめのようです。
現實に生きていらつしやるうちは、月もごらんになりませう、私をお思ひになる

時もございませう、苦痛は死によつてのがれられます。その死が許されないなら
狂がある、けれどそれまでにはもつと苦みを經なければならないのでせう。
あなたは私より一むかしも長くその苦みをつづけていらした、死は生きるよりは
易くらくでございます、その上に暗い長い前途と、苦痛多き現實と、傷められた
お心とをおもへば何の爲に生きていらしたかわからない。
が、私が十七十八十九、せめて二十の年を數へるまでは、草にかくれてください
ますな。
一日一日と新しいことに胸を跳らせつつ、だん〳〵世の中に馴れていつても私は
けつして、あなたから離れませぬ。
今、はても知れなかつた迷ひの道も終りに近づいたように思はれます、絶望の底
よりたゞ高い天が仰れます、そしてやがて來る日に共によろこんで下すつたら：
……まき子

狂せよ、われ君の爲に祝せん、死ぬ、君ははじめて安からんと言ふと書いてある。『神あり、淺間の火を西に雨して佐久の平を燒きつくす日あらん』と書いてある。

『十年の後飽海の濱をさまよひて淨福寺の山門にわれこゝに來ると題するものあらん』と書いてある。『冷涙記こゝに終る』と書いてある。

花なる人のこひしとて、月に泣いたはゆめなるもの、つらけれど、紅葉あやなすあしほろの、ふもとに今はかへらうよ。

大洗の濤は荒い。舟一つ二つ濤に隱るる沖合に春の燕の飜り飛ぶを認めて、眉美き姉の振の袖を想像した。その夏十五で嫁いだ姉は海を見に來なかつたので追ひ捕へたがうなをハンケチに包み母と共に歸つたのは筑波の西なる父の家であつた。

騎兵の馬になつた子の背に跨つて砂塵を蹴立てて組討するを中間にも入らず、楢の大木の下に集つて楢の子でめどいちをやる群にもまじらず、庭には鐘樓が殘つてゐた。それに登ると人豆の如き一帶の稻田を隔てて、壁の白き瓦の碧なる、森の外

れの我が家！群を拔いて高い家根は學校の庭からもそれと指さるるので、瘤々した百日紅の幹をめぐりては母を思つてゐた。

村の東に土手がある、その堤の內側には椢と榛の大きな林が立ち續いてゐる。むかしは狐棲み雉鳴いて川沿のひたひた水には烏の糞の青いのが見られた。わが詩ごゝろは早く堤の草に培はれ、わが涙は多く林の烏に誘はれた。木爪の子の酸つぱいのも採つて喰つた白楊の幹をよぢて鬼蟲（かぶとむし）も捉へて見た。が母はわが心の主であつた。

本尾秋遊の死んだ日だ、雲見ゆる土手に上りて、水門の扉に凭りかゝり愁然として『行けども行けども歸らざる人を送りて野は青く』を歌うたとき、河井醉茗、伊良子清白の二人とおなじ堤に立ち、御光に似たる夕の光の筑波山をめぐるにあひ、朧氣ならぬ墓の影を見た時、なほ母はわが心の主であつた。……

母は終に、心の宿を失ひてひとり家に歸れる子を見たのである。

戀を戀して旅せし日は短かかつた。

が、今醒めて何をおもひ、いねて何を夢みると問ふ人が有つたらそれは死尸に策つものゝたぐひである。

年三十にして母に介抱さるるつたなさも今は憾むまい、一度は湯殿の石だたみへ仰向に轉んで、頭を血だらけにし、一度は胸を撲ち、近く三度めで腰をぶつてから母の注意は造次にもわが身邊を離れずなつた、帶もしめてやると言ふから大人しく〻て貰ふ、夜は壁を隔てゝ寢るが時々見にも來る。

最後の慈愛！あまんじて、最後の慈愛に浴していためる心を癒さう。

天地こゝに新なり、母よ、兒は生くべし。

あゝされど、雨の朝、雨の元旦。餅も無く屠蘇も無し。雨の中をもたらしたる賀狀すべて二十三通。

拜啓

新春また廻り來りてこゝに一齡を加へ立派に中年男と相成申候。少き間は趣味も同じく境遇にも一致したる點多かりしかど、長ずるに隨ひ、四圍の狀況は二人の間をして漸く間隔あるに至らしめ申候。わが病める君を思ふの念は十年前の昔も十年後の今も徑庭無之、境遇の變遷が相互の消息を稀ならしめたるに過ぎず候。小生も思はぬ病の爲殆一年を空しうし有形無形に大損害を招き候、大戰の後を享けてさらに妻子を提げて、新なる戰場にのぞまざるべからず御あはれみ下さるべく候。

兄が過去一ケ年に精神上多大の修養を遂げられしことを疑はずと共に、複雜なる人生の迷宮中に超然として一個の蟬脫を完成せらるゝよう希望に堪へず、これ病める君が唯一無二の天職と存じ候

四十三年一月一日

伊良子暉造

讀過涙落つ。

二十三通おほくは犬の繪が描いてある。中には二人半の子の親になつたとの報告を兼ねたのも有る、Tよりも來た、いきなり二つに裂いたので、まあなぜだい、綺麗なのにと惜がつて、母がいふ。

もとのなかつぼの琴ちやん、今は小池主計大監夫人からも來た、夜雨君と書いてある。二人で葡萄を採らうとして熊の蜂におびやかされた秋は十年の前になつた。

夢殿守より封書、告別を兼ねたる最後のたよりなり、ははき木と共に誰とか先生の歌の會に出ると書いてある、やつぱり二人ながらお嬢さんだつた。

Sよりバナナケーキ、『湖畔の悲歌』の講義がおしまひになつたお祝だとて贈らる。水戸で邦子が自分が喰ひたいので明けてくれ〳〵といぢめたことを思ひ出す。香だけは好きだ。

好一、學校からカバンと新聞とを一しよくたにぶらさげて歸る。くらくなるころ

縁側の柱にもたれて雨雲を見た。

寂しきついたちである。

夜、蜆汁。

湯に入るつもりで帶を解きかけたが手がかぢけて自由にならず、腹立つてやめにした。

やんごと無きあたりに飼はるる犬がある、病づいて犬猫の病院に入つたが飯をくはぬ、氣の利いた男が赤毛布を腰に卷いて女官の風をして高杯に盛つて出したら喰べた、と『報知』にあると、榮さんが長火鉢の前で母に話してゐる。女官と見たのはまだしも客待ちのくるま引と睨んで吠えつかなかつたのがめつけものだ。

お才の話に越後にはかてめしとて、大根だ菜だといふ節々の青物を切り刻んで米と一しよに炊いて水をさし〳〵煮るといふから大牢の珍味かと、お才と同郷の早蕨に、聞いたら、宅ではヨークにだつて喰べさせませんとおこつて來た、富めるもの

は幸なるかな。

とめるものは幸なるかな。

願はくばわれに萬鎰の黄金を與へよ、われ我が死を購はむ。

然らずば、寶冠を造りて彼の女王の誇を有てる鳥を飼へる寺の子に捧げばや。さて冠の玉の中に金字もて唯一句ちりばめむ。

『節操を賣りたる女』

あなかしこ、女子を辱しめし者は女子なりしなり、娼婦は心は賣らずといひ、處女はみづから純潔を保ちたりと稱す。

吁處女とは何ぞや。

わが唇に上る笑は冷なれど、わが母も亦女なるを思へば、奈何せん、わが涙のつねに熱き。

佛もむかしは凡夫なり。

われ等も終にはほとけなり。

いづれも佛性具せる身を

隔つるのみこそ悲しけれ。

蘇生

（上）途上

下館驛――木村なか子　花の前――たて場主人
若柳――初澤さく子　藤店――荒野放浪　澁田――森新三郎

一

本當にわたしびつくりしてよ、だつてをとゝひ一色様の追悼會にいらすと仰やつてお居でしたのに、昨夜は死んだつて、人の噂でともあることか、貞雄さんて方をはじめ、五十人ばかり堺屋に居るでせう、御遺骸は三番で來る筈だつて。私もお知らせを受けてかけ出して來ました、どんなに悲しかつたか……。河井先生はまだご存じなさるまい、邦子さんは――邦子さんも下館へは二度お出になつたし、御一

しよに小貝川を渡つて吉田へもいらしたといふに、今日死んだとは夢にも知んなさるまい。はま子さんは、うた子さんはと思うと私ひとり皆さんの名代にでもなつて御迎へするようで涙が出て來てしようが無かつたんですの。今だから白狀しますが先生はあまりに人の世をつらく思召して自殺しなすつたのだと思つてよ、御免あそばせ、ね。

渡邊さんなんか横根のお出入だといふくるまやの源太さんに、不幸（葬式）は何日でせう、なかまを皆集めて會葬せんならんつて、そしてお家柄だけにどんなにお立派な門おくりになるやらとおつしやつてましたわ。わたしはどうしようかと思つたの、だつて着物が無いんですもの、それに御可愛くなすつてる古河のはま子さんすら御年始のお葉書も忘れてるつていふでせう、邦子さんも濱子さんもわざ〳〵お見送りにお出なさりはしまい、まして仲よしのお友だちでもかたづいてからは、知らぬふりをするのが女には多いのだものお敎を受けた方でいくたりお墓を訪ふやら。

私は三里しか隔つてゐないのだからいつでもお墓詣りはできる今度は御遺骸を迎へるだけにしようか、どなたか東京からいらす方があつたら其時行つても惡いことはあるまい。うそつけ女が泣くのは着物のほしい時と芝居に行きたい時切りだなんて言つてらした方だもの、私ひとり行つたところでお墓の中から、ヘン來たな、もう惡口を言はれないからせい〳〵するだらうと言はれる位がおちだわと思ひました。

けれど、たゞの一人わかいお妹さんがあるんぢやなし、をとゝひいらした時は順樣が居た、順樣にもお嫁さんが近くお來なさるといふ、師の君はながい〳〵一生をとう〳〵華やかなひも無くて終つてしまつた。お葬式は壯嚴華麗に行はれようけれど物足らずおもひなさりはしまいか。馬鹿と怒つたつておつかなくは御座いません、生きてらしたから言ふのぢやないの、私はどうしても自殺したとしか思へなかつた。あなたにうら切つた賢い孃さんは、ピストルをいだいて淺間の山を下りた○さん、髮を切つて父ぎみに捧げなすつたKさん、お二人の事はこのへんでは、誰だ

つて知つてますわ。十萬の財を擧げて一人の愛に代へようとした方も、血をしたたかたらして遺書を作つた寺のお方も、もう赤ちやんが生れたといふぢやありませんか、そしておくめんなしに『女』として『母』として誇つてゐるのでせう、冷嘲熱罵、女を人非人ばかりのように言つてらしたのも無理はない。水戸を廻つて何かまた刺戟を受けていつその腐れ埒を明けてしまへとそれで自殺したんだ、自殺したにちがひないと思ひました。

自殺したにちがひは無いと思ひ思ひ、私は大ぜいの方に雜つて柵によつて泣いてゐました、最期の列車に聯結した箱から舁ぎ出さるる白木の柩、それに附添うて下りてらつしやるお父樣、柩の中に横へられて長き永き眠りにつきませる薄命の人！私は詩人だからうまいでせう、こんな想像をつくつて。

お棺を載せるんだつてすつかり菰を敷いて毛布まで上に擴げた荷車がありました。それへ二三人立ちかゝつて棺へ入れて來るんだんべいな、そンでなくちや荷車ぢや、

むりだぜと言ふものがありました、するとなあにその時やすつかり毛布へくるんでおれ抱いて俥で行かあ、おめえ等前後に伴しろいと言ふ方もありました。その方は顔中髯が生えて目のくちやくちやした四十四五でした。

子供等はどうしたらう、先生が死んだぢや、己等も迎へに行んべつてあとへくつかつて來るようだぜといふと、うん野殿の橋まで二十人ばかりあとになり前になり驅けて來たつけ、貞雄さんがおめえ等の親切はこれで屆くからぼつ〳〵歸つた方がいゝつて言つたから多分戻つて行つたらう、もう遲いもの。

全くおそうございました、霧の中に立つてる筑波山の北の方から月が出て高く高く氷のやうな鏡を懸けてゐました、停車場の東よりに建てた倉庫の家根をかすめて鬢を吹く風が大へん寒かつた。

七時になりました、後れても五時までには水戸をお立ちになつたらうからと皆して入場券を買て橋を渡つて行つて待ちました、東より遠く〳〵山の峽を突つ切つて

轟々と進んで來る汽車を見た時——月が霜の光のように照つてる、其下をぽつぽつと白い煙を吐いて地ひゞき立てゝましぐらに來るのを見て、私の胸はひしと引きしめられるように思ひました。

來た來たと小さな鬨の聲をあげて、ばら〳〵と皆プラットホームのはしへかけ寄つたのです……。

『しづかにさしくるゆふひのかげに
よをさりしとものおもかげみゆ』
うれしやきみはいきませり。

二

どうも昨夜位驚いたことはがんせん。あんなに機嫌よくいらして爺や厄介になつたなと仰やつて、あの大きな、立派な座布團にそつと乘せられて俥から御挨拶をな

すつたお顔ももう見られない、どうしてまた亡くなつたか、汽車はお連れが大勢有つたし友部の乘かへに間違があつたとも受とれず、めつきり寒く冴え返つたためお足がいけなくなつたのか、尤わつち等の足なんか二本共なたでぶつ切つたところで痛えとも痒えとも思ひやせんが、厄弱なあなたのこつたから寒氣のために心の臓でも凍つてなくなつたんだべと思ひやしてな。

先達、あれは大水上りでしたな、横根も泥水の中に沈んぢまつたとお話でした、あン時うどんを一箸だけ上つてよしましたね、今日はどうです、にしんの煮たのぢや矢張りいけませんか。

まあお母さまが、どんなにお喜びでせう、死んだ子が生きて歸る？　こんな珍らしいことも無いものです、もうあんたを何處へも出さないつておつしやつて押籠めてしまひやすぜ、ハハ。

三

夜雨死すと書いた三喜さまの葉書を手にして、わたしは立つて庭をあるきました、をとゝひ門口までいらして欅の下で兄をおたづね下すつた時わたし○○さんの御祝儀手傳に行つてゐてお目にかゝりませんでしたし、正月にはなか子さんとかるたを取りに大寶へ上らう、上つてお顔を眞黑かいに染めて上げるつて約束をしたけれど、たうとう亡くなつてしまつた……。かぶにじは海の嵐の兆てふ、わが死よ來れ天つみそらゆとお歌ひになつたのが讖を爲したのだと思ひました。

まあ、それでも二たび常陸の人として生きかへつていらしたのだからようございました。生れかはつたんだから是から九十九までは生きるかも知れませんわ。

お母さまが待つてゞせう、それぢや御きげんよういらつしやい。

四

まあ上つたつていゝでせう、お上んなさい、お負つて上げますよ、死んだものが生きて歸つたんだから君の爲に太白を擧げよう。いゝやねお母さんも喜んだらうが、おれもお母さんに讓りはしないぜ、くやみの取消とおめでたを兼てさつき親爺が出かけて行つた、きのふは妹の奴も青くなつてしまつたつけ。貞雄さんが自轉車を飛して來て、おい守君夜雨さんが死んぢまつたぜと、言ひ〳〵北の方へ行つてしまつて、どうして死んだとも何とも、まるで狐につまれたような氣がしてゐた。上つたつて君が改めて死ぬわけもあるまい毒は盛らないから……。

しかしお母さんが待つてるだらうな、どうしても上らずに行きますか、ぢや二三日うちにビーフでもしこたま下げて行きませう、モウバッサンの譯もでき上つたから持つてつてお目にかけます。

人さわがせ、と言ふと、おれが知つたことかいと叱られようけれど、夜雨さんが死んだといふのは不思議のようで、また有り得べき事實であると思つた、全く僕の頭にも自殺ぢやないかといふ疑が電のやうに閃めいたのでした。

毎日二階の戸をくり明けてはお家の家根を見い見い育つて來たのだから、ひとり病んで無限の寂寥を堪へていらすことは文壇の誰よりも〳〵私が多く知つてゐる。『夜雨君逸事』を齎して『早稻田』の服部(嘉香)をたづねようものなら奴も吃驚するだらう。一つ書かうかなあとまで思つた。少さな時はずゐ分あなたにいぢめられたつけ。

ぢや、あした……。

五

下山へ木伐りに行つても一駄で仕まひにすべいと思つてせつせと『薪割』を振り廻

してるところへ、いち女あが迎へに來てやまかさんぢや大へんだつて、早く來うとつていふから、うんお婆さんが亡くなつたんだなと念を押すと、ほなもんか、まあちやんが水戸で死んだんだつて、皆驅けて行つたちうから、變なこともあるもんだとは思つたが、急いで馬を引張つて門へ追ひ込んだなり、おうちへ上つた時はもう混雜の半ごろでした。

此間中、大山の重兵衞さんへかたづいたお蘭ちやんが、お慶さんち方でせう稻葉の新宅のお上さんと一しよに來てゐて、やつとお晝を喰べておばあさんの枕もとでお茶をのむところでした。そこへトラジシスの電信が屆いたのだそうです、『嫁見せに』來て從兄の死に出つくはせるといふのは不思議だけれど、お上さまを慰めるのにはどんなに困つたでせう。お慶さんだけ殘つてお蘭ちやんは結城へ歸るといふのを聞き傳へて集つて來る人で廣間も中の間も一杯になつたので、かういふ中にお前がゐたつて仕ようが無いそれよりか下館へ三番で死骸が來るといふのだから、粲にでも迎に行つて貰つてくれつて强ひるようでした、お客さま達は泣きに來たようなものでした。

その中村中何家からも人が來たので、近間の親類方へ手分して沙汰に行つたのです、吉田のお姉い樣とこへは儀兵衞さん等の組、大市の旦那のとこへは久吉郎さん等とように、たゞ急變を知らせるに止めて、いづれ旦那樣が遺骸を護つて歸れば、改めて通知しますからといふ口上だけ持つて行つたのです。それから下館へは貞雄さんが一番早く出て貞雄さんに本を敎はつてゐた子供等も二十人ほどわあつて飛出したといふし、私等は、お座敷掃除と諸道具のかたづけ役に當つて日くれまでにすつかり障子まで張かへたのです。女連はおばあさんのお床を隱居所へ移すつて大さわぎをやつてゐた。

棺を載せる荷車の仕度が出來て米さんがおい森行かうと庭から呼んだ時はもう灯のつく頃でした、おれにや役が有らあと言はうとしたが、死んだのは竹馬の友であ

る。まあちやんの死骸を迎へるといふのは二度と無いことだ、行つてやんべと一しよに門を出た、同勢は六人、丁度四番手だつたのです。

けれど私はまあちやんが死んだとは思へなかつた、現にやまか様は割れる様な騒ぎである、お上さまはじめおつきわひか知らぬが入のかみさん中坪のかみさんも泣いてゐる。新宅のおかみさんも、失心したようにそはそはしてゐる。冗談ぢやない、死ないものに何で騒ぐべい、死んだん〳〵と無理に死んだにして、大寶の坂ンところまで行つたら、大串の喜助さんがから俥を引いて通りかゝつて、横瀬さんぢや大へんだな、皆さんお迎へですかと言はれて、下館の方から來た人がかう言ふのぢや本たうに死んだのであらうとはじめて悟つたのです。

がつかりして歩いて行くと膳波ノ江役場の先さに車かぢがあるでせう、あすこに北大寶の武平さんが立つてゐて、虎壽さんが亡くなつたつて可わいさうなことしたなと言はれたのです、どうしてあゝ早く評判が知れたか實際驚きました。

二本松、梶内のあたりから日が暮れて櫟林の中を提灯一つで六人ながら沈み切つて急ぎました、向うから動いて來る火を見るとそら來たと思つて、荷馬車に失望したり、野殿の坂では道普請の土方が火をふつたけて燠つてゐたのを、あれがきつとさうだぜと言ひ言ひ近よつたら矢張違つてゐた。

もう行合ふ筈だがな、どうしたんだらう。三番には棺を列車へ持込む都合か何かで間に合はなんだにしても、もう着いてやつて來る筈だがなあ、といふ者がある、さうよな何ぼ泡を喰つたにしたにしろ旦那様が附いてるンだからなといふ者がある、死骸を汽車で運ぶには一車買切にするんだから水戸からは四十圓もとられるだらうといふ者もある、だつてお前いくらかゝつても死顔を見たいのはお上さま一人ぢや無いといふ者もあつて、一軒おき二軒おき人家のまばらな街道を聟入でもあることか、めつたに犬も吠えないから寂しいの何のつて。

まあちやんも罪つくりだつた。

少し急ぎますか、今日もまたおうちは大へんな人ですよ、くやみいふ積で門まで來て座敷へ通つたらよろこびをのべるといふぐあひで、昨日から夜の明けたようなちがひです。

しかしお上様は。

（下）廣間にて

―大勢

『まあお目出たうムいましたね。

『おめでたう。

『おめでたう。本當に驚きやんしたよ。

『本とだ、夜雨先生ばんざいだ。

『申しちや何だが、昨日はたまげたの何のつて、話しはありやんせんでした。そでもねえ、如此して生きかへつてお歸りになつた。

『まあ昨日つたらいつときに魂げらかされて騙けて來べいと思つてもどうにも腰がひつたたなかつたよ。

『そうら、こんなにいこ〳〵してるのに、昨日は死んだなんて、人のこと魂げらかして、まあ顔を見るようぢやないかねえ。

『なアに、死んだ人が生きけえつて來たんだ、こんな又珍事ちんちようが、けいびやく以來有るもんだねえ。

『こりや旦那、赤飯の一駄位ふかさなくちやなりやんすめえ。

『序につめ切りも押立てるんですね、然すると飲めらあ、ばんざいだ。

『お前先刻からひとりで萬歳を言つてるがまた飲つたんだらう。

『うん今日はひる酒でさ。いつもは嬶の奴不平垂れやがるけんど、今日だきや、うとも言ひやんせん。萬歳だ。

『そンぢやお前の方が萬歳だ。氣をつけなすつた方がいゝ、あとであんたのお蔭でうちのに飲まれやんしたの尻が來べい。

『べらぼうめ、おらちの嬶はそんな風ぢや無い。

『まあやあだ、おめえはまあちやんが生きかへつたに託けてやつたのかい、だから私ア呑兵衞は嫌えだよ。

『きらひで仕合せ、好かれちや困るだ。それ百人首に有つぺ、にくまれて世にあるかひはないけれど可愛がられて死ぬよりやましか、おめえと仲よくなつちや、辰つアんに濟まねえもん、なあ。

『おきい、そんな呑助にやかまふなよ。

『お前は男におひやらかされるのが好きな質だ、しようがねえね。

『それにしてもまあほんとに罪を作つたぞオ。村中の騒ぎどころか使に出た連中は

古澤(結城)から高道宗(筑波)吉田(眞壁)駒籠(猿島)と足を摺古木にして終夜かゝつたさうだよ。

『だつて、そりやまあやの咎ぢやないやね。ないけれどあの騒ぎをこれに見せてやりたかつた。騒ぎも何だかあれだけ、人に惜しがられてゐるんだからまあやは滅多に死ねないよ。濱(母の名)さん、もう何處さも出さないことですね。

『さうだともよ、姉さん奥へ押込めて閉て切つておいた方がいゝ。少ちやい時から言ひ出すと利かぬ子だつたが、去年は二十何人たら供を連れてつて筑波の頂上へも登つたし、雪の中を信州から越後の方まで行くなんてあんまりだッぺ。

『八月にや、孝ちやんを連れて北海道へ行くんだつて。

『とつてもねいこと!

『八男ちやんが學校から歸つて來た。

『八男ちやんは昨日は可愛相な程だつたね、次の間へ行つたりお納戸へ來たりして、居どころがなくなりでもしたように、しほ〳〵してるから、まあやが机の周圍を一しよに片づけようと言つたら、それでもぽろ〳〵涙をこぼしながら一つ〳〵本を奥へ運んで……。

『あら虚言だなんて、あんなに置き忘れて行つた七寶の時計を何處かへ藏ふように賴んでも藏つてくれなかつたかッぺ。道理だアね寢起きも一しよなら、湯に入るにも勉強するにもくッつかつて來たのに、明日から一人ぼつちで机にかゝるンだッぺと思つたら私までぽろ〳〵しちやつた。机の上には三つ四つ封を切らない手紙がのせてあつた。大阪からよこしたんだつて改野つちやらいふ目の大ッかい娘さんの可愛い寫眞も來てゐた。切角先生にと思つてよこしたんだと思つて佛さまさ上げてつけ、線香臭くなつたかも知んねえ。

『電信にやよく間違があるもんで、大串の『でい』の息子からカネ三〇オクレつて言

つて來たので三圓つぱかしを何するんだつぺと思つたけんど、切角だからと送つた話がある。國生の源次郎さん(長塚節君の父君)とこでは舍弟息子(順次郎、工學士小坂礦山技師かつて一高野球の選手たり)が聟に行つてる家に善次郎つち弱い弟がゐて見舞に行つた源次郎さんからジンジロシスカネオクレとかゝつたから節さんもお靜さんもさあ大事だと思つたつぺぢやねいかね。雨のぢつぢと降る晩だつたさうだ、節さんだけ起きて本を見てるところへ郵便もちに門を叩かれたんだつて、それを節さんは、夜の明けるまでそのまんまゐて、朝になつてからおしづさんに言つたんだつて。妹の嫁入先や何かでは彼方から知らしたらうし、たぶん順次郎は平野(平野政朝、下妻の人、法學士、かつて一高黄金時代の野球大選手たり)の叔父と同じやうに山でエンジンの調帶に卷き込まれて死んだにちがひあるまい、村の手合に言ふのは父の差指を待つてからにしようと定めてお靜さんとたつた二人次の次の日まで堪へてゐたつて。さうしたらどうだらう、待ちきつてた源次郎さんの手紙は向う

の病人の容體から書きはじめて、危篤になつた日の事だの、臨終の容子だの細かに書いてなほなほ順次郎儀は本日何時何十分ト野着送葬致す筈とあつたんだつて。まあやのはアスがシスになつたからつて郵便局の技手に殺されじまひに殺されちやつたんでもなし、村中集つたから炊出しの費ばかしも大へんだつたが、まあまあ生きてたんだから。

『さうですとも。私家では丁度二郎が來てゐて死顏にいきあつてから歸んべつて夜まで待つたのでした、職業が職業だから人の死目に出食せるのは平氣な男だけれど子供の時からの友達だり、身よりでもありして臨終を見てやりたかつたつて言つてたのでした。大あべこべだ。

だれだつてさう思ふ筈ですよ。それに一體が始終弱いんだから藥を服みやいゝに、肝油で懲りさせたもんだから濱さんの手にもをへないさうですよ。

『肝油か、肝油は辛かつたつぺいよ、あの頃は子供心にのまねばならぬとあきらめ

てか大人しく服み服みしたつけが、にほひを嗅いだゞけで吐きたくなる程だつたもの。今更肝油は服めまいが、せめて四十まぢや生きてくれなくちやなんねい、だいぢなすつてもまさか親身だね、のぶが生きてたつてまあ可かつただつて、農夫也樣一お祖母さんにだつて先立つち法は無い。お祖母さんて言へばあゝして耄け切つてと間違へてゐるゝ見えるよ。

『わたしが行つてまあちやんが生きていらしてよう御座んしたねと言つたら、其けえり返事は無くて、「あの誰れ、誰は何所へか行つた」つておつしやるでせう。「誰で す、お上さまですか、大町のお上さまですか」つて聞いても、「それぢやねい、それ腹の大きな。」腹の大きなと言や入(後の家)の嫁さま(貞雄君の細君)でもあるかな、それにしても來てゐやしなかつたがと思つて「うめのさんですか」つてたら、「さうぢやねい、あれ腹の一、あつ分つた旦那樣だね。旦那樣とやつと知れたのです。宵の口に奥ざしきへ死骸を寢かせなくちやならないから隱居所へ連れてつて上げる時トラ

ノカハを持つて來てくれろには弱つちまつて皆して判斷したがわからない。別な寢巻をいふのか上敷をとりかへることなのか、あれでもない、これでもないとしまひにや怒つて了つて、御自分でめつけなすつたが、何だらうと思つたら毛布だつたの、毛布を虎の皮はあんまりでせう。お上さんはまあちやんには急に亡くなられる、あとへ殘つたお祖母さんちば彼あだし、病氣になりやしまいかと思ひまして……。

『其時さ、お部屋の障子も張らせようと思つてね、天井から下ろしたら餘り數が多いので何れが何處へ當るのかがたびし〳〵當てたり外したり、じれじれするからよけいと泣きたかつた。それでも分家の役目だと思ふから文庫倉から膳を出したのも私だつたが、柱の蔭に有つた、角樽へ躓つまづいて、ふいと村中の祝儀といふ祝儀には一戸だつて此の角樽を借りぬ家が無いんだ、本宅で使ふのは別に有るとは言ふでう、幾十年かの間つめちや乾しつめちや乾しした角樽をたう〳〵丸やには見せずにしまつたと思つたら、鏡も底も突き拔いてやりたかつた。それでも斯うして何と

も無え顏を見たから銚子三組もまあ〳〵壞さなくて濟む。長生をするよ、きつと。

「蘇生」の後に

八男助より。

畢竟『豫修』をさせたのだ、本當に騷ぐのはちつと早かつたよと、君の兄さんだけれど、人の惡い夜雨さんはすまして居らあ、僕はあの日は例によつて體操を願下にして、序に『豫課も休んで了へ、前途は多望だ』と勝手な理屈をつけて校内を出たのは二時少し前だつたか知らん、惶恐灘頭說惶恐零丁洋裏歎零丁と敎つたばかりの詩を微吟して大串の森を出はづれると、しほれた顏をして晃が東の路からやつて來た。本は貞雄さんが敎へてるのだが今日はやらないのか知らそれにしても柳原へ歸るのには南へ土手傳ひに行く筈だと思つて、おい夜雨さん歸つたかと聞くと、『先生は死んぢやつた』といふ。『この野郎おどかしやがる。どうしたんだ、死んぢやつたなんて』だつて今電報が來たんだ、そんで大町と三道地へ沙汰に行くんだ、皆は

貞雄さんの跡追つて下館へ行つた、三番で死骸が來るんだ』と言ふ『さうか、うそぢやあるまいな、ぢや急いで叔父さんを呼んで來い』と言ひすててつと離れた。村までは十町しか無いのに、急に遠い遠い道にまぐれこんだやうになつて、靜に横はる行手の道を見た、正面に筑波が眉庇を壓して立つてゐる。はてしなき空は深綠色に澄んで青い光を地に投げるのか田の畦に枯れた草まで青う見える。自分はたゞ急いだ、死んだのは本當だらうか、どうして死んだらう、醫者に見せるとは言つてゐたが、ひよつとしたら自殺ぢやないかなどゝいろ〳〵の考へがこんぐらかつて『眞か』に對してはどうしてもネガチブの答がその九を占てゐるやうに思はれて。遠くの田に鍬を振る男の二三人が見える切り、長い田中の一本路は自分一人が歩いてゐた。村の入口かち伸が二臺射るやうに出て來た。前なのは若い二十位の女、今泣いたばかりの目つきをして、かすかに紅を頰にとゞめてゐる、後の丸髷の四十ちかくと思はれるのが白いハンカチーフを顏にあてたまま通りすがりにぢつと自分を見お

ろした、眼は黑くぬれてゐた。嗚呼悠々たる行路の心、道行く人の上にもかなしみは有る！自分はなほ疑ひつゝ信じつゝ吉平がところから一走りに門へかけ込んだ、

『飛んだことをしやんしたねい』とまづいつた者があつた。ぢうんと頭から釘をぶつ込まれたやうに感じてそれがおはつだと分つた靴の紐を解くのも忘れて『本たうか』

『本當ですとも』

伯母さんが起つていらした、『本當だよ八男、これ』と電報を手にのせて下さる。

トラジシス三バンデカヘルムカヘタノムとある。『こりや……どうしただらう』

『さうさ何したんだか少ともわからないよ』

手がふるへて仕方がなかつた。シスといふ二字ばかりぎら〳〵した光を放つて目を刺すやうで。もう疑ふ餘地が無くなつた。夜雨さんは死んだのだ、『間違ぢやあるまいね』とくりかへして聞かれるので辛かつた。端に青い切手のついてる柔かな電報紙を膝において見つめてる伯母さんを見ると、あれほど氣强い人が迸らぬばかり

に眼は涙に滿たされて、ペールな顏には眼の下に仄り紅が見えるばかりである。

……七ちやん、七ちやんはお母さんの泣いた顏を見たことが無かつたらう、七ちやんは『ばつち』(末子)としてお二人の愛を鍾めたばかりではなく多くの兄さんに可愛がられて現に大兄上を第二の父として其膝下に居るのみか、十九年の間憂いも辛いも知らずに育つて來て孝ちやんと兄弟揃つて官立大學の學生――未來は博士の『榮冠』を戴く人ぢや無いか。けれど直言するを許せ、伯母さんは他の六人を愛するよりもまあちやん一人をいとほしんでゐた、君達が博士になるからとて、まあちやんを失した伯母さんの涙を乾かすことはできない……

と其時は思つたのである。かんにんし玉へ、死んだ夜雨さんは生きて來た。今だからこんなことも書くけれど、自分などの顚倒は別として實際あの騷つたら無かつた。今日は一日試驗前の貴い時を割いて、わが敬愛する花兄七君の爲に『報導』の筆を續けてゐるのだ……。

座敷には入と中坪と新宅の小母さんがゐて、口一つきくのでは無いが皆目には『驚愕』を示してゐる。聞き傳へ語りついで村の人達は一人づゝ二人づゝ集つて來る。凶報は瞬間に廣まりて大町の叔父さんは役場から駈けつけて來た。新宅の小叔さんもいつものにこにこ顏を變じてかけつけて來た。吉田へ誰かやつたかと叔父さんが言ふので、人をやるまでもない嫂さんの悲みを見たうは無いけれど自分の口から傳へたいやうに思つたので、『ぢや私行つて來ませう』すぐ起たうとしたら、『いやお前は本の仕末をしてやれ』とそれ切り留められて宅へは儀兵衞が行つた。兄さんと揃つて走だして來るだらうか、兄さんだけ先來るだらうか。

『丸さんが』とか『虎壽樣』がとか我輩に眞似のできぬ調子で交〳〵『まあ飛んだことでしたね』『どうしてだが夢のやうではありませんか、魂消たことで』とあとから〳〵來ては言ふ。云ふものは事實辛くはあるまいが言はれるものは唯一人の伯母さんである、よく坐つてゐられると思ふ程じつとしてゐる。入、中坪の小母さん達は

それを取圍んで、來る人來る人、交る交る應對する。炊出の米を量らせたり、膳椀を運ばせたり、倉に出入するのの宰領は新宅の小母さんであつた。そつちでもこつちでも一人二人より三人より『どうしたんだろね』『順ちやんが、附いて行つたちうからまさか汽車に轢かれたンではあンめいよね』『急病だとすれば死ぬ前に知らせる筈だ』『ほんとうによ』

貞雄さんが飛出したので塾生も一人殘らず下館へ行つたといふ跡には、机が縱横に板の間に置き亂れて硯なども出し放しである。それを片端から擔ぎ出しては辰巳庫へ運ぶ者水を汲んで來てはそこらへぶちまける者。屋敷中に散らばつた材木やら薪やら樫の落葉やらを片づけかける者。平川戸、筑波あたりからもだんだんに寄るし、『新年おめでたうムいます、さて此程は先生が亡くなられましたさうで』がある。ヤマカの屋號を知らぬ者は少からう、夜雨さんの名は病めるが故に詩人なるが故にさらに廣く知られてゐるので、其死は電の如く近鄕近在に傳はつたらしい。自分

は混雜した心の渦に出頭沒頭しつつをりながら、不思議にも、數日後に幾百人かの會葬者に護られて、富士を西南に淺間の烟を西に見る墓を幻視した。

時は愁傷せる一家の上にも移つて行つた。三里半を二十何分かで飛した貞雄さんは何の報をも齎らさず空しく歸て來た。『いくら待つて〻も來ない、三時に水戸を出るの間違ぢやないか、それならまだ十二時間の隙があるので、どんな容子かと思つて一應戻つて來た』といふ。『知らずにゐたら子供等も飛出したと見えて野殿で出くはしました。中には足袋跣のもあつたが、皆はアはア息をついて、私の跡を追て來たといふのです、今から行つて五時まで待つと歸りは夜になるからおれと一しよに歸れと言つて其なり飛して來ました、多分今黑子あたりまで戻つたでせう』と續ける。『まあ彼方まで行つたんだらうか、知つてれば遣るんぢや無かつたに』蔽ふべからざる失望の色を顏にして伯母樣は坐つてる空も無さ相に見えて來た。『三番で來なけりや堺屋からでも電話をかけて見りやよかつた』といひかけた入の小父さんは『貴

樣も一度行け』と命令する。『停車場から電信をかけようかとは氣がついたけれど、あわてゝ出たので一文も持つてなかつたし、ぢや電話を借りて見ませう、腹が減つたから何かありませんか』貞雄さんはそれから熱くて手のつけられぬおむすびを二つ三つ頰張つてまた自轉車を飛ばす。

炊出しは追々と集つて來た女房連によりて盛んに爲された。釜の下を燃しながら焦つきを手にしてるもの流しに立ちかゝつて茹でたばかりの菜を手掴にするもの。東の戸口や湯殿の蔭には子供等までがやゝしてる。八月、上總から蓄音器を携へておよしさんがお祖母樣の見舞に來て村中を集めて聽かした時よりも今日よつた人の方が多い。混雜はしてるけれど誰一人座敷で笑ふ者が無い。ひとり島公が嗤のきは立つた聲のシリルボイスが嘲笑的に聞えて、なぐりつけたかつた。他村から來た人でお待受しませうといふ者もあるので次の間に主を失つて殘つてる机を片づけた。黑檀？の戸簞笥は左の端に、COBALTBLUE と『烟塵』と『獨逸文學の研究』が右の

端に載つてるきり、硯箱は使はず筆も置いてない、寂しいものである。

五年間おなじに寝起きして、布團をかけてやつたり湯に入る世話もしたり、あと三十日でお別れする際になつて一人ぼつちにならせられた。寂しきわれ等の室よ。

寒くならぬ前は奥にゐたので、手廻の品は多く床の間にある、小さな桐の要箪笥、二つ丼びの本箱、竹の書棚、片々の角の亡くなつた銅の鹿や、木版畫ばかり集めて綴ぢた『唐錦』や、角のくたくたになりかけたアルバムや一つ一つ障つて見た、醉茗さんが持つて來た通草の籠には寸斷した手紙が詰めてある、中に神はいかなれば師を悲劇より悲劇に移すだらうといふ意味の歌の裂かれたのもある。手紙は來るも來るも裂いてしまうし、日記はつけず、人と語るぢやなし、折々はチャームな聲で詩を朗吟するが、日の暮れぐれにはよく縁の柱にもたれて默然として雲を見る僻があつた。

床ばしらの上に、中山百合子が自分で拵へた寫眞挾みに挾まれたまゝかけられて

ある、Eの手づから刻んで送れるマドンナの塑像も懸けてある、百合子は死んだ女だといふ。Fも死んだ。

死んではつまらない。しかし夜雨さんは生きてゐてもつまらないと思つたらう、おれは卑怯なんだとよく言つた。『幸福』も『健康』もはやくから脊を見せてゐたので夜雨さんは自救ふ力が無かつた……

が、どうして死んだらうと思ふと、涙がとゞまらぬ、どの座敷にも人が立廻るのでとうだう納戸に入つて積み重ねた布團の上へ仰臥になつた。

今來るだらう、今來るだらうと思つては、青い？顔が目について。夢、夢、恐ろしい夢を見てゐるのだ。

ガタン〳〵と隱居所で音がする、大病後せうたいなくなつてるおばあさんはまあやが死んだとも知らずにゐるだらう。

障子を明けて伯母さんがはいつて來た、一寸眼を押へて簞笥の前に立たが、ふと

自分を見つけて、しばらくしてから『八男、氣を落さない方がよいよ、お前まで泣いてくれたから、まあちやんも悦ぶだらう。さつき加養の蘭子とお慶が來てゐる處へ『でんしん電信が屆いたので泣いて歸つた今頃はあちらでも大騒をしてるだらう。お慶が歸つたのとお前の戻つたのとはひとあし違ひだつた』と靜かに言はれた。自分は車上の二人を思ひ出した、が口が利けなかつた。

夜になつた。女達が額でぶつかり合ふほど急がしく、働いてゐる。金平を切るもの、千六本を刻むもの、俎の音と庖丁のさッくさッくする音と、釜場には湯氣が白く籠つて、行きかふ足音が高い。爺やがあわてた顔をして南の大戸口から入つて來た。高津から薪を積んで筑波水門まで戻つて來たら俊が土手の下で土刈をやつてゐて、『おぢさん先生が死んだぞと敎えてくれやした。ちくだッぺと言つたら、ちくなもんかまあ行つて見さつせいといふので急いで來たら、どうもはや』といふ。

俊が水戸の四郎さんの店にゐる時、夜雨さん『とし』つて呼ぶとどうしても『とす』

と聞えるといふので、邦子(山田)さんが、夜雨さんをトスさんと仇名したその俊君だ。

火がつく。廣間も中の間も次の間も點いた。奥座敷は來るとすぐ寢させるやうに絹布團を敷いて、二双の屏風で圍つて、枕元へはニッケル臺のランプを置いたやゝ細目に心を出したのが黄地の屏風に心細く映つてゐる。こゝへ置かれるのだな、冷たい、そして青い。

雨戸は一枚も引かぬ。中ぞらにかゝれる十日の月もやうやく光りはじめた。前倉の屋根はつゆじもであらう、瓦の一つ一つ銀のやうに光つてゐる。寂として風無き夜である。

貞雄さんの蹤を追つて野殿まで驅けたといふ子供等が三々五々歸つて來たが、今朝まで坐つてた机は片つけられる、捨てゝ行た本も辨當も何處へ藏はれたのやら。遲くはなつたし、腹はへる、家も心配なので途方に暮れたのであらう、戸口に固ま

つて入りかねてゐるのをやうやう板の間へ上らして膳に就いて貰ふ。巣立前のつばくろと同じで一日啣唔の聲を絶やさぬ連中が萎れ切つて顔ばかり見合してゐる、それをお初とお米が給仕しながら、みんなは揃つて『門送り』をして上げればいゝやね、先生が亡くなつても貞雄さんが敎せてくれべい、野殿まで迎へに行つたんだつてね、おかみ樣も大へん喜んでゐる、夜になつたんだからもし何なら送り人を賴んでやッぺいか、どうだ鉎さん向上野まで歸れるか、一人づゝの人は怖くはないかなど話してゐる中に、そろ〳〵元氣が恢復したと見えて、梶内の入口で國が仰向にすつころがつたつけ、あん時のたん瘤はまだ引込まぬいとか、野殿で貞雄さんに出くはしてまだ來ぬいと言はれた時は引返してもつまらぬいから下館まで行んべと言ふのと、腹が減るからそれよりや歸らうといふのと、やつつけろ派が十何人で、へこたれ黨が十幾人で、誰と誰とかは二股大根だつけとか話しあつてゐた。

佛壇には燈明が上つてゐた。誰がつけたか線香が五つ六つ立つて縷々たる烟の中

に阿彌陀如來の金碧が燦として奥深く見える。おれは死んだつて地獄へも極樂へも行かない。頭を剃られて經帷子など着せられてはたまらぬ何々院何々居士の意味を成さぬ戒名をつけられるよりか横瀨虎壽で澤山だ、貴公等後で石を建てる必要があつたら、字は名筆の醉茗に賴めといつか冗談を言つたことがあつた、が今夜から事實の佛樣だ。大きらひな坊主頭にも剃られよう六人か七人かのなまぐさ連のニヤゴニヤゴに送られて遠く行かねばならぬ。行けど歸らざる人を送りて、詩を歌つた人はやがて人に歌はるべき運命となつた。

伯母さん、倉からうた子さん(鮫島)に貰つた座布團を出して來て『も一枚のあき子(石田)さんからのは今度持たしてやつたから枕にして來るだらう、これも愛しがつてばかりゐずに平生も敷かせておけばよかつた。二つとも棺の中へ入れてやる』といふ。初めて見る大ぜいの村の女達はまあ見事なちりめんだこと、襦袢の胴になるとか、袖にしたいとか勝手に手にもつて見てゐる、山の如く盆に盛られた饅頭は

皆の袖がくれに向うに見える。

ひとりこれのみならず、見よ手澤なめらかなる愛讀の書は茶簞笥の上にもある、神棚にもある、納戸に、中の間に、辰巳藏に儲へもてる千百の書の一つ一つに亡き人の愛は籠つてゐる。今こそ氣が立つてあゝしても居られるけれど、日を追ひ月を重ねてあまりに多き思出を辿りて心を傷ふやうなことはあるまいか？萬が一、世をはかなみ人を怨みての自殺であつたら？

何の爲に女達の手を假らずにその手廻の用を足してをつたか。何の爲に人の前ですら肩に縋らして帶をしめてやり手を曳いて勝手に誘ひ出したりしか、生んでから三十年の間、財をつくし心をつくして其病ひを護つたかひも無く、一朝にして終焉の床に見るを得ざりし母のうらみよ、はかなき母子の契よ。

夜雨を欺ける人は多い、TかKかRかHか、誰か玉の如き詩人の心を破りて、精神的に墮落の人たらしめたか。

好んで人を罵ると共に、自ら棄てゝ詩を忘るるまでになり乍ら、幸にして母の愛を疑ふまでにはならなかつた。一人の愛は百人の罪を購ひ得てわが夜雨は今日まで生きてゐた。

こゝに生あり生くる日あり。こゝに死あり、隧道に送らる。嗚呼隧道！わが詩人は母の涙に身を淨められて草に隱るゝ人となつた。

久しかりし苦悶の歷史よ。

夢にまで萬人の侮蔑と嘲笑とに脅かされて生きながら、報いらるる事もなくて、傷ましき命は終つたのだ。

大町、新宅、入の小父樣達は廣間に、小母さん達は茶の間に集つて、『今十年は生かして置きたかつた、自慢物を亡くしたと返らぬぐちを言つてゐる。せめてあと、三年、孝が學士になるまでは見てゐてほしかつた。湯殿の石豈へ落ちたのではあるまいか、それとも二階から落ちたか、怪我に相違ないんだけれど……』と、伯母

さんは言ふ、一坐靜まり返つて『疑ひ』を解かうと力めてゐるらしかつた。

自分はいつか庭を歩いてゐた。

月は氷輪を天の一方に懸けてゐた。明け放したまゝの門を通して往來は烟のように物の影が行く。靜な夜なので前庫や辰巳庫や樫や欅や、影を庭一杯ひろげた後の、大きな黑い屋根の下に旅で死んだ人を待つてゐるとは不思議にも思はれた。

枕團子を挽くといふ女が六七人、納屋でこと〳〵と廡からさし入る月をたよりに石臼の周りに動いてゐる、箕をかゝへて前倉のひさしのかげから出て來たのはおはつだ。

滿身に月を浴びて靜かな光の中に自分は庭を行つたり來たりした、藁束の白いのを猫と見たり、西屋敷の跡にある稻荷塚を廻つたり……。

チリチリン。

不意に門の方で音がした。と石を踏む音が聞えて、やがて、わつといふ氣たゝましい聲が家の中から起つた。

遺骸が來た。

と思つた。

思ふより早く中庭へかけこんで西の緣から座敷へ飛上つた。……

夜雨さんは生きてゐるといふ。誰も誰も上り端に立ちかゝつて貞雄さんの齎らした吉報を爭つて聞いた。

夜雨さんは生きてゐた。

三壺月浮んで七萬里の程浪を分ち、五城霞峙ちて十二樓の構天に挿めり。愚や。謬入仙家雖爲半日之客、恐歸舊里纔逢七世之孫、夜雨さんは生てゐた。

萬歲。

二月十一日

横瀨花兄七君几下

尾見八男介

鹿

吉野から歸つた愛子さんがこれは奈良のお土産ですよと三匹の鹿を贈られた、無論春日野の若草に寢てゐた本ものではない、一つは銅で鑄たので背には附紐をつけた兒が危なかしく乘つてる、鹿は腹這になつて三本しか足の見えぬのはまだいゝ、水を入れて机の端に飾つておけるから。あとの二つは大きさも一寸程で首は拔き差しができるのだが、不思議な事には尻から長方形の小箱が出てゐて、それを又尾で提げてあることだ、もつとも中が空になつてるから二匹の尾と尾を突き合して棒を亘して筆懸けになるのでもあらうかと思うた。

長家に市高といふ揃うて六になる女兒と、市の下には次公といふ腕白もあるから壞れかゝつた中庭の塀を潛つたり雪見燈籠の笠へ上つたり、醉漿の青いのを捩るのはまだしもとして菊だらうがコスモスだらうが三人の手の届く花は皆蕾を占めてし

まう、時々は椽側から這ひ上つて坐敷でかくれんぼをもやる、十年以來子供といふものが無くて寂しいせいもあるが母などはさう叱りもせぬから善い氣になつて騷ぐ手に終へぬ代可愛いこともある、『旦那ちやん』に次いでの怖い人として『奥の兄ちやん』を認めては居るが、愛子に貰うた鹿はやがてのことに見つかつた。

まづ机の周圍へ目白押に列んでおちやんとして、小さな指を出しくらして、ひとりがこれは兎といふとひとりが兎の耳にはこんな刺が生へてないようといふ、目がおつかないといふ、尻尾が長いといふ、とう〳〵兎にして乘つてるのは次郎見たいな赤ん坊だと定てしまう塀の外ではつく〳〵法師が鳴いてる、雲無き秋の午。

初めは奥の兄ちやんなる自分を怖れて手を出さなかつたが、堪へられなくなつてお市が先いぢくり初めた、舍弟何でう猶豫すべき、おねのだおねのだと姉のを引つたくつて。

お高は小さな方を取つたが、どうかする機にほろりと首が脱けたのでびつくりし

て着つけて見て篏つたので安心したらしい、しげしげと尻の穴を見てゐたが、いきなり口へくはへる、とびびと鳴り出した。

驚いた。

蚊火家が下のかはづすら
頰より聲を出せばや

尾筒に金の笛懸けて
鹿は尻にて妻を喚ぶか

大和少女は秋蘭けて
髪のかゝり所匂ふらむ

せんみ留れる蟬燈籠の
鎖に吊よ命の火

けら穴に鳴く夜すがらを
燈籠の火の草に射さば

角を遺れしやさし女も
交りて鹿は集らむ

自分が奈良に遊んだ時は雨が降つてゐて、猿澤の池に映る柳の枝も煙のよう、森閑として人無き春日の森は鹿の跳ねまはるに任せて、杉の木立の奥には踐まれ殘り

の草の花が咲いてゐた。

そのころ、鹿を呉れた愛子さんは學校に通うてゐたのだ。大和は人の美しき國である。

吾アルバム

飯の匂つてどんな匂だ、南京米でも喰ひはしまいし、そんな洒落は止せといふ友も有る、すべてのインテレストを失うたのぢや無からう、なぜ鬱閉するか、根岸名産の紫蘇を贈るから喰つて見ろといふ友もある。喰ひたくないから喰はないので、洒落だの氣狂だのと人の事を大きな批難をするやつはお茶でも上れといひたい。

けれど、どことなしに疲れを覺えて起きてゐても寝てゐても辛度でならぬ時がある、室は奥、蟬の聲ならでは音づれず、枕に寄るは迷ひ入りし蝶蜂の類ばかりあまりの所在なさに、こゝに三卷のアルバムを開いて美しきゑに遠く近く散在せる友の上を思ふた。

自分は繪葉書が嫌なのではないが、買ひたくも、食パンすら三里の道を下館に出ねば無いやうな筑波の麓に賣てはゐぬ、されればアルバムは有てるけれど人に貰うた

のである。

二枚差横綴、表紙に銀泥して角笛吹ける天童の月界に立てる繪のついてるのは柳橋なるFより贈られて、『さ月二十四日、都の人より。心閉ぢ胸塞がりて人戀しき夕に候ひき。岩手の友の林檎おくるとのみありて、それは着かず。燕軒に啼く』と題した。挾めるは品のよいのばかり、多くは挿したるまゝアルバムと共にFより來たのだ。

金蓮華の蔓をのたくらして、實物には有りさうもない色の花が四つばかり描いてある、四枚ざしの無格構やつは、一金八拾錢也人に買うて貰つて持てゐました品、これには始めて繪葉書といふものゝ出來た頃醉名から珍らしさうによこしたのをどつさり挿してある。大きな口を明いて兩手を思切りのばした石版ずりの美人などをなんと思うて買込んだらうと不思議だ。

も一つは、今度は四度目だ又候外れたとあつては何の面目ありて西京の姉さんに

ま見えやう、着物も洗濯した、いつ華嚴つてもよいのだと、しよけてゐたS生がうまく高等學校へ入れたお祝に呉れた、うつかりすれば挿方も知れなさうな新式の品で、まだ葉書は二枚きりない、挿したくもう無いのだ、日本中の人がよいのばかり選て贈つてくれるとすぐ枕頭の慰みにするがなあと慾の深いことを考へる。

繪葉書は贅澤だといふものがある、かう言ふ人は江戸から長崎へ一錢五厘で用を足してくれるのすら高いものだと思うて、海山隔てた遠い土地に自分の足を運ばずにすむのを忘れてゐるのだ。けれど繪葉書を贅澤だとはけなしても。美しからぬものぞといふ者はあるまい。

繪葉書は美しきものである、家族や知己やの寫眞を集めた寫眞帖を持つほどの人なら、美しき繪葉書を冊と積み卷と重ねて珍藏してもよいであらう。僕には寫眞帖は無い人の寫眞は二つ三つは有つたが持つてればきつと失すので、皆姉に預けてある、繪葉書だけはかうして一枚も疎にせず長く坐右に置て佗しさ命の慰めらるゝ限

は慰みて、世に有りたいと思うてをる。

書翰箋として見るのぢやない、人の手に描された自然それは、山にしろ水にしろ方丈の室に在るものを除いては自分には皆目新らしいので、月清き夜は野に行かんことを願ひ、花咲く朝には堤に立ちたいと思ふ、風吹く日黍の穂に逃げられた馬も四竹振りて内に踊る踊り子も、今は思ふがまゝに見らるゝのでも無いから、僕に殘る『自然』は三卷のアルバムのみとなつたのだ。

夫婦のちよんがれを畫いたのへ、『吾輩は下戸である、酒は無論のまない、さうかと言て甘い物も澤山くはない、牡丹餅ならたつた七つ、汁粉ならたつた四杯、羊羹ならたつたひと棹、さうかといつて煙草も喫はない、さうかといつて女には嫌はれる、さうかと言て金もたまらない』とかいてよこした友がある。三卷中の秀逸なるもの。

雲雀鳴く野より

南天の花が散る。

モチ、サクラ、ザクロの影が明り床一杯にうつゝて、いゝかげん暗いのに雨が止まぬから、石燈籠の笠まで腐りさうにじめ〳〵としてゐる。

硃沙根の下に蛇の小さなのがゐて時々出てあまがへるをねらふがまだ捕れない。

夏密柑が喰べたい、買ひにやつたところで下妻には無いし、をとゝしから約束の杏もきし子が贈つてくれないから、梅でしんばうする、黄ばんでもやはり酸つぱいけれど。

ふと、すべての木の實を喰はぬくせに龍眼肉だけはかぢる醉茗をおもふ。『葡萄の味を知らぬ吾』と歌うた野ばん時代に比べるとずゐぶんハイカラになつたものだ。

（十七日）

朝のうち、雨が降つたやうでもあり、霽れて日光をおとしたやうにも。

高才の百太、あげ物を手土産に、無沙汰詫に來る。あられを皿へ分けても箸をつけないから、掌へ撒けてやる、大きなたこだらけだ。また秋になつたら先生ごと負つて筑波へ行ンべつて、彌一さんだの周さんだのと相談しやしたといふ、あげ物はお手の物の隱元茄子さつま芋紫蘇の葉等、鰯も少々まじつてゐた。濱へ行くと鰯を干した簾の上に、金蠅銀蠅が渦を卷いてよく飛んでるの、わたしあれを見てから鰯はきらひになつたと邦子がいつてゐたつけ。

來信葉書二通。

試驗豫定のごとく落第。勇氣回復の一策として日光へ行くから旅費をとうちへ申やり候ところ、親爺大目玉に候。

華嚴助

かういふいひなづけの君ではおみつさんの少しは泣くのも同情にあたひされる。

『土』の茨城言葉は、他地方の人に分つても分らなくても、茨城のしかも純粹の百姓を書く以上、止むを得不申候。それよりも何よりも小生は病氣になつて、只今下館に來て居り、『土』の稿を繼ぐ爲には大打擊に候。病氣は一歩あやまれば萬事休むとのことに候。

以前、兄より趣向を與へられたる『腕』のヒロインとも見べきもの此地に候由、花貌絶倫、年十六些の邪氣を止めずと申候。

長塚節

『土』が『朝日』に出はじめてからモデルになつた勘次を言はぬ人も無いが、おつぎももう二十を越してゐる。『源次郎さん(縣會議長)のむすこ(節君)もえらくなつた』と親類の年寄手合は言つてゐる。

從弟のゐた福岡大學病院に疽を病んで入院した十五歳の女があつた、星眸愁を含んでじつと人を見るのがたまらなく美いのに、殘酷のやうだけれど、どうしても片手は切らなければなるまいと、博士達は囁き合ふ。ある日從弟が手術室を横切つて

廊下へ出ようとするとき、武井君、武井君と後から呼ぶのでふりかへると白い事業服を上つ張にしたX氏が卓上の一物を指して、君は畫を描るといふぢやないか、一つこれを畫いて見ないかといふ。はと答へながら立ちよるとそれは錫の淺い盤に盛られた人の腕、五指輕く内にかゞみて落ち來るたまを受けんとするが如く、くれなゐなりしかひ爪ははやくも色あせて復輝くリングを見ず。上に一塵をとゞめず。たゞ滑らかに清らかに盤上に横たへられた腕であつた。『行つて見たまへまだ醒めずにゐるから、かう〳〵しい顔をしてゐてるよ、と博士はいつた。お母さんらしいつき添の女の人も背のすらりとして顔の輪廓の正しい美人で、唇をきつと結んでベットのまはりを靜に歩いてゐた。娘の顔は殆正視しがたきまで瑞麗に見えた。……まあちやん、まあちやんは詩人だ。この竺志少女をおもふと共にメロのヴナスをおもふだらう、涙濕春風鬚脚垂低徊顧影無顏色、コロロホルムからさめた時のいぢらしさを一篇の詩に作つて見てくれ』と手を握つてふり動かした從

弟は今肺を病んで日向にゐる。知らず、竺志少女と常陸小萩といづれか涙多き生涯をたどる。

この夜、一日卵ばかり喰はされたせいか、夢に朝鮮皇帝となつて統監曾根荒助の首を斬る。（十八日）

せうことなしに瞼をふさぐと、せうことなしに目もねむる。終日おとなしく蚊帳に籠城す。

納戸の縁側に蛇がのたつてゐるとかでたゝきだ箒だと母とおよねが騒いてゐる。あまがへるは逃げたらうか、それとも呑まれたらうかと心配しながらまた睡る。

吉田より、しとつていまにも溶けようとするドロップスを貰ふ。病氣御見舞とある、姉の書だ。赤ちやんが産れたのにまだ祝の手紙すらやらないでゐる弟に……と思ふとまづい菓子の不平を陳べる譯にいかない。けれど、何だつて女なんぞ産ん

だらう、水戸のひさ子も七月には滿つるといふからこれは、男にしたい、女ぢやくだらないとヒトの子に大きなお世話なことを考へる。

夜、あついのと苦しいのとで寢てゐられず、母にさとられぬやうこつそり蚊帳を脱けて西の雨戸を繰つて冷々とした縁側にすわる。月代がさすのであらう、塀のわきの樫の木が晝見るよりずつと高く聳えて、南に蛙の聲も聞える。

しばらくは、風無く雨無く一村閑たる天地間に、あたまを清まして戸はそれなりまた母のそばへ横になる。（十九日）

『もとの身に歸りて自由の歌がうたひたいけれど、家をのがれ出ることはもう不可能なのでございます。妻となり母となつてはしまひに並の町の女となつてしまうのが落でせう。すべての希望も輝きも結婚と共に滅びました。苦しうございます。辛いの。母はあるけれど、きのふの愛に接することはできません。あふひ』

『二十七日に猿島へかへります、詩を忘れたる敎へ子をふかくはとがめないで下さい。今は安價の地に甘んじて終らうと思ふのでございます。この二三日はいひ知らぬ離愁に襲はれて外出もしませぬ。はま』

才ある妻の眉はつねにひそめり、と詩人はうたふ。新婚を誇りて、纒綿たる情緒を人に語る愚劣の女さへ有る世の中に、葬られたる命を惜んでいにし日の自由處女の光、處女の望、處女の詩を戀ふる悲みもさることながら、戀に敗れて心荒み放縱不羈ほとんど狂せんとしてわづかに蘇り、慰安を萬一に求めて近く茨城の野に歸らんとする敗殘の子！よく其『改革』をなしをほすべき乎『まくらかの滸我の姫桃ふくめるを未だ見ぬども我戀ひにけり』故里には君を泣ける濃情の人もあり、歸れ只。

『白い白い高根の雪を見ると泣きたくなります、青空にくつきりとまつ白な額のやうな形して日に向つてゐる姿は、じつにきれいなのでございます。高根の雪に日の沈むを見てよく泣いたのは十五六のころでした、不思議な國があの雲の下あの山の

向うに在ると思つて「この命とるとはいはで落日はいくつとなるやわれ二十越ゆ」
きし子』白馬ヶ嶽の繪はがきだ。

如月の風柔かに、野を低く草に亂るゝ、くぬぎの木丘をめぐりて、青むぎの芽はまだのびず。

なげけども聲なき愁は、いく月か胸に祕めけむ、あゝ今ぞ沈默破れて、たぎり落つ人戀ふ涙。

人を送り姉を送りて、わが友は少なくなりぬ、夜な夜なの曉かけて、新しき夢は抱けど。

一筋の道蜿蜒と、麥畑の中につゞけり、其日君語りしことの、なほ胸のおくに住ふに。

あな寂し孤獨の思ひ。去にし日をまたも見せずや天つ日よ、輝く雲よ夜の星よ

あゝわが神よ。

神奈川の久良岐の小野よ今日よりの後の幾年、面ざしはよし變るとも、わが戀は永久に籠らむ。

師走の風ふく夕ぐれをあてもなく山や野を彷徨した時分わたくしの悲みは絶頂に達してゐたのでございます。若き命は若き日に長からしめよ。詩を作りてまづ御許にまゐらすることは忘れねど、十七にして人妻となりし敎へ子の悲みはおん胸にとほり候べきや。せん子。

噫、若きいのちは若き日に於て長からしめよ。君みづからいはずや。この日も一日ねてしまつた。

夜到來のうどんを喰ふ、一口でよす。（二十日）

起きる。

門を通る人は大概簑を着てゐる、多くは雨を衝いてしと〳〵、ぬかるみを田圃へ行く。細長い篠竹を手綱の代に轡につけて馬を走らしながら、馬鍬は肩にかけて行くのもある。

呆れもせずに雨はふる。あきれもせずに簑も行く。

通るのも通るのも簑と笠だ。はなよめでもなければ簑の下から褄つた裾を出しとくものは無いから、簑は男女一切不明なり、現に袖垣の脇から門内を覗きこんで、あわてて笠ごと頭を下げた人が勘ちやんのやうでもあり、浦公が細君のやうでもある。泥へちぼになつて畫田を掻き廻すかはり、あちでもこちでも夜早苗振がある、めつたに買はぬ魚も添はるし、酒も一升位はおごるから樂でないこともあるまい。

つひに雨のふらぬ年もないので見に出たことはなかつたが昔時はいよ〳〵植ゑじまひといふ日には、餘つた苗の投げつけつこから泥喧嘩が初まつて、女たちにうらまれてる男などは、手とり足とり泥の中へおんのめされたものだといふ。今の若い

衆は野良着の袖口にまで蒟黄のきれをくつつける位だから、女をおこらせはしない。女が利巧になつたのか、男が弱くなつたのか。

どうもよく降りますね、郵便まで沾れつちやいやしたと濡れてテカ〳〵光るカバンを肩から外して三つばかり出す。茶をのませてやる馬鈴薯もあるといふと、さうけ、ぢや御馳走になつべいと合羽をぬいで腰をかける。

『今日わ、鷄のやつこいのは宜うがんすか』貞さんだ、傘で高足駄で尻はしをりで岡持を提げて庭に立つてる。おい三道地のたいしやう、鷄なざわ賣らなくてもいゝやな、お茶が入つたとこだ、まあ招ばれろと郵便や。はあさうかねとこれは傘をひらいたなり戸ぶくろに仰に伏せた。あついのを一杯のんでから、おめえ道草ばかり喰つてゝ猪瀬の旦那に知れたら免職だつぺと喰らはす。なあに、五月さ中めつたに代がめつからないのは局長さんが承知してらあ、どれ其積りでせつせと油を賣んべとそれでもさすがに長くはゐない。いつでも堅いのを持つてるからとは思つたが保證

かしわの雌だといふので一斤だけ買ふ、代金二十三錢、貞さんは歸りしなに刺身にして召し上つてもうまうがんすと敎へて行つた、冗談ではあるまいけれど。(二十一日)

勞れてるのでよく夢を見る。いろ〳〵の人の顏が見えてこんがらがつた聲が聞えて、しまひにははつきりとあなたはもう貧しい人なのよ、あなたをえらい方と思つてる人はひとりだつて有らしないのに、まだ知らずにゐらつしやるのねと言つたものがある。邦子の聲だ。手を胸に組みてしづかにこの IRONY をおもふ。

零落の人の嘲る聲は、やがて强者の弱者をしへたぐる聲である、親をこらす子の聲である、師をのりはづかしむる敎へ子の聲である。

十時をきいてから起きる。9度の近眼鏡を光らして中の間に蝶の出る繭を選つてる母と、挽割(麥)を借りに來て緣側にねそべつて子供をあやしてるお源とゐるばか

り、うち中がしんとして靜かだ。

頭が痛いので何する氣にもなれず、母に手傳うつもりで繭をかき廻すと蛆の蛹があつた、焦げたような皮をしてる、蠶を喰ひ殺して繭にまで穴を明けるくせに自分まで裸のまゝ蛹となる無性ものだ、頭と尾とを引つぱつて裂いて見ると生々した色だつた。

上段からまた繭が緣側へころがりおちた。母の膝には三毛の鬚を動かして睨んでゐる。と頭だけ脫けた蛾は小さな鋸のやうな眉とひつかけるものなき肢とを空に延べて蠢々と出て來る、繭はまたころ〳〵と動いたのでちよつかい好きの猫は跳りかゝつて雨の中へ遠く庭へ飛ばしてしまつた。こら馬鹿野郎拾つて來いと耳をはじいてやる。

塀ぎはの石榴の蕾十三見つかる。

燕がよく飛ぶ、前倉の家根の上に七つ八つ九つ集つてゐれ瓦の上を跳ねてゐる。一匹、白い小なさおち羽を咋へて口から離しては咋へ、咋へてははなし、圓を忍がいて飛んでる、あとを追うて、羽をとらうとでもするやうに蹤いてまはつて飛ぶのがある。

ありや子どもにどんば(蜻蛉)や、ちよちよつべ(蝶々)を捕ることををせえてるのだねとお源が感心する、お源ら今日はゆつくりだな、股引も穿かねいで、もう田う忍はをへたのか、絲とりには明日から來るのかと聞くと、どうしてそれどころか、たね屋へ苗代を搔いて貰つたもやひがへしに行かなくちやなんねい。どらもう行ンべ、さいならと行つてしまふ。片手に庄公をかかへて片手には割麥を入れた笊と傘とを持つてる。

喧々啄々、倉のやねにはあひもかはらず燕が啼いてゐる。

毎年やつて來て子を生む古巣は釜場の天井から吊つてある、雨に風に苦勞しては

ぐくめる子はやうやく巣立つてか今朝は三匹だけ、巣のふちに白い胸を并べて外をうかゞつてゐる。窓の間から障子のガラスからちらと差す友の影を見たのであらう、ちちと啼きながらつと巣をはなれた。

二匹はまつすぐに戸口より、一匹は廣間の欄間から中の間にうつり、疊の上一尺ばかりの處を南へはすかひに、へんぺんとして雨の中へ飛び去つた。

艶ある黑き羽よ、千里萬里雲に翔り浪に觸るゝ長き翼よ、空飛ぶ神の子にさいはひあれ。

母が久しく髪を結はぬからとお角を呼びにやつたが繭からてふが出るので絲にとつてしまはねばならぬし、それに浪公が嫁とぶつかりこして簞笥を庭の中へほろき投げたとか何とかごたくくもあつて來られぬといふ、およねに手つかねに上げさせることにした。

青磁の鉢へとつた金蓮華を前にして、母の口うつしのまゝ嫂さんにおくる手紙を

書く。髪を上げながらおよねが見てゐてあの私、七ちやんと書いたのがありますからどうぞ中へ入れてと鉛筆がきの半紙を室から持つて來た。拜啓さきごろはかひこをてつだい下されまして誠有難く存じ候、蠶は二十七貫ばかりとりましたがおくれましたので三圓八十五錢づゝでした北海道へ行くとちゆ如何もなくをつきなされ候由時候はいかゞに御座候やしらせ下されたく候田うゑもおはつさんと太郎さんとたのみまして四日ばかりあとにをわりました清作さんは一日雨の降る日に致しましただげでちぢまつてしまひましたから私とおはつさんとで田ぬしとういをり候、父母様もじようぶでありますから御安心くださるべく候。うめ七さまおもと、よね子。中々名文だ、七ちやんもたまげるだらう。が田ぬしとういをり候はよめないと言う。と、だつて清作さんは他が西つちいへば東、行ンべつちいへば行がねえ、爲るなち仕事はやる、田螺のケツマガリなんだから、お初さんとそいつて命けた名めへなんだから、だから書きましたと意氣昂然としていふ。

雲ちぎれ飛んで日あきらかに見る。

霖雨やうやく霽る。雲雀も鳴け、水鷄も鳴け、常陸平は草長し。（二十二日）

かげろふ

ある女の語れる戀

星美しう輝いた晩だといひます。

お祖母さんが十七におなんなすつた年の秋栗毛の駒に鞍を置いて、前にはけんもく槍も立てたのでせう、振袖に花をやつて籠にゆられゆられ、樫ばかり澤山に生へた宅へお嫁入した時、持つてらしたお布團ださうですが。

其頃は何といふ名だつたか、地はオリヴの濃い色で唐獅子に牡丹の花の三つついてる大模様なのです。それを四隅四角に引ぱり合うて廣間の炬燵を中に、兄弟五人が、私が首をすくめてるのと、皆眞似をしてすくまつて暖つてゐました。

外は雪。ガラス戸を透して内庭を見ると、池の上へ被さるやうに茂つた五葉の松に、ちらちらと白いのがかゝつては消える。其下から二番目の枝に地鶏が四羽牡鳥

を中にしてこちら向いてやつぱり鳥も寒いのでせう首をちゞめて。

私の右に仰向になつて、足をばた〳〵と櫓の下で暴れさせては、疲れると私の膝の上に持つてくる、粲四郎は七歳だが何といふ腕白か數が知れない。眼の玉が誰よりも光る子で寒いのに足袋がきらひで、それで氷渡もする竹馬にも乘る。

美いちやんと呼べばいつも莞爾と笑くぼを見せる眉の美しい子、十にもなつて紅い手をくぢくぢ緋の絹絲を環のやうに縺らかしては二重瞼の目をきよろんとさせてるのが美和。

謙太郎は大きな形をしながら左の手で耳たぶを丸めては放し丸めては放し誰かのお伽噺をふしをつけてうなつてる。何かといふと姉さんなどはお蠶はどうして繭の中へ這入て行くか知りもしないでと惡口をきくですもの、きらひ。

人を魅するやうな柔かい眸の光に射られては、誰でもきやうだい中で一番可愛いのは房代だと仰しやる、袴をつけて路を行く時には桃色のりぼんが極似あふ。うす

櫻の花のほんのりとした頰を布團へひつたりと埋めて『東する雲見る毎に』とうたひさして、つと外方を向いてしまつた。

私は涙がこぼれました。なぜにとお聞なすつてはいや。

たゞ、はしをりかゞむ同胞同士、かうして同じ火に暖まりあふのも何時までやら、自分はまだやつと二十歳になつたばかりだけれど、男の子達は父と同じ運命に陷るであらう、妹たちはまた母やわたしの悲みをくり返して泣かねばなるまいとやうに思はれるのです。杞憂でせうか。

深き林の道をくぐりぬけて遙に西の堤に傾きかゝる夕日を見、それの落ちぬ前に坂を上つてしまはうと、せつ〳〵と急いだけれど、草にまろぶ紅爐盤は跳つて浪にかくれ行く兎のやう、私の坂を驅け上つた時はなごりの光を紅の霞に留めた瞬間だつたので、袂を嚙んでしばらく草の中に佇んだことがありますもの。わたしはきつと暗い路ばつかり歩いて行くのでせうよ。

暗い路——暗い路、それはどんなにか寂しいでせう思うてもぞつとします。

が、辛い今の身の上を忘れてをりにふれては幼な子の昔にかへる夢を見ます。紅い絲を毬にかゞつて廂低き倉の前で雨を怨んだ時代は御座いました、始めて靴をはいては、女のざいに生いきなと男生に埃をふりかけられて泣いたこともありました。

私の毛は握るにはあまるほど多く、ほどいて逆に櫛をあてると膝もかくれる位長い。朝に梳き夕に梳りて艶やかにあげとくのだけれど。

かげろふもゆる春の野にすみは一人眸を草にこらして蝶のやうに前にうごく夢の影を追ひました。

白いけれど紫鹿野の山にかゝれる雲は重さうに山の腰を繞つて、いく度か霜柱が立つては麥の根をもたげたらう野は冬の睡りからやつとさめたとやうに、かげろふは小石からも塊からも、さては旅人の捨て去つた古草鞋からも立つてゐる。

空は碧瑠璃の鏡の影をたゝへて、晶には見えるけれど、地に遍き陽炎は、たとふ

れば月清き海上の夜とやうにきらめくので、柔かなる春の光は天にもかげろふと共に充ちてゐるのでした。

『すみ！』

誰なれば人無き野路に、

立よどんで聲のした方へと眼をたどらしました。

そすと、あらびやんないとの繪にでも有りさうな、屋根の圓い、窓懸のどれも皆みどり色な、石造の大厦を十歩の前に認めました。

人が二人。

蔦のいろ〳〵這ひ纏うた入口の石階の上に抱き合ふやうにして、女の方はそら色の服にきらびやかな裳裾を長う石の上に垂れ、あらはなる腕を人のうなじに纏さて——。

恥かしき人を見つるかなとつとかくれるやうに石の柱の蔭に入りていかめしき鐵

門の扉に背をあてゝ立ちました。

うち見る庭のめぐりは、くろーばあの綠、壁の色と映りて苑には薔薇の白いのやら紅いのやら。

『すみ！』

また呼ぶ——

呼ばれたのは今石階の上に幻の如く立つて居た美しの人でございました。

『すみ』

兩手をかけて、脇から背へ、輕々と抱いては耳に口つけて、すみと呼びなすつた、

現在は遠き國なるなつかしの人を、俯に見たのです。

すみとは現し世に負はされた現し身のわたしの名ですもの。

海燕

病院の夜は寂しいでせう。

雪の色、紅葉の錦、秋はもう暮れやうとするこの頃をほんとにわづらうていらつしやるのですか。

月波の山は雲を隔て浪を距てゝ島からも見えるけれど、許して頂戴、をとゝひの晩、湯上りの肌に秋風寒う衿をすぼめて袖に手を入れたのは遅かつて、其わしたから頭が痛んで顔がもえるやうで咳が出初めたの、御見舞に上つていろんな、お話をして上げたいけれど、左の肋までいたむんですからせめてはとペンを握つて、行く雲のおぼつか無きかなしみを心ゆくかぎり書いて見ます。風も無い月も無い静かな寂かな夜。

夜船漕ぎ沖にて聞けば常陸の海鹿島が崎に千鳥鳴くなりといふ歌を御存じですか、

わたしの居る島は夜船漕ぐ鹿島のなだでは無く、浪逆の海に沿うてるので、稲を植ゑに行くのにも船、田の草を取るのにも船、水ばつかりたくさんな霞ケ浦の中でございます。北の方に遠く筑波山の紫なのを見るばかり、山も岡も無いかはり、柳がよく茂つてゐかちやけた土を春夏にかざるの。

わたしは島で生れました。ことし十九。

父さんは慰みがてら一葉の輕きに棹さして網など打つけれど、母さんは潮來の祭を見にすらめつたに乗て行きません、公魚だの海老だのを煑たり乾したり、たまには海老を搗くとて冗談のやうに杵をとることもある、やさしい〳〵人で、あなたの母さんもきつと同じやうな方ですわ、わたしお許しを得て二人の母さんを母様と呼で見たい、いゝでせう。

何歳の頃から乗せられたか知りませんけれどわたし船は大すき。附紐をどこかへ結ひつけられて這うても轉んでも水へは落ぬやうにされ、田へ行つてる男たちや

女たちのおもちやになりなり、よく船の上へおかれたのです。

朝早く家を出る時はまだ眼が覺めないから誰かの膝にねてゐると、ちやうど田へ着く頃しかけておいた御飯が出來上るので、顏を舷から出して湖の水でぴちやぴちやぬらしてから一しよにおむすびをたべます。蘆間には鴉の巢が浮いてゐるやら、葦切の卵が葦の葉の中で見つかるやら、秋は空も水も眞青に澄んで子供心にもどんなにか船をよろこんだでせう。父の指圖に從うて稻を苅る者たばねる者、野ぼつちを拵らへる者、下からほうらよと懸け聲して稻束を投げ上げる者、みんな黑の手甲に股引をはいて。

そして歸りには上飛ぶ水鳥の行方も分かぬゆふやみの湖を横ぎつて、釜の下を燃しながら、夕食の烟を浪の上へ這はせながら、灯ちらちら門口の柳を目あてにして、交代に櫓を押して、母さんの留守居してる家へ歸るのでした。湖の中にも草がある から蟲が居りますわ、羽の茶色になつた蠶が皆の腰かけた舷の板にとまつて家まで

運ばれて來るし、おかま蛙が燕と喧嘩して負けさうになると草の中へかくれるし。けれど人の血を吸ふ黑いいやな蛭は居ませぬ。

雨の多い年には田が水浸しになるばかりか、家まで床上りをするから大變。木原の大杉さんの森や、牛堀の鼻や、眞菰や、水草や、雨の中に搔曇らされて、小見川の水も北浦の水もどん〳〵と浪逆の海に集るのですから、蓬をふいた船に乘移つてまつしろな湖の上に漂うたこともあり、十歳まで島の子として育てられたのです。

たとへて見たらわたしは海燕でせう。人の家の軒に巢を構む玄鳥の群を慕ひて、浪白き巖間の往家を捨てゝ一度陸にうつりました、花やかな友に交つて女學校すら卒へたけれど、海燕は海へ、わたしは九年ぶりにまた島の少女となり、深い傷を胸につゝんで船のみ通ふ水上に病んで居るのですもの。

つねにおひとりで辛いとは思ひませんか、寢ぬ夜床上に起き直つて、『窓から覗く南の星を數へて見た、碧いのが四つ白いのが一つ、白い一つの星に命が籠つてるや

うに思ふ』とあるお手紙を握つてわたしは泣きました。湖水に映る星の影は永久に新らしいでせうけれど、つらひ悲しい痛みを負うて生きてゐるよりも夢いさぎよき十九の命を静寂に逝くことが出來たらと思うたこともあり、ある日あんまり胸が痛いのでぶら〳〵と水のほとりにさまよひ出で、繋ぎ捨てゝあつた小船に棹さし、草を打ち水を彈いて堀割からとう〳〵たそがれひろき湖水に出てしまつた、顧る岸は低う水に漬かつて、柳がくれに脱れ去つた家も見えぬ、何の爲に女だてらに船に上つて寂しき秋の湖に漕ぎ出たか、軀も疲れ心もよはつて居りました、たゞ人のかたちの見えぬところ人の聲の聞えぬところへ行つて見たく、眞菰に渡る風は有りとも湖には浪の音もしまい、わが志す天地は山遠き水の上にこそと思つたの。

けれど、風が吹いてゐたやら浪が立つてゐたやらひとつも覺えず、十日あまりの月、わが肩を光して、夜はやうやうしづかに、しつとりした裳をとつて、冷たい舳先に座つた時、初めて聲を上げて泣きました。岸邊なる水つ上なれば憚るべき人も無

もの、今はとて瞼にあまる涙を手にて押へることもせず……。

船一つ、わが身一つ。淼漫たる浪の上に月は音もせず南へ南へとまはつて。

露じめる舷に手をつきて、月遠き遠方に水に目を放つた、立罩むるもやは霧とも煙とも分かず、月下に影ありて動くは船とわれと。

孤獨なるはわれ、寂寞たるは天地。身を湖上の船に横へて、わが世の月の一つなるを見れば、何者か心を占めて、おもひは迷ふ枯野の草、水はひろいけれど、船はあるけれど。

……わたしにも俤の人は有りました、……が。

火のやうに走り廻る性質と偏しきつた趣味と悲しい體格とを自覺してから、幼き人の俤は自分で揉潰してしまはうと決心しました。人は知らず、今はまのあたり見えてもわたしは冷かにわからめもせず過るのです。一しよに船に乘つてみづかげろふを追廻したことや、夕濱に据置の春の中でかくれんぼをしたことや、夢はとゝせ

の浦にかへるけれど、わたしは詩をおもふことゝ順々に心に映つて來る世に悲しい人を慰めることゝに生きやうと思うばかり、幼なかつた人の俤に詩を寄せて未來の夢は水で消します。

はるは馬鹿ね、月に泣いたり、寂しさに泣いたり、悲しきいとほしき人を忘れやうとしたり。

どうぞお大事に。今心の底からは涙がこぼれるのです。

さよなら、十日夜灯をかきたてゝ。

は　る

冬の蝶

『ひどく風が吹くこと！

ガラス越に御覽なさる花苑はどんなになつて？けふ私母屋の表庭へ廻つたら、石階のもとに長い葉の水仙があつて、黄いろな蕾が四つほど見つかりました。もうやがて花が咲きますわね、水仙の花だと思ふと寒い氣がするですが。

朝、冷たい廊下に足袋もはかず、何といふこともなかつたけれど起つてゐたら、母家の方からばたばたと足音して、十三になる子で、眉毛の濃い唇の紅い私の一番かわいゝきん子が飛びつきさうにしてせい〳〵いひながらかけて來て、あの裏の庭で黄いろな蝶が笹の葉にしがみついてかたくなつてどうしても離れぬので、死んでるのか生きてるかと思つて持つて參りました、姉さんといふ。

今朝霜が大へん降りたからきつと凍えたのであらうと掌の上へそつと乗せて裡へ

入り溫い息をかけて溫てやりました。

それは富士山――私はまだ海を隔て山を隔てゝ雲のはしさへ見たことないけれど――富士山の石室に棲んでゐる小さな鼠は冬は熊や蛇や蛙のやうに冬眠について、人につかまへられて動かず、かすかな息をとゞめてじつとして居るけれど、それをそつと火の上にかざせばだん〳〵動き出して瞳を明いて歩かうとする、火から遠ざけるとまた眠つてしまうと聞いたので、この蝶もきつとあんまり寒いのでねむりかけたのだと思つたからです。

と可愛でせう、死んだのぢや無い證には一つに閉ぢてた黄ろい奇麗な翅を蝶はしづかに二つに明けました。

けれど、うすい翅の右の羽には穴が明いて、かた〳〵は筋ばつかしで、その上に縁はもう破團扇のやぶれたへりのやうに裂けてゐる、飛ばうたつて飛ぶことはできません。どちらにしても永い命はあるまい、今かすかな春風がその翼に觸れて蝶は

甦へたけれど、つゆ霜つめたき野山に放つには花だつてもう咲いては居ないもの、いゝわ、死ぬまで斃れるまで見てゐてやらうときめた、掌から下して小さな本を屏風にしておいてやりました。

どうするかといふように笑くぼをよせながら見てゐたきん子はもうお返し、私が少しあつためてやるからつて翅をつまむ、驚いた、火のよくいこつた火鉢の上に、かざすのだもの。胸がどき〳〵しておよしなさい此處へ置いてちようだいつて、机を指していつしやう懸命に停めたけれど、おてんばさんきかん。

蝶はあつい火で俄に溫められたので氣が狂つたのでせう、ぷつと上へ飛上つて、あつと思ふ中火に落ち私すぐ手を突つこんでひつぱり出した、べにさし指にやけどはしたけれど、蝶が生きりや。

けれど死んぢまつた。私くやしくて涙が出た。殺しちまつたきん子の顏をねめねめ、燒けこぼれた翅の半分灰になつたのをかき集めて白紙へ載せて、だまつて見て

ゐた。

きん子は、いゝわね死んだつたつて、胸へ抱き着いては肩へ摑まつて私を搖すつて、かんにんと耳についてくすぐつたく言ふのです。

ぢや、あさつてお葬をするから、本となら花で亡きがらをつゝむのだが今冬枯の野にも山にも花は無い、花よか胸の血で染めたやうな蔦の葉！蔦の葉で燒けた蝶を埋めるから、蔦の葉をたくさん採つて來なければいけないと言ひつけて。

私黃いろの蝶を好きだけれど、いつだつたか山百合の花に來た大きな金色の星ある揚羽の蝶を捉へて、標本にして乾して髮へ挿してそして學校へ行つたことがありました、友だちがすぐ見つけて急に蝶とりを初めた人がいくらもあつた、挿したばかりの朝こそ輕くすが〳〵しておのづと人にも誇りましたが、蝶の翼は脆い、花をたづねてかげろふの野によわ〳〵生きてゐる命だもの、風に吹かれ風に觸れて、羽から先き折れるやら、觸角がもぎれて亡くなるやら、髮にはたゞ無殘なかたちを留む

るばかりでした。

蝶をいたむ歌に添へて、火に焦された翅を上げます、蝶に着すべき蔦の葉の一つもおん手にまゐらせます、願ふは悲しみの歌をしるして、心やめる一人の子に賜へ。』

と、花世さんは語る。感然としてうたへらく。

春淺くしてうす色の
花にかざしゝ翅ながら
ためいき刻む冬の日の
光漏るまで破れはてゝ
足に纏はる野葡萄の

蔓に縋るを死ねりと見て
掌にしてやさしくも
携へ來ては見する子よ

死ぬるにあらじ朝霜の
寒きに凍し黄の羽を
我掌に置けよ血の匂ひ
ほのかに環る掌の上に

霞流るゝ野つかさの
花の雪吹にまどひては
人の涙も誘きにけむ

光に馴れし瞳憂き

夕暮迫る道芝の
露の暗さに睡りしを
子等が利鎌に拂はれけむ
夢よ昔の瞳憂き

眠はさめぬ、冬ざれの
憂き眉あげし蝶々が
吾手を越えて美しき
友が袂に這ひ行くを

押へて火桶にかざしけれ
温、められて勢ひし
蝶は翼をさし展べて
飛びぬされども火に落ちぬ

飛びぬ、飛びしは遅かりき
火よりはすぐに救ひしか
たんだ弱りに弱りはて
羽は見る〳〵色かへぬ

痛まし、霜にこほらされ
火に焼かれたる蝶々よ

わづかに花の香を尋めて
冬野に生きしたましひよ

さすらふれども死すれども
今はおほはん花も無きを
紅浮ける蔦の葉に
捲かれて行けや夢の國！

敦盛草の紫を
翼の黄なると染めかへて
夏氷雨する深山の
風にも乗りて石に這へ

草藤小藤野に咲かば
斑のへりとる輝きも
ありとは分かぬ水色の
羽をかへして花に行け

（人の俤抱くとては
つゝむにあまる胸ながら
今を葬る蝶々に
そゝぐ涙はせめて許さむ）

いつぞやの日記

朝から雨、菊の花壇には蓬を葺たからぬれる心配は無いが、石竹ゑぞぎくなど雨ざらしの花はつめたいと思うでわらう。

儀一郎、劔ヶ崎の燈臺に居るむすこから來た葉書だとて見せに來る、例の蟲めがねで見るやうな細かな字で、『貸金は十年經つと無效になるから早くとれ』とある、『茂さんはぶら〳〵遊んでるならおれが世話するから官吏になるかどうか聞て見ろ』とある言文一致もかうくれば親爺だらうが舍弟だらうがしんしやくは入らぬので難有い。この人はいかなる人に對しても殿とより外に宛名をかいたためしがないのだから。

八百屋のおもせさんぶらりとまゐる、おばあさんが早く死んでくれないので難義だとの話あり、七十三になつて親をはぐくまなくてはならないのも不幸には違ひな

いが、頭の毛をばう〳〵させて痩せからびた掌で掻くとき、ふけが膝一面に落ちるのには弱らせられる。

『よねさんはゆんべ鷄なく頃にぐづろべになつて歸つてきたが、下館より村まで三里の間やみの中をのたりのたり馬に載せられて、手綱は兩手に持つたか持たぬか思ふさま胸を反らして見たくもない顏だつた』と佐一が言ふ。村の連中は朝から熊野山に待ちあぐねてそろりこつそり引上たのが多かつたが、さすがに凱旋の勇士を迎ふることとて萬歳の聲は森の中に湧き花火の音は野に轟いた。けさは一鼻がけに僕のとこへ來るだらうと思つたに、もう結城の鳴の里へ行つたといふ。

貞雄君神紙の裏へ捺す印形をほりかけたまゝ亨策と將碁をはじめる、鋭い小刀のやうな小さな鑿を放たらかして危くてならぬ。朝夕おれの机へおしかけて來ては木宵を拾ひもせずにかへる、ひどい男だ。夜雨藏書の印をやつてくれるといふから默つてはゐるのだが。

栗原のきんさん菊の花貰ひにまゐる、桃色の花瓣細かき大輪物をやる。金さん年中親類ばかり渡りあるいて、冬お箸を削る時分は宅へめぐつて來てよう削つてくれたものだ。今はお氣に入りの奥方と一しよにゐるのでもう氣まぐれも起さぬと見える。

父に命ぜられて、石岡、東金、土浦、村田、東京の叔父達に手紙かく、結婚の報なり。石狩のねいさんには長いのをあげる、この頃長いのを書くひまがない。のだが、やはり書けばわけはない。

しと〳〵雨を衝いて郵便來る、文庫と電報新聞と秋田公論と千田白雲の手紙と龜公が葉書となり。亨策夢中に貞雄君と戰つて居つたが、門の外から菊次であらう、『兄さん時事新報社から時計がついたよ』とどなつたので、はだしにならぬ計りにして飛出す。先生『少年』の懸賞作文に當選したのだ、さぞうれしからうとの下馬評起る。間もなくにこりにこりと愛嬌ある顏をして包ごと持て來た、夜はぽつぽへ入れ

とくだよと言つてやる。

女の海老賣まゐる、一升八錢なり。こんなにどうして捕れるときくと、雨の朝沼の淺いところに立つて手網を藻の下へ入れて追ふのだと答ふ。

夕刻亭ちやん饅頭と最中とを持參す、當選のお祝ひなり、うつかり奢れなんて冗談もまをされない。

夜新宅の小母さん提灯つけて來る、人散じてのち母とかたる。歸つたのは一時まへでもあつたらうか。僕はひとり奥の室にて弓張月を讀む、爲朝上天の圖に崇德院以下雲にのれるめん〳〵鼻が高く描いてあるのは滑稽だ。御馬前に白縫姫も立つてるが、これは鼻は並なり。爲朝といふ男のちに白峰に寂を示したとあるが、何故わざ〳〵そんな芝居をやつたのか、見よわが子孫の尊の諱をつくる者必天下を有たんと豫言したのが足利尊氏とは、爲朝に似合ぬ早がはりといふべし。も一つ爲朝にはあれほど崇德院の神助ありながら濛雲に逢ては弓も矢も役に立たず、小わつぱ舜天

一箭にしてさしもの虬を射殺したといふのもあんまりなひねきぶりだ。

弓張月をよむのはこれで三度目。

五月雨草紙

一

鳩は參り候、空曇りて雨になるらしき夕に候。

お示しの詩は一箇世を捨てし尼の山に籠りて、花やかなりしきのふの夢を戀ふるとのみ見られ候ふはいかに。痛ましきおうへは母にも告げず姉にも語らず胸一つにつゝみ候へど、許すとならば君にかはり、紅の血を紙に印してうき人に思ひ知らすべく候ふ。

君のごとき痛手を負へる人はふたゝびかたちを粧り色を含みて、仇し仇なる人に見えたまはんはつらかるべく、閑雲野鶴しばらくはおもひを世外に馳せんこと然るべく候。されどおとの君のおなじ悲みありとも覺えぬに、君とたゞ二人山に籠るといふを留めんとはせで、共に〳〵しめやぎたまふは何ごとぞ、あね君のいたましき

境遇に同情してその苦みをわかたんとの志ならば、あたら青春の身にあやまれる覺悟に候はずや、いかに。いたつらにおとの君を見て泣くのみの君ならんとも思はざりしに。

機だにあらば、わが病める身をあつかりたまはんとや、うれしと言はんよりも却りて心の痛むをゆるしたまへ。夢にのみ見る戀人のやさしき言葉ともきくからに、わが寂しき心は終に春の光に照さるゝこと無かるべきを思へばなり。

十四日、風吹きてほの暗き夕に候。灯はまだし、牛のしきりに啼くをきく。

兩國の君に。

二

暇だに申し乞はで都落の公達をまねび候こと、われながらにくきわがまゝに候へど、人は知らずわれにのみは容さるべき罪かとぞんじ候ふ。

霞關のしづさまにもことわりなしに逃出でたれば、今ごろは可愛らしき眼をかへして人を睨めたまふらんと恐ろしく候。花やかなる袖を例の襷に絞りあげてなぎなたなんどうち振りたりとも、雲はあかしよも常陸にまでは屆かじとぞ思ふ。

笄町の坂にてひと本ふた本莖のやはらかなるつばなを見つけ候、やがては君が家なる姫だちも袖ふりはへて小野に出でたちたまふらん、春はかすみぬ。

此處へと膝を指さして
招けば眼には領けど
母が袂に面隱
隱れて正に見えぬ子よ
忍び來りて背より

肩を押ふる手を攫み
抱けばひたと摺寄りて
頰にこそ觸れ額髮

緋色勝なる添紐の
端は輪形に手操まりぬ
年はと聞けば彌生子に
一つ違の姉と曰ふ

指尖輕う掌を突いて
いつちく、たつちく、太右衞門の
弟の姫はと敎ふれど

羞てか人の口籠りて

母に絡まる妹の
脇より衿を探るとき
知らず顔して眼を反らす
稲子は眉の美しう

あゝ我にも欲しき妹の
一人は母の許しなば
此子を胸に搔抱き
常陸國原見せんもの

旅の情に疲れては
睡らんことを念ふのみ
夢は綠の草の野に
涙も落ちぬ母を思うて

君は知らず、かゝる思ひも候ひき。麻布を去らんとして、むいか。

醉茗兄に

三

はじめて青山墓地を過ぐ。練兵場の堤のよし右手の岡は草綠に霞さら〳〵と美しき空の色に候。

花を携へたる切髪の人の傘だにさゝでかたより勝に來るあり、朝風に鞭を鳴らし

てまつしぐらに驅行く騎士も候。色あり形あり春は往還に動きて、あたゝかなる影も差せど、たゞ一歩、右し左すれば、石の扉石の籬とこしへに光を封じて木も稀なるに、蔦は紅の芽を吹いて石に纏はれども石終に言はず、蟲鳴いて月照りて。

おもへば乘鞍嶽に氷雨ふりて凍え死したるわが友も、さゝやかなる標は青山の野にとゞめきと言はずや。

名の尊かりし人はあり、鳥島の火に爛れ死したる人はあり、眉目美しかりし人と、朽木おのづから路にたふれし人と、萬骨ひとしなみに枯れて、石の新しき木の舊きも幾百千となく立續きて、小牧とも厚彦とも見えばこそ。たま〳〵にそれかと思ふしるしには、花大きなる木蘭の白々と咲きかくすなど人はみなつたなかりける命かな。

いぬる日人にたすけられて上野公園に上る。子を取る鬼の名に似でたをやかなるも、ふらこに乘りてわれは顏なるが帽に草色の絹を飾れるも、いづれは憂き身の

ともにあらず、木の間より透かし見れば赤裳裾引く少女の群の行くとのみ、わが立ちよどめるあたりは櫻稀にして杉木立小暗き物のかげなりし。人は肺を病めり、うち沈みて語るらく、かつて路に迷ひて谷中の墓地に出しことあり。草やはらかなる石のほとり、夕日にうつるあらゝぎの影を踏みて、緣こそ有らざりけめ怨なき身に人々の跡をとぶらひける中に、大岡郁子之墓といふがありき。墓のめぐりには春淺き曉の野に摘みためてか、いろ〳〵の花のところ狹きまで置並べて、墓の上には美しき花環の露霜にしとゞに濡れてかゝりたるが眼にこそ映りたれ、年は若からんかたちは二なく美しかりけん、人よ、悲しきいまはに思ひのこせる戀もなかりしか。われは十七年の命を終りとして死ぬべかりしをなまじひにながらへて、心はすでに滅びぬ、形骸いたづらに春風に呼吸していくばくを餘せる命ぞや。亡からん後は誰ありて、わが墓を築き、わが墓に花をめぐらし、わが墓に花環を懸けんとすらん、浪間に結ぶうたかたの脆きは人の命といへるに、君は常陸に歸りわれは都にとゞま

らば再會いづれの日にか期すべきと、『死ぬべかりし』彼女は何故に世に活きしか、問はゞ頬に傳ふ涙の色も紅からむ、ほそ〳〵としなやかなる手の、人をとゞめんにはあまりに弱きをとがむるな。彼れは泣かむ、さきに彼れにうたゐりき。

望絶えたるわが胸に
いまは光もなにかせん
寂しき朝のねざめにも
魂よかへれと願はねど
山は夕の月影に
夜を啼く猿の聲は馴れて
あゝ妄念の火の絆

悟刀は鈍し斷ちかねて
果敢なかりける七年の
戀を思うて死なぬ身の
風に散り散る病葉に
けふや涙のしげきかな

病める者は人に棄てられぬ、彼女はこの故に世に泣けり。病める者は人に忘れられぬ、われはわが名を忘れんとす。

さらば友よ、我は都を去ん。涙あらば人に忘られし二人の爲に泣け。

六日、櫻木町にて。朝の風、旅の衣を吹いて、半明きたる門の扉と、ほろ〳〵と花の散るを見る。たけを君に。

夜なり。

今地震ふりき、壁動き戸搖れてきち〳〵と家の鳴る時、たよりなき我が身の末の思はれてはしたなき涙も墮つるに候。

暗を衝いて赤子の泣く聲聞ゆ、□□なる君が子等も折々は君を戀うて馴れ來し寢間に尋ね給ふらんとあはれなり。

寢ぬ夜つらきは見はてぬ夢を追ふに越すは候はじ。頭を擡ぐれば壁にかゝれる人のうつしゑの、名はかねてより知り知らるゝ○○○子なるに、髮こそは未だおろさざれ、星月夜鎌倉山の寺に籠りて今は都にいでずともいふに、造詣淺からざりし繪畫の筆もなげうちけむ、あすは武藏を去る身なり、逢はで別るゝわが憾は言ふにしも足らず候へど。

四

○○○子にせめて兄あらしめなば彼は世に泣かじ、○○○子に一人だに妹あらしめむか、彼は拙き戀を思はざりけむ、うき人は絶望して陸奥のはてに歸り、すでに夫となり父となりぬ。何しに一人の世にすねて花なる袖を斷たんとするらん。

浮べる雲の富なれば、げに萬鎰の黃金は積むとも戀しの人には代へじ、さればとておほしたてられしたちちねの惠を思ひ、鏡にうつる面影の慘として色なきを眼にすれば、われと我身のいたまれて流石に尼ともならざらむ。

嗚呼、○○○子にはらからあらば。

林の中に烟見ゆ。

全山寂莫として、楡、山毛欅、樅の深山樹、冬は綠の濃さとも覺えぬに、絲の如き烟の枝を透き梢を洩れて林の奧に立てるに候ふ。

草は枯れぬ、百合の莖の黑くからびたるもあり、捩られしやうなる海老蔓の葉落

ちて一かたまりになれるもあり、火を放たば燃え燃えて山は炎に包まれなんと思ふ。風なきに草になづさふ山の烟よ。

たゞ一人殘れる妹を護らんがために、わが月波山中に住むも思へば久しう候ふかな、我が手を放れて彼は遠く行く能はず、彼を人の中におきては我が夢遂に成らず、父とや人も賴むらむ、母に肖たるいぢらしの子にさふらふ。

山は淺し、蔓草稀れに纏ひて樹ほしいまゝに茂れり、白きは何の烟ぞ。

そが歩みは遲し。空晴れぬ。

近づけば咄々人の罵る聲して、茱萸の木蔭よりつと驅け出でし小童あり、そここ探すやうにして、棒を小草の中にさし入れ、燻りたる繩の圓う環になれるに似たるを引きかけ、居たぞ居たぞと叫びて、そらざまに投げあぐるに、前なる草原にまた足音して、一群の惡童跳りいづ。

上に木ありき——投げられて落ちもあへず黑きものは下枝の纖きにからめるを、

土くれを放りあげ幹を搖り動かして突きおとせば復草にかくる。

烟見ゆ、はち〳〵と火の燃ゆる音して、子等が潛み居し叢の裡より上るなりけり。

めぐりて林の口に入れば、狼籍たりな榛椢枯れぬとは見えぬ枝を折り焚いて、青き烟青き炎立ち競ひて梢を縫へるに候。

盜み燒くべくも芋は野に盡きぬ、氷を割りて捕へし鮠をや炙るらん、奇臭烟に交はりて鼻を突くと共に子等はた集る。棒持ちたるが彼の黑き環を火に燒べて、見よ瞬間に這ひ出でんといふ、一人の子うしろ向になりて自れの裾を兩手にて擴げ、はた〳〵と烟を煽げば火さかんに燃ゆ。

噎す如き匂ひ再び立つに見るともなしに火を視れば、火の中に物こそあれ、烟の下に迷ひ炎の上に蠢いて、きと頭を立て口を明きて子等に飛びつかひとす——蛇なり。

時は今紅葉林に盡きて霜山に白し、落葉搔く子も來ずなりてより、林に動くもの

は猿と鳥と、野に動くものは水と烟と候ふのみ。小蛇穴に入りて冬眠將にこまやかならむとせしに、とらへられて火に炙らる、小蛇はつたなき過世なるかな。

われは山中人なり。

憐むべき妹を護りて、山に籠れる二十九年の涙よ。

愁緒しきりに動いて、詩終に成らず、たゞかの聖なる童女の上をおもふ。

君は人故に室家を逐はれ、○○○子はわれから棄てゝ家にかへらず、嗚呼二人ともわが山に來て花に培ふわが侶たらば。

四日夜

まゐる

池袋にて

五

浪の音、浪の響、耳に離れずして寂しきは春淺き太平洋の夕に候かな。

片貝の浦には霞は薄う靉く頃に候、三層樓の高きにのぼりて南に向へば、橙紅き園を隔てゝ、曲れる松の並木あり、木の間に白く透いて見ゆるは春の浪か、松の梢を漕ぐとも紛ふ漁船、帆を上げたるは遠く、下せるは近く、瞑目すれば、たゞ浪の音、浪の響。

渚の砂は深かりき。

浪高き時は沈むとぞいふなる汐入の橋を渡りて、行くに深き砂の路よ、右手は人に引かれ左手は弟に扶けられて、たどり〳〵と浪打際にもとほれば、かすめる空の果よりや浪は立ちてもかへるらむ、夕浪千鳥、浪の白きは飜れど、寂しさになれし我心は終にかへらず。

横はれる船の舷に肱をよせてはる〳〵と浪路の果を思へば、母います常陸も今は遠からず。

沖に連なる春の雲
浸りて濤の飜るらむ
鷗羽敲つ上總路の
海はとゞろと鳴り渡る

汀に曝す網の目も
入江に架けし板橋も
陽炎搖く磯の上
日は南に回りけり

浪の碧きに漂ひて

漕ぐとは見えぬ瀨越船
沈むとする〳〵現はれて
西へ西へと落つるかな

西は山ある安房の國
やがて夕日も蔭るらむ
海には浮ぶ潮泡の
凝りて成るてふ島もあらず

春は冷たき海なれば
生きたる貝はよも寄らじ
渾沌として漂へる

海月は磯の白玉か

海は深し、されど我が心には海より深き悲しみあり、海の荒るゝは表のみ、うちに騒げるわが心の浪よ、君ならで誰か測り、君ならで誰か知るべき。

海月を拾ひしは弟に候ひき、海の月といへば天晴れし夜は浪に泛びて遠く行くらむに、放てと教ふればまた浮かし候。一たびは浪に運ばれて我等の足下にかへりけれど、回きかへす砂に交りて浮きぬ沈みぬ、やがて見えず。

月朧なり、ほのかなる光、霧の如く天地に充ちて、漁村の烟しづかに、濤は夜半の枕にも通ふらむ。今、寂しき浦曲より。

人に

筑波雲

おきいでゝ、みはてぬゆめの、はかなさを、おもひくらぶる、あさがほのはな。

加曾伊呂婆、阿波禮度美須夜、毘流能古波、美斗勢爾那理奴、阿枳多多須士天。

一

さらば、悲しき野の人よ。一人の人を忘るゝためにすべての人より離れんとする切なる情はわれこれを諒す。君はなやめるならむ。

われは厚く君に向ひて謝す、君がわれに語りて俱に泣かんことを求めし日にわれは泣かざりき、堪へあまる君が嘆きに對してかつて慰めの言葉をおくらざりき。

君よ。

生命あるところ世は味あり、唯靜かなれ。

われは君の求めによりて、これより永く陰の人たらん。さらば悲しき野の人よ。

九月九日　夕顔の宿にて　一色醒川

鐘鳴りぬ。

降りゐる雲の低きに鐘鳴りてかすかにわが名を呼ぶ聲すれど、仰ぎ見んにはあまりに眩き雲なれば、秋草の中に伏して落すのみなるつたなき涙よ。

人を憶うてわが心痛む。

風波濤を飜る海門の秋、亂鬢頰に着きて涙や凄艶なる眉を洗ひけん、滿ち上る潮に陷ちて芳魂むなしく内海に沈めるか、鳴門の海は狹し、近く阿波讃岐の山々を見つらんに、島に渡りぬとのみ、音づれ絶えし人の行方の何ぞ遠き。

人を憶うてわが心疚む。

今はつながれざるえにしなれば、あこがれ心地人に見えんのおもひも斷ちぬ。何ぞや、心の暗くして覺むる期知らぬ夢の領にさまよひ、人來ると見て風を捕へ、人

去ると見て影を捉ぐ。人を思うてわが心病む。

一人の人を忘れんには、人と共にわれをも忘れざるべからざるか。名はすでに壞るゝ石に刻まれぬ、やがてぞ土に化りぬべき。

人を憶うてわが心傷む。

わが額は重し
背よりする光を厭ひ
前に動く影を憎む
人憧憬の夢にばかり
生くれば長き命なるもの
友よ見るとも
伏せたる眉を咎むるな

わが首は重し
野に籠らんか雲從へる
海にせんか水流るゝ
行くに侶なき一人ならば
影なる我に神は來らむ
友よさらば
夢見る人の眼を突くな

わが胸は重し
匂へる花を岡に探りて
袖にすとも詮あらんや

常陸の秋は小野に入りて
唯雨の音風の聲々
友よ知るとも
沈める色を罪なふな

わが心は重し
野がくれ青き草に潛みて
花に埋めし味氣無の身
美くし母の腕に凭りて
幼き夢の國に到らむ
友よ今は
保人の名は言ふ勿

二

鬼奴川の流れ白う見ゆる青草の上に坐してまだ見ぬ君を忍び候。
筑波の秀つ峰は眉を壓すばかりに近く〳〵聳えて、空はあざやかに晴れ候。
塵深き都に生れて十八年の春を迎へし、名は春と申候。
おん名ははやくより胸にしるしぬ、今近う參りて名にのみ聞きてし山に向へばいとゞしく見えたく候ふかな。
わが若き詩の想は雲に卷かれて北に流れ、君が夕の詩の料ともなれ。下總よりは川一つ隔つるのみと聞くに、推參の罪は許されまじくや。
さらば、やゝ寒の秋の夕をいたはらせたまへ。

三　日　夕ぐれ　　春　子

今筑波は紫にたそがれて、空にたなびく夕雲の色眼も眩いやう……あゝ此美しう暮れ行く秀峰を君は常陸に眺めたまふらむに、豆の葉黄ばめる豐田の野に立ちて、仰ぎ見る山はたゞ紫に、靜かなる野はやう〳〵に暗くなり候。
月はまだし。やがてその光東の方に見え候はゞ、露の野にキオロンを奏づべく候、君住む筑波の方に對ひて『彼方なつかし』の曲をだんずべく候。野は遠ければ草の聲にまぎれ行かんとも、見ぬ別れともなりなんを遙に聞え參らせんとのうらみに候。
秋の寂しさに泣かせたまふな、寂しくば春を妹と呼びたまへ。

五　日　夕　　春　子

よべの月はうらめしくも雲におほはれて候ひき。
さすがに秋なれば朧なる影は野に充ちて、わが彈ずるキオロンの音は、上りて、月の宮までもとゞくらむと思はるゝまで高う〳〵鳴り候ひき。今宵も明日の夜も必

ず月下に立ちて奏でんに、歩みたまふはつらくとも、ひとり外に御出でさせたまへ。月筑波のかひよりいで、影は常陸と下總とに分れて落つとも、傷ましき君が俤も、うき雲かゝる春が眉も、てらすは同じ光ならずや。

夕ぐれ野に立ちて泣くわれはつたなきをとめなれど、いたはしきお上をおもへば、涙のおち候。

六日　正午　　春子

里居せし月の十日を忘れめや、君と逢ひける涙もあるに、

月の影さす小さき間に
暗んずるまでよみたるは
病を負うて詩に生ける

涙溢るゝ眼をあげて
月波の下に傷ましき
君がすさびの集なりき

嘆きたまふな孤獨の
召さるとあらば都より
秋寒凌ぐ衣手に

暗の森越え林越え
峯の姿は悲しみに
終に堪へずと俯伏せし

路行くをすら許されぬ
わが世の秋のうらめしく
なやましげなる君忍び

君に忠實なる妹は
君が手元に歸り來て
涙は拭ひまゐらせむ

沈默をこめて身に迫る
戰く胸を手に押へ
巨人のさまに似たるかな

廢人ぞとのたまふに
峯の高さを仰ぐにも
弱きか我は涙して

去らんとすれど去りがたう
惑ひよ君の眼を見れば

行かんとすれど行きがたう
寂しき色のかゝれるに

限もあらぬわが君の
わが髪引きて結ばせぬ

胸の泉は忽ちに
『永久なる兄よ妹よ』

斷つよしもなき胸の緒の
きよき心は君ぞ知る

切るすべもなき彩絲の
赤き心は我ぞ知る

我は夢見き秀峯の
曙の色よき麓路を
我手に君の肩さゝへ
語らひながら辿りしを

我は空想ひき秀峯の
たそがれ清き沼岸に
我が腕に凭る君を呼び
『兄』と笑ひて立ちたるを

君が夢路を護るべく
君が涙を洗ふべく

山常久に聳ゆべし
水永久に澄みぬべし

愁も笑も頒つべき　　清き誓はすてますな
兄と妹の仲らひは　　あゝ長かれと我も祈るに
見えける夕、別れんとしておん胸に

は　る

九月八日！

かりそめながら寂しきお住居も眼のあたり見、愁多きおんおもかげも近く見まゐらせぬ。許させたまへ、多くはものいはぬむかひゐにうとましとも思しつらん。ふた年ののち春は人の國へまゐるべき身に候へど、思ひ出の九月八日を忘るゝことはゆめにもあるまじく候。

暇申してのかへるさに、ひとり青田の路をとほりて、十二天の森ぞと敎へられし木の下陰にて、今、夕立の雨をやり過し候。

袂すこしぬらして。

途にて

宵暗の空おぼつかなう雲凝りて筑波は見えず、家を廻る蟲の聲はいどゞ人忍ばしの思ひを增さしめ候。明日こそは思ひ出多き月波の本を去るに候へ。南へ二十里、再び都の人となりぬとも、絕えずおん上に幸多からんことを祈るべし。

思へばつたなきはお上かな、なれにし人の俤は君のみ胸に宿り我が懷にもいだかれて候へど、いかなればか人は二度常陸にかへりたまはざる。病を負うて世に泣く君が上に、かすかに射し來し光のあとたえて、君はまた寂く暗き道の長手を辿る。

されどされど親しく君に見えておん手の上にそゝぎし憚もなきわが涙はよも忘れ

たまはじ。人去つてまた來らずともねがふは一人に慰みたまへ。あゝ妹の一人あらばと歌ひたまひし、妹は君に來れるなり。

江戸川を下らんとする前の夜　下總より

相會うて何をか語り相見て何をか泣きし。秋近き日の光に黄に塗れる壁のほのぼのと照さるゝ下にありて、われ寂然としてものいはず、彼女も亦かうべを垂れて唇は堅う閉せるに、たゞ髪に挿せる桃色絹のあざやかにのみ見えたりしか。

足いまだ山の土を踏まず、手も亦草の露に濡れねば、人終にさびしき里居に堪ふる能はず、あくれば舟に上りてよしきり飛ぶ江戸川を下らんとぞ言ふ。

わが心は鬱せり、ともすれば柱に凭りて雲の行方の眺めらるゝに、さし向へる、人の胸にもつゝめる瘡の深くして。

同じく失意の人とはいへど、黑髪長う柔かき處女の身と、形すでに死して心もまさに死なんとする癈人のわれと、比ぶればおもひ量れば涙は誰の上にか多き。

と見る人の瞳は輝やき、頰にはかすかに匂やかなる血のめぐりて、玉の如き涙はほろ〳〵と膝に落つ。嗚呼、人は泣く。われ故に少女の友は泣けり。

わが人に別れしは嵐はげしき夏の夕なりし、風秋に入りてこれもまた歸るらん。

いでさらば。

人は去れり
天の一方に手を擧げて
來よと招くを眼にすれど
露おほき野の草原に
雲の薄きが行くばかり

人は去れり
寂しさ迫る誰彼の
暗きに立ちて名を呼べば
隠れ勝なる絲遊の
夢幻の影も惜まるゝ

人は去れり
昨は乳の欲しかりし
母も戀しの人ならず
睡んに瞼の眩ければ
白日の光の厭はしき

人は去れり
水も流れよ雲も逝け
一人の上の秋ならば
葉山茂山影うせて
月波は冬の木立せよ

我れには人は
電の
光の中に
來ぬるのみ
我れには人は
電の

光の中に

去にしのみ

手は白かりき森の沼
若葉の淵に舟泛けて
水を彈きしたまゆらの
人は我より匿れけり

菱の實くらふ鴻の
岸に鳴く夜は萍の
白める花も燻むらむ
仄かに煙る霧降りて

毛は黑かりき有明の
灯を恥づる對坐に
愼ましかりし物腰の
夢のやうにも見えながら

色亂なる花苑の
星は新に輝かむ
面影去りし朝より
吾世は暗くなり初めぬ

草長うして

瑠璃色の
山は常陸に
秀づれど
野の花に見る
紫の
月波に君も
離れ行くか

立つに艱まば
我が肩に
倚れと吁く
妹の

無邪氣なる
顏見れば
放しともなき
諸手かな

姉と言はるゝ
年頃ならば
憂身を膝に
投げかけて
疲れし額
胸に凭せ
唯一時を

睡らまし
三櫛黒き
毛の亂れ
頰とすれ〳〵に
寄添ひて
我がはしたなき
涙をば
匂へる袖に
伏せんといふに
形はすてぬ

影を追ふ
涙は母も
許すらむ
夕の光
さし入りて
靜かに動く
壁の下
青き葡萄の
房がくれ
蛇に戯る
栗鼠のごと

たゞ人の眼に
憧がれて
生くる命と
知らざりし

武藏の西に入方の
月を慕ひて落ちにけむ
稀には風に吹かれ行く
悲き人を夢れど
妹よ

今はいためる胸の奥の

俤人となりぬるに
秋なり、さめて詩の宮に
我は廻らむ龕の
扉は打つ勿

三

いたましき言葉かな。俤を忍べばかよわき胸を抱ける君が姿の彷彿として見ゆるに。われせめて都にも居らば一日の閑を偷みて訪ひ參らせんに、母にもいはぬうさつらさを心ゆくばかり聞きても參らせんにと、心は東の方に迷ひ行くに候。

今はたゞ君が祕めたる龕の奥とこしへに美しき人として情ある面かげのかはらで御身に添へかしと願ひ申候。詩の人美の人かたみにきずつけざらんことを祈るに候。

今はおん身は靈の人なり。

いよ〳〵人の世の情なきを知りたまひしか、うつくしの戀もやさしの姿も現實に求めて得べからずとさとりたまひしか。

影きよき月波の山、色寂しきひだちの沼はかぎりなく君が詩の領たれ。

浪速は夢の多きところ、おもひ出なりし夢野の昔したはしくはおはさずや。

わが手放れし白鳩は
われに再びかへらじな
雲井はるかに仰ぐとき
木の葉は雨と落ち來れど
胸に殘りし花の香は
常世の春をさゝやけど
抱くに輕き鼻紙に

勿忘草はしをれたり

君よ、たゞすこやかにおはしたまへ

なには津より

西山いほり子

雨降れりき。

わが參らせたる文殼はたゞ野火の烟となしたまへ、一度都に離るれば生きてかへるべしとは思はぬ旅なり、賜はりしも灰にせんにと人の言ひ越せし日。秋雨白く風つめたく吹きき。

七つかへりし鷄の雛の四つ殘れるが尾羽も地を摺るまでにしほたれて、納屋の唐箕の陰にひそむを見たり。

疾くおや鳥にすてられたれば、牛部屋の前にこぼれし麩を拾ふにも、繩がらみの

梯をよぢて辛うじて塒に入るにも、同じ褐色の毛の柔かなる雛は相ひきぬて離れず。たとへば彼漂泊の旅を行く人の子等か。

もの憂き身を椽に運びて雨ふる空にながめすれば、柳の葉に傳はる雨の霧と亂れて頰に觸るゝに、物思ふに見えんことを避くれど、睡らんに一人なるを願へど、ひとりにならば我が子は死なんとや氣遣ふ、母は許さず。

周防の久保白泉より浪いろ〳〵の磯の小貝を贈られぬ。千夥萬夥玉の小筥に滿つるまでは、くみどに籠る新妻にすら拾はせたりと聞くを、母にすかさるゝみどり兒のわれならば貝も彈いて遊ばまし、姉は森の家に入り、人は西の國に去れり。貝の色に見る倭文機雲は遙けき空に流れて、金風野を吹いて波の聲と聞ゆる草の夕なりし。

雨つめたき日なるかな。

母の聲す。膝行て奥に入れば、床には昨日切りしといふ投げ花あり。萩は頭重げ

に垂れて紅は半ば紫に褪ぬ、翠菊の白きは日かげさす西に傾きて、花なるも蕾なるも同じ向にのみなりなんとす、光を戀ふればなり。

嗚呼、光に生くるものは光を思ふ。暗ければ野の花すら光を追うて明るき方にめぐるにあらずや。

花はたゞ自然の下にあらしめよ、さらば胡蝶飛ぶこと稀なるとも朝は露の清からん。人行いて園生をめぐらざれど夕の光は匂はまし、まして誰培ふともなき園のすみに春芽を抽きてより秋に入りてはじめて咲ける花なるをや。自から枯らすとも花の命は長からじ。

默然として人に似てつやなき花に對すれば、雨の音靜かに、裡は枕ほしき夕となりぬ。

わが書牘は燒かれしか。

おくりしは斷れ〳〵の紙にかきたる文字すら、人の胸に矢と徹さずんばやまじと

思ひし心の跡なり。一つなりし現し身の影を人に投げて、わが思へる如く人も思へ、人戯れなば、われもおどけん、思ひあがれると心沈めると、哀しきと樂しきと、自他千里の違ひこそあらめ、くまなき月の光には天外遙かに雲の飛べるを悲しみ、袖に袂に飜り來る花びらには一瓣一字はかなきうたを載せしも、皆立ちのぼる烟となされしか。

たゞおもふ、灰には血にじむ涙のあとは見えざりけむ、めら〳〵と火つきて飛ばんとせし紙のはしさへ殘さず、人の手なるは悉く焚かれぬと。

麥芒燒く麥生の村のうす烟、秋は壁に鳴くこほろぎの聲をも聞くに、脆きは人の涙かな。

東山の花見しもこの春を限りか、西山の月見るもこの夕かぎりか、さても死にともないことぢや。

東山の花は知らず、我が植ゑし草の花は春に秋に種よりこぼれて咲けど、月こそ

は柱に縋りて森におつる影をも見れ、秋いくばくを餘せる命なれば、一人の空にむかふらんと、眺むれば望めば、寒さは心を照す光なるに、雨よ何時わが墓上の石を叩かんとする。

われは病めり。

四

筑波の人よ。

野に病めるいぢらしの弟よ。秋立ちて風つめたうなりぬるに、かなしき夢はさめざるや。

人遠く雲水の影と消えぬとも、君が胸の奥に彫りつけまたはむかげはとこしへに幸われ、うらわかき姿はかはらで君に美しかれ。

君よ、沈める玉の光は問ふな。願はくばとこしへに詩の宮をめぐりて、藝術の殿

に幸を享けよ。

うす紫の暗の夜をなつかしみ、人にはあらぬ人の影を灯またゝく祕殿に探りて、うつし世のみにくきからは追ふなかれ。

美しき幻影はやがて神のもとに成就せむ。

曙は近づけり。

君が負へる傷は深し、されどかく君が傷めるは更に大いに磨かれんがために候はずや。曙は近づけり、光は君を照すべし。今は只人なき室になど籠らせたまへ。

近からば迎へても思ふがまゝに振舞はせん、我膝は君がなげきの床ともなれ、我腕は俯伏すうなじの柱ともなりなんに、神よはしき子に命あらしめよ。

あ　ね

山より

雨しと〳〵と、あたら一年の光は空に消えて寂しき宵に候かな。雲は常陸の野に

も影暗うはびこりつらむ。心ゆかしにとて供へたる芒の前に、灯に背きて落す涙は、月も知らず雲も知らず。

武藏は秋の風ふけて、草むらにきり〳〵すの音もし候病みたまふに朝の露は夕の霧はと思ひを東の空に馳せて安からぬ夢もむすぶに候。おん手をとりておん肩に凭りて、つらかりし悲しかりし二十餘年のさびしさは、たゞ一人には聞かせたまへ、聞きまゐらせん。名のみに過ぎぬはらからのしげは南にはなれて候へど。

せめては北する雲に思ひをよせて孤獨の君が眼にかよはまし、つめたき椽に佇みて南より流れ行く夕の雲を見いで給はゞ、美しとみづから信ずるしげの心の行けるなりと思ひたまへ。

草にかくれおはすとも、君よ。

月無き夜

し　げ

鳴りも止まざる波の音は
寂しさばかり藏みたる
胸の奥に沁入りて
自と垂るゝ首かな

巖驅上る波の泡
岬を罩る波の霧
地には聲の高かれど
海は一人の友ならず

海はされどさびしかりき。
濤の音春の海をめぐりて、空の雲低う、鷗だに飛ぶと見えぬに、汀はおのづから

なる石だゝみ斜に沖に入りて、碎けてかへる波疾く。
海鳴れり。
見よ東する船ありと指して人の敎ふれど、眸を凝して眺むるに、白きは雲の色とも見えず、船は波に烟は空に紛れて、光をつゝむおぼろ〳〵の春の海、海暗かりき。
潮風辛き磯曲なれば春といふに花も渚に咲かざるか。寸に足らぬ芝草の飛び〳〵に砂に交りて、冷たきは素足にからむ草なるかな。
やどがりを捕ふると人は浪打際なる石を辿りて遙けき汀にへだゝりぬ、ものいはぬ巖の幾つか中に立てど。
我が腰を下せるは灰色のつぶら巖にて、面はなほ濡れたるに乾きし貝の石とおなじ色せるが遲々として這ひめぐれる、笠貝卷貝、貝は豆よりも小さきに、黄とも見ゆるみどりの波の相打ち相亂れて、石たち圍める岸に寄れば、浪は湧回る泡となり、霧となる。

打ち渡す海の面は太平洋の縁をなせる犬吠崎の鼻なり、右も浪、左も浪、呼べど答ふるも浪、かへり見すれど見ゆるも浪。病める身ひとり巖の上に殘されて、冷やかなる額に觸るゝ霧の玉とすら結べるを、母や見ば走り寄りて疾く下りよとなげくらむ。

目をふたぎて見じとすれば、周りめぐる海の音は刻々高くなり來りて、胸は恐れに滿されつ。耳を蔽うて聽かじとすれど、よもに狂ふ白浪の面にわが世の影は映れり。

五

雨夜の月の朧々
影無き湖に船行りて
岸遙かなる草の灯の
青を色にもなつみしか
かすみが浦

山に見えけり朝の雲
容は似ねど北すれば
西小治田の森つきて
筑波の峯に現はれぬ
かすみが浦

されど山はさびしかりき。

舲に凭りて見上ぐる月はあるかなきかに光れり。乘り出でたる大川の利根とし聞げばなつかしきに、睡もやらで獨を船の中に守れば、北にすゝむとおぼしく月は左

の窓をはなれず。夜もやう〳〵更けわたりぬ。

枕流るゝ船人の夢は今利根川より霞ケ浦に入りにけん。

朧夜に加へて雨さへ落つべき空合なれば、湖中に堤を築きて田をつくり、舟を操りて往來すと聞く十六島はいづれとも分かねど、水路細くして蛇の如くまがれるは島と島との間を行くか・蓬ふける親船の行くに會ひし。靜かなる夜なり。

船浪逆を出でんとして、水に沿うて建てたる一つ家より、あか〳〵と灯影の洩るるを見し時よ、家に母あり、今宵船にして霞ケ浦を越すとも知らず、いく度か枕をあげて病める兒を思ふらむ、なつかしき光なるかな、山近し、故里の野にも火は見えずや。

ぜみがめの崎をめぐる頃、はるかに水を渡り來る鷄の聲を枕にす。土浦澳は煙しづかに洲を這ひ、立續く楫の中に枯れたる眞菰の立つを見たり。

筑波は雲に纏かれたれば尖鋭なる女體山はかくれて常には山の森とのみさげすみ

し小田の兜山北條の城山などぞほのほと朝の湖に映りたる。

わが旅は終りに近づきぬ。起き明し、春の一夜は、湖水の波に漂ひ去り、初めて新治の山を辿り、野を越えて、林を縫うて、路は筑波の雲につゞけるなり。

かつて土浦侯氏土屋の夫人、轎を治久が館の址にとゞめ『かぶとやましのぶの小田の城めぐりして』鏡にかよふまぼろしを見き。太刀の光は地に錆び、征矢の行方は天に消えて、王孫西に落ちしもおもへば興國四年の秋なりし。春草なほ山に萠ゆれど、紅絹の人南に去んぬ。誰かまた石上に匿れて彼の下髮長く腰に垂れ朱唇言ふこと稀なる簾中の人を見むや。

わが行く路は山にしたがうてうしとらを指せり。想ひ見る、夕日は菜の花つゞき十二天神の森に落ちて、ほのかなる雲の光わが家の壁をてらすとき、母は牛小屋の柵に倚りて籃に盛れる何物をか手にすらむ。

行く〳〵櫻川の岸に到る。花散らふ磯邊の堤遠けれは、しもとばやし川を挾みて

落ちたきつ水の濁れるを見る。橋は堇めきたる小さき草花に縁とられて路よりは、やゝ高く反めに架かれり。

十三ばかりなる顔蒼白き少女と穢き反古張の箱とを積みし荷車を夫婦して押しつ挽きつ橋の袂にあへげるがあり。夫は鶉衣をまとひたれば、藥賣る家の門に立ちて空しく泣くべき運命を負へりとおぼし。土色の笠の黑き布などあてたるを冠れり。妻なるは目荒の荒苅籠に四つばかりの子をさへ容れて。

星眸光うすらぎたれば頰に流るゝ涙もかつは冷たからむ、父母に轅をとらしめて人われと反對の路を辿りて南に去れり。

高道宗の野は今も木多し。ひし〳〵と生ふる榛櫟、櫟は去歳の枯葉の落ちもせず、榛は枝悉く天を指して寂しき下枝に烏瓜の蔓の下れるもあり。空林綠絕えて暗淡たる途にもあるかな、山の西なる。

むかしは、白日人を脅かすしれものありて、或は雪の白きに狼籍のあとを留め、

或は枝頭の花を散らして泥に委ね、つねに影を霧深き林中にかくして凄氣木をめぐりき。行人稀なれば今もなほ心騷がるべき林なり。

わが旅は終りとなりぬ。春はまた我が上にかへるとも、かげろふの野に再び草を踏むべき身にもあらず。二十九年うつゝに過ぎて、思へば長かりし命かな。

一人の人を愛する能はずば、われ願はくば萬人の人を愛せむ。

俤の人は日に〳〵遠ざかり行くかと思へば、またゝく間にかへり來て、とこしへに新らし。

一路の向上心といふも畢竟大なる執着のみ。

迷はんかな、天地の靈に合するものたゞ煩惱の力にあり。忘れむとする悲しみはいよ〳〵あたらしく、脫れむとすれど悲しみは毎に我に飜れり、枯木寒岩、法師となりて山に入るも忘れずば何の甲斐かある。

病んではこのまゝに死なん、死して天地に浮遊する靈となり、雲の上にして聖なる人たらむと望みき、月明の夜、たけ高きこすもすの花の陰にけぶれる月を仰いで胸にわだかまる一塊の肉を抉り去り、忽として無何有の鄕に去らむとて願ひしか。

されど髮の毛の一筋も鳥の羽の一葉も冥々の裡に不可思議の力あり、人の生るゝ生ると共に『死』はその額に銘せらるれど、誰か若干の生命なからむ。始終順境にあるものは不知、人ひとたび逆境にたてば、行くに二つの路あり、『明』と『暗』と。

嗚呼、俛の人を追うて、夢見し人の肉塊は亡びん、しかも死は未だ來らず、われは明るき生に復らむ。

金星見ゆ。

雲ちぎれて行くと認めしは鳥なり。みつまさ雲の淡きは知らず、紫かゝれるうす雲の日に照りて鳥とあやまちたる、おぼつかなきは我が瞳なるを。

西する小川は水睡りて魚は堰に落ちたらん。金星見ゆ、桃色の光南にほのめきて、夕靜かなる野となりぬ。

高きは天の姿かな。

寂莫、沈思、われ秋に入りてよみがへれり。

角笛

雪が降りさうでまだ降らぬ。氷つた手拭で顔を洗ふ、手がつめたい。霜も二度目で見た。ゆうべ足から胸へかけてひどい打撃をくらひ、氷のやうな布團の中でとうとう睡らずにしまつたため、早起はしたが頭が痛い。

干海鼠のうま煮を喰ふ。醒川の手紙に『まろめろを難有う、僕も初めて見たが隨分唐變木な形だ、早速喫つて見たが固い、これは生でやるものぢやあるまい、但し常陸や奥州あたりの熊の牙のやうな齒を持つた人は知らず、』と驚いた御挨拶を受けたが。

花兄七、日あたりの好い中の間へ床を移し、仰向になつて『少年』を見てゐたが何時かうと〳〵と睡てしまう、血色が惡いのにはか〴〵しく滋養物を取らんので母の心勞一と通りではない、……嗚呼われもきのふはと思ふに病める弟の顔を守るに堪へない。強くならん強くならんとみづから勵ましては居るのだが、命ならばいかゞはすべき、死ねば一切は空ならずやとも思うて見る、あたゝかなる日なり。

『人の孱弱其者其偉大を證す、そは無冠の帝王の孱弱也、』敷石にからころと履の音して姉さんが來た。秋のはじめ故ありて絶痛絶苦の淵に沈める時我をいたはり慰めて幸に本然の性にかへらしめた姉である。

わたしの顔は紅いでせう、あつくてたまらないの、御免よ、今着物を脱ぐからといふので、お土產の芭蕉の實を默つてたべる。べろべろと甘くも無い。美作名產の何とかいふ飴の餅は食はぬうちは何とも言へぬがかきもちらしい。醒川の『頌榮』も信玄袋から出して見る、表紙の黄いろなのは氣になるが、星照る郊野に長い杖を杖いてるのは誰だか。キリストよりはモハメットのやうな面つきだ、知つてますかと帶をしめて被布の紐をかけをへた姉さんを見上げると、あらぴやあたりの坊さんでせうと仰しやる。

『頌榮』一部これ著者が信仰によりて、かち得たる至純の詩、一夜床上に花を敷きて相抱いてとこしへの眠りに就きたる二人の處女を歌うてゐる。いたゞくは元祿編笠、砂白き海べをさまようてかしこき人に狂と視られたる漂泊の子を歌うてゐる。

嗚呼この靈海の人。

汝が摘みためし野の花の、紅きも籠に萎れずや、わが愛しむくちつけの、きよきに薔薇の頰を寄せよ。十月の野に兄妹鞍を同じうして、馬上壁白きわが家をさしてあがきを疾めるところを繪にしたかつた。

逢つたら抱きついて泣く筈だつたぢや無いかと、遙々と訪ね來りて病を看たまへるやさしの人に、横になつてはゐるが話の出來るのをよろこばねばならない、あ足袋がはけないと言ふから汽車の中でこんな物を編んできたよ、大きいか小さいか、どれ足を出してとあるので、やうやつと右のを掴んで膝の前へ曲げると、ま冷たいこと、いつでもかうなんですかといひ〳〵、子供の頭巾のやうな、馬の沓のやうな

格好の赤い毛絲で編んだふくろを足首へはめて、紐は二重になつてる、それを引ぱつてしめると丁度被つてしまふ、これなら明日からいくらか暖かだらう、いゝねと上から撫でゝ見て、どこまでも子供あつかひだ。

日が暮れる。夕の光まよひ勝ちなる空を仰いで、かへり見て敷居越しにほの白き人の顔を見た。何とも言はなかつた。

夕となりぬ、雲絶えて
沈み行く空の黄なるを見よ
南に光りし桃色の
星は草にうつりけむ
なつかしの光消えて。
のこり毬からから

風寒し栗の梢

冠毛紅き連雀
したり尾や霜にくづされたる
雪か消えざる、落し羽
破れし網にかゝれども
蜘は扉を鎖しぬ。
日の光地に滅して
烟立つ森の小家

寒いので風呂の湧くのは遅かつた。
母が來て話をはじめたので、明りに遠ざかり火鉢を避けてひとり床の間に肱を突

いて、つぶるとも無しに眼をつぶつて、雲と浮び水と流るゝ人のうへ、花の紅さ月の明らかなる、思ひを詩のさかひに馳せて、時々刻々足を刺し胸を擊つ苦痛よりのがれて、母をも人をも忘れてゐた時間は短かつた、灯に近く人の起上るけはひして、温かなる手をわが頰の下に差入れて『泣いてゐたのぢやないか、え、え、』と耳につきて忍びにものいふ、母はいつよりか居らぬ。
否。
心やぶれて語るべき友無ければ涙はおのづから頰につたふとや思ふ。
わが愛に居る姉君よ。

友も終には背きけり
背きてものも言はぬまで
さげすまれたる身を恥ぢて

涙は落ちき

柱に倚りて白樫の
葉に隠れ行く明の星
遙けき空の影を追ひて
涙は落ちき

夢はさめよと言へるのみ
枕に寄りてさしのぞく
母の面を見し時よ
涙は落ちき

秋、筑波根の雲搖れて
日を吹きめぐる草の風
獨の國の寂しさに
涙は落ちき

涙は落ちき今は然は
胸にひそむる龕の
破れし扉たたくとも
たゞ痛むのみ

涙は落ちき、言はで
灯影を避きて俯向くは

瞳の内に出し翳の
眩ければなり

泣かなくちや悪いか。

『泣かないつたつて、卿は心の奥の奥で死をねがうて居るでせう。月波の霞春を告げて、野に生ふる草の緑から詩のおもひを養ふやうに、露から詩人が生れるなら、卿一人の名は地上に亡びてもよいが、考へても見なさい、人は死ぬべきものでせう、死が恐ろしくては初から生れぬがよい、明日死なうが百年先で死なうがそんなことは思ふべき權利は有る筈は無い、壓へられたきりあらがふことの出來ぬ自然の能だから、靜かにそれに服從するのが男らしいぢやありませんか。肉體の苦は到底苦である、病は思ふほど惡くなるから思うてはよくない、忘れなさい、我を捨てなさい。足が動かなくならうと大小便が失禁しやうと、神は卿の爲に母上を千代も八千代も

守つて下さるとの信念を以て、名の爲にせず、心から止まれぬ信――まことの爲にあたへられた天の才を地上にあらはすまことです。

きこえますか――君がみ手にと賜はりし、山羊の小角の角笛を、力のかぎり吹き立てよ、世は春ならで鶯の、美し音色に目さめなん、息のかぎりを吹き入れよ、天なる聲の籠るてふ、山羊の小角の笛の音に。――弟の卿が詩人だから姉さんも詩はうまいでせう、ね、卿の胸には小さいけれど樂器がある、風が吹けば風に、雨が打てば雨に、やさしい音がするのだもの、練つて〳〵火のやうな金のやうな文字を出して御覽。

卿は夢を見たのだ。夢は美しかつたけれど。

詩の夢殿守る美しき君よ、とこしへに涙の人のあたゝかなる胸に活きよと思ふ。

卿にはみんなつらい世の中だ、もうあまり心をいためずに美しく生を送りなさい。

俤の人は神の賜はつた試練の石であつてそして永久の愛のキッスであつた。さうで

せう。

さきからだまつて居るのはわたしの言つたことが氣に障つたのぢやないか。起きてるのがつらいのなら、わたしの膝へまくらして、夢に見た俤人の上をきかしてはくれまいか？』

きかして！と笑ひ〳〵いつたけれど、口をきくのが大義だつたので何にも語らなかつた。鷄が鳴いた。冷たい手はやはらかに握られたなり。

月がいつか昇つて、水のごとき光、戸の割れ目よりさし入つてうすらに障子に映つてる。壁に鳴くこほろぎも絶えた夜寒く影寒く。

針、尖鋭なる鋒をつらねてわが爪先きを襲ひ、火、いら〳〵とわが脛骨の中を流れて脊椎まで痛くなつて來た。

胸を壓したが手に力が無い、横に明り床へかゝらうとすると、初めておどろいたらしく、立膝になつて首をかゝへて『どうすればよいの〳〵』と頭の上からきく。何

でも無い。

更けたから寒くなつたのでせう、それぢや毒だからもうおやすみ。わたし枕元に坐つて睡るまでは居て上げる。あした歸らねばならぬからねと、いふので素なほに次の間の床の上へ横になる。

鷄がまた鳴いた。障子の月影はやゝ東へ寄つた。つめたき庭の面には蟲すら這うてはゐまい。しづかなる夜かな。

奥で着物を着かへるのであらう、さら〳〵ときぬずれの音して。

寒い。痛い方の足を下にして西向になつた瞬間に、ことわり知らぬ涙はほしいまに流れ出てまた姉さんを見るのがいやになつた。涙はつゝむべし。つゝみ難きは心に有てる夢の俤か、東西南北今はわれ人のわりかを知らず、十里とあらば筑波を越ゆるまでの路なり、百里ありと聞こえば目に測りて霞に浮ぶ富士を仰がん、悲しいかな天門すでにふさがりぬ、いづこに路を求めてか人はわが手に來るべき。

瞑目しておもふ、夢見し人の夢はさめぬ……

黒穂も交る麥生には
雲雀と共にかくるれど
袂探りて夏草に
包みし夢を思ふかな

立并ぶべく紫の
袴は着けぬ、いとこ同士
手携はりて比ぶれば
長は肩にも足らずして

頰照るは戀か、思ひ屈し
人に見えじとねがふまで
鏡馴らさぬいたつら臥
二月は花の紅かりき

毬を敎へし下髮の
妹も今歳上越して
十八少女高髷の
振袖姿似あはしう

衣桁の陰へ身を退きて
脫ぎ重ねたる裲襠を

切めて着欲み手に纏けど
母泣くらむと傷まれて——

我は日向葵
光にのみ
面ぞ向ふ
羞しきは
日なる君かも
遠くより
花の上には
天霧ふ

弟を抱いて寝る夜こそ
幼き掌もて探られ
胸は生絹につゝめども
母すら觸れぬ乳なるもの

我は日向葵
旋るとすれ
君が眼にのみ
魅されて
ふとだに外に
眼を放らば
見ずやならんと

危ぶまる

文亂りなる機織ると
沈織の筬の目を數て
絲を通すに疲れては
雲の夕を二人居む

嗚呼我は日向葵
君にのみ
心ぞ向ふ
東に
日は絶えず照るを

小さくとも
花の命を
賜へかし

霧に浮べる
幻の
蜃氣樓は
散りぬれど
我身は散らず
涙する
君が瞳に
溶けて入り行く

こほろぎの草紙

越前の人の語れる

久夜斯可母可久斯良摩世婆阿乎爾與志久奴知詳等其等美世摩斯母之乎

あさがほまでだんだん小さくなつて、咲くのの多いかはり露ひやひやと花は朝ごとにかなしく見える。ただ昨日のやうに思はれてならぬ。

隣同士、連枷の貸し借を急いでひとしきり麥打に賑はう六月の末ごろであつた、やうやく咯血も止んで、寢たり起きたり、離れに閉ぢ籠つてる自分を看護するとて、錆び切つた小さな鍬で土を掘ぢつて、こゝらなら芽が出てからなめくじに嘗められはしまいと笑ひ笑ひ見かへつた顏がまだ中庭に見えるやう、毛は長いけれど少い方で、そのときはいてふ返しに結うてゐた。

手などは細々と白く透き徹るかとも疑ふまでに、からだの風は華奢で、暑いから

とて膝ひとつ崩さうともしない、つゝましやかなのは性質もあつたらうが、十三の春から行儀見習に金澤へ遣られて、嫁いてやもめとなつてから今歳二十八の秋はつるまで叔母は終始薄命の人であつた。

S町からM村に通ずる縣道に川が在る、丘に沿ひ野にしたがうて蛇のやうにのたくる川だが、橋番がよく言うたさうだ此橋を渡る女は日に幾人となくあるが、上田のおしづさんほどの人は長年にもめつたに見られないと。

自分とは九つ違ひだつたけれど、間違つても叔母といふと白い眼して睨まれるから、倭文子の名のしを取つて、『しー姉さん』とも『しづちやん』とも呼んでゐた。奉公に行く前の夜に、祖母樣と二人して大變に泣いたそうだが、それからは一年に一度づつは歸つたやうにも覺えてゐる、歸るたびに綺麗になつて、もう負つてはくれなかつたことも覺えてゐる。嫁入だといふ時、女だちに交つて村外れの橋に立つて

花やかな行列を見送つたことも覺えてゐる、しかも芝生に飛びまはるはねむしを追つかけ歩いて袖を綻ばした。思ひ出すと寂しく惜しく、何だつて人の家へ呉れたんだと母にじぶくつたが、十年は夢の間にすぎて、自分はいつか肺をやられてゐた。もう駄目だなと覺つてから、日は長かつた。夜も長かつた。はじめて叔母を呼びよせて介抱を受くることとなつたのは浪の非常におだやかな小豆島に放浪してゐた時で、顔を見ると、俊ちやんお前のからだは姉さんから貰つて來たよ、晩から抱いて寢てお乳をやらうよね、いやかいと逢ふ早々すつかり母氣取で、よく面倒を見てくれた。

やさしき人に慰められて喀血も止れば熱も下り切りに下つて、一時は土の庄の入江を舟で乘り廻つても寒霞溪の磊々たる巨巖を踏んでも疲れぬまでには回復した、これならと勇み立つて無法にも兎の毛の白くなり初める頃、み雪ふる越のふる里に歸つたため、てきめんにまたぶりかへしてしまひ、牛の生肉から絞つた血までいや

いや呑まされた。

母や叔母はお國から永平寺の歸依者で代り合うてよく寺へ行つた、一つは身のためもあつたらう。總じて北陸道の人は年寄りは言ふまでもない。若ければ若いなりで寺參りせぬと嫁にも聟にも貰うのは見合せるといつたやうに上下一般に佛を尊んでゐるので三十にならぬ叔母すら信念は堅固だつた。その加護によつて助かつた命かどうか自分は一たん死より救はれた、母によりて否叔母によりて。

夜目がさめると叔母はいつも枕もとに坐つて何かしら讀んでゐる、しー姉さんどこからか郵便が來なかつたかと定まつて聞く。ええ來ないよ。河井からも。誰からも。さうか寂しいなと投げるやうに言うて退けると、手をとつて顔を近くさしよせ、さうね、けれど河井さんにしろ誰にしろ御用が多いからわなたの爲に特別に書くと

いふわけにはゆくまい。わした私から節々手紙を下さるやうに賴んで上げるから、お休み、となだめられたこともある。つねから食ひ物には何の趣味も有つてぬかはり、甘いものも辛いものも偏よつたのは嫌ひだ、友だちの手紙は實にほしいと思つた。肺をやられたさうだな、まあ〳〵奥さんを持たぬ前で仕合せといふた奴がある、ひどく悲觀して母さんを泣かすな、貧乏な家に生れなかつたのをまだしも幸福とせよと言ひこしたのもある、水に溺れた人を弔ふに火に燒けて死なぬかつたのはまだしもだと言うた落し話に似てるとをかしかつた。新婚した當座山王山に雪をかぶつたゑはがきに『春の夜や妻によませて春曙抄』とかいて來たのもある、これは一升位持つて來たんでは返されないと思ふ。磯村といふ男からは、君の結婚はいつになつたい、ぐつ〳〵してると日が暮れるぜとからかつて來たが、これには今だに挨拶をせぬ、いよ〳〵日が暮れてからでも間に合はう。

で返事はうつ伏しになつて筆をとると咳が出るので大概叔母にかいて貰ふ、『天保

時代の手習のままでお恥かしく候へども』とさつと書き添へる。明治十二年も臘月に入つて生れたくせに。尤も字は生れそくなひの鶯堂ともつかず花溪ともつかぬ言はゞ叔母一流のまるこい細いかなばかりのだ。

叔母は世にいふ出戻りのつたなき境遇に落ちた人で、夫の家へ置いて來た一人の娘を除いては世に心を引く何ものもない。有髮の尼の生涯を送りていつかはその子を貰ひ受けうと、雨のやうに降る縁談を片はしから斷つて、自分の爲に第二の母たり姑たらんと覺悟してわが病を守つたのであつた。

分不相應な大家の新庄に嫁いたのは、きりやう望みに貰はれたらしい、愛無き結婚の重荷ははやくより多病ならしめて、おもかげはまさしく秋衰殘の蝶なりきと言はう、黛ほうけ色はげて俊ちやんにやらうと戯れた乳房なども胸にひたと着いたやうにしなびてあつた。

暑いながら七月はいろ〳〵の食撰みをして母を弱らせる位になり、月のかはるを待ちて加賀より能登へかけ海べ傳ひにあるいて見やう、疲れれば途中で止めるまでだと獨りできめてゐたのは不覺で、をばは金澤へ寄つて愛しきひとり兒に逢はれる樂しさに、俊ちやんあの子にもつてつてやるおまへの土產は何にしやう、もう十二だからわたしの戻つた事情もきかしておかうか知ら、それとも忘れてしまつてお母さんと呼んでくれないのぢやあるまいかとやたらに心配するから、叔母さん、いつそ離れてしよつ中考へてるよりか構うことはねえ、あれをさらつて來た方がいゝ、母だもの誰が何と言ふもんか、學校の歸りにでも見つけて僕がつれて來てやらうかといふと、いえやといふ。

頭の半分禿げた、絽の羽織のいやにうすい、初めから氣にくはぬ爺だつた、第一

には叔母の前に叮嚀に下げ下げしたといふ頭を、今ぢや御新造ではないと思つてるからか惡くのツきとさせて、今回良緣あつて田鶴子樣事さる方へ御養女に參らせらるる、御不服はないことと信ずるけれど一應お斷り申せと言ひつかつて手前が參りましたわけで、へい、

と横風な。

叔母はしかし弱かつた。

ことを分け情を盡して嘆願し懇請したけれどその男は應じなかつた。他へやる位なら現在血を分けた母へなぜくれぬ、二夫に見えぬかなしき心も汲んではくれないのか、いとし子をよそへ貰はれてこれより何に生きると思ふかと、泣いて言ひ、爭うて言うたけれど。

叔母は夜どほし泣いて、次の日もくれ方まで一口も口をきかずに泣きくらして、

父は溫言もて必田鶴子を貰うてやるというたけれども答へなかつた。母は共々に泣いて慰めいたはつたけれども答へなかつた。仰向きになつたまゝ目を蔽へる手先を握つて叔母さんと呼んだけれどたゞ蒼じろき頰の上に銀の如く光つて流るゝ涙を見るのみであつた。哀切の極に薄命の人はたふれたのである。

新庄ではなぜ田鶴子を叔母にくれなかつたか。そんな事をおれが知るもんか。死ぬべかりし自分は叔母に救はれて、叔母はかへつて子ゆゑに胸を破つて死んだ。正直にいふ。田鶴子は叔母の美を承けてすぐれたる美貌をもつた子である。病おだやかなるひま〳〵に叔母のさゝやいた夢が現實になれば、たつ子はわが配たるべく、すくなくとも妹として始終すべき女であつた。

もう駄目だ。

陰暦八月十八日の夜、奥に弔つた懸時計のねぢがゆるんでじりじりと鳴るのを聞いて目がさめた。四郎のやつ、また懸けるのを忘れたなと思ひ〳〵枕につくと、また頭の上でチロチロと鳴き出した。こほろぎだ。孺子からは月の光が射してゐる。

こほろぎから人の泣く聲、叔母の死に想ひいたつて、光明寺の墳塋に一杯の土饅頭となつては、草は春にならねば茂るまいが、螻蛄みゝず蟲いろ〳〵の秋の聲は冢中の人にもきこえやう、田鶴子はまだ蟲の聲を悲しむほどの悲みも覺えはしまいと、ふと涙がこぼれた。

自分は月影を踏んで庭をあるいた。朝顏の花はありやなしや、紫はあつき色に、黄は白く見ゆる花壇の周圍をめぐりて、雨戸一重のうちに眠れる人々をおもうた、その夢はうつゝには花となりて色あるべき樂しさをも思うた。自分は夢にすら見るべき天地は滅びたのだ。

一歩一歩、雨戸より沓脱よりだんぐ〳〵と遠ざかりながら來るともなしに來て、逢着したのは木戸である。外は物の影一つ二つ、月白々と海上霧わさく渡りて舟も人もありとは見えず、たゞ靜かな夜。

『入日を洗ふ沖津白浪』わき回る沖の入日は知らず、霧に溶け靄に解けて肌に泌む月の光をも思はず、たゞ月にしたがうて滿つる潮の色の白さを見た。

鼓つは水の撥か、鳴るは岩のつゞみか。日も長く夜も長き敗殘のわれを葬るべく、かねて鳴らす弔鐘の音かとも思ふ。

雪を噴いて沖より來る浪はわが心を陸に追ひかへし、音立てゝ汀に逃ぐる浪はわがたましひを海に誘ふ怪の物とも見た。浪間に碎くる月の影、濠氣にこもる星の光、四顧、たゞ月と星と浪と巖との外に、さへぎる物なき影を追うて自分は靜に歩をかへした。——後二　手記。

歡喜

S兄——。

久し振で長い手紙をやらう。外は雨が降つてゐる。寒いようで暖かく、暖かいけれど寒い。

只今七時。ランプの笠に蠅が一匹とまつてゐる。

この頃少し聲が潰れた。眼が眩ふかりあまり椽側へは出ないが、汗ばめる額を夕方外氣に觸れてぞつとすることもある、白日ながら夢の國にさまよふことが多い。

左の胸が痛むのだから左を下には寢られず、右枕は右の足が挫かれたようになつてるから、矢張り四十五度の角にはすかひに天井と睨めくらだ、あんまり樂ぢやないが。

十一日の晩だつた。六曲屏裡一人の夢おのづと破れて、咽から突進し來る『ばけ

もの』を、鷄の鳴く少し前だつた、うち中眠つてたし、紙一つ置いて無い、枕に卷ける白布しか口に當る何物も外に無かつた。

靜かな夜中だつた。

おれは何んで一人で苦しむのだらうと不圖思つた。

もう澤山だとも思つた。

起き反つて屏風を押した、一寸ほど明いてる襖から母の部屋にぼんやり灯のさすのを見た。

悲しかつたかなどとお弔みくださることは御免なり。母方の叔父に一人血を咯いて亡くなつたのが有るからとて、おれまで其中間にはひらねばならぬ約束は有つてゐない、生きるだけの命があつて生きるだ、まだふだつきにされては早いからなあ。

ダリヤもだん〳〵小さい花になつて、菊も傷んで來たらしい、霜が降りるようになつたさうだが、僕はまだ見ない。連雀も渡つて來たらう、椎の子は落ち葉と共に

土に朽ちて、鵲の草莖のあらはなる冬が來た。寒くなつた。

七月はじめて血を見た床上の客となれる時、秋になれば治るのだと信じた、金烏西にかけりてつめたき風常陸だひらを渡れば、わが病ひは名殘なく癒えるのだと思つた。

秋は自分のからだに一番いゝ時で、春先ぼんやりする頭も秋には清んで來る。が今年の秋だけは滅茶だつた。何を爲、何を考へたらう、不斷のおそれは晝夜心を苦めて、寢汗にかい卷のしつとりせぬ朝も無かつた。

唯一つ知識を增したのは障子の價を知つた事だ。障子は十本二圓のが有る、僕の室へはめたのは二十四圓の品だ。ぜいたくだと君は言ふだらう、けれどおれの室はおれの勝手だ、切角生れたけれど世は『人』として認めず、父と兄とにとりては子としても弟として役に立たぬ人間である、蠶の自繭をつくるが如く、自分は自分の隱れ家をつくるのだ。終生籠るべき室に新しい障子をはめたとて何だらう。『池田伊

丹の旦那衆は晝は繩帶繩襟夜は緞子の八重まはり』と謠ふにあらずや、自分は與へられた二つの室のすべての調度を新しうしつらへて來るべき或るものを待つのである。錦のとばり、綾のしとね、疊には布を敷くべく、壁には玉をちりばめる、誰かわが待つものをとゞむることが出來よう。

されど生や何の恩ぞ、これを殺す何の咎ぞ。死は必しも飴のごとく甘からず。『獵矢手挾み鹿兒追ふと、森に落しけん久米の子が、耳朶にかけしこがねの、環も雨に腐されて、丹を頰にぬりし少女子の、文ある袖も黑髮も、殯の宮に歛めしより、千歳の土となりにけり……』自分は今にしてなほ人を哭くべき命あらんとは思はなかつた。

君は十一月三日酒向敏子山口に死し、二十一日島益江子の金澤に死せるを知れりや。

敏子は屋根の草と言ひき、楊子江畔新婚の夢いまだ半に至らずして、漢江より周防に歸りしが、產後の肥立はかゞしからず、行年廿二才を以て母ぎみ在す國に去つたのである。

敏子は平凡なる女性なりき。某々等が結婚と共に箔落ちて愚にかへれると異り、初より結婚を無上の幸福と爲し無二の誇示とせる女であつた。餘りに小さかりし其體軀は生々に適せず、出產に遭ひてより漸く破綻を生じたのであらう。

先天的虛僞に生くるは女子也。彼等には眞の友無し。美辭を交換し媚言を貿易してしばらくは相欺けど、唯夫有るを知り歡樂有るを知る者、中心また其故舊を憶ふの暇有らんや。所謂師所謂弟、見る事亦路傍の人に異ならず。悲しいかな敏子は其一人であつた。

玄海洋を起えなば茫洋たる鹽の光を見よと敎へしはわれなり。長江を遡らば沅湘の水に泛べと敎へしもわれなり。不幸にして平凡なる女は、平凡なる新婚の夢を

追ふに急にして、終に太湖の月をすら見ず。今や亡し。

閃電雲を縫ふが如きは女人の變轉か。

過去一年間に於てはAは結婚し、Bは姙娠し、Cは母と爲れり。Xの笑を賣りYの媚をひさぎ、Zの節を售れるが如き、其の一なり。おもへば揚ぐべきもの獨武漢の赤旗のみならず、彼等亦以て長江の上流を扼するに足る。

彼等はなほ動かん、晝は晝を迎へんが爲に、夜は夜を送らんが爲に。

病者は動くあたはず。其身つねに苦しめど、其心はしづかなり。其肉不斷の熱に焦かるれど、其靈や火の如き光あるも有り。すでに住むべき天地無きを知る。故に一意死をのみおもふ。

益江子は足痿なりしなり。名はくちなし。

家は聞えたる加賀の資産家にして、其父も其兄も杏林の人なりき。されど前に其足の痿へ行くを救ふあたはざりしが如く、今亦其生を回すあたはず、二十一歳にしてとこしへのをとめとなれるなり。

常少女となれる者、前に中山百合子あり。百合子は縮緬押繪細工の寫眞かけを遺し、益江子は『廿八宿』の『影』をうつし圖に作らしめて、華麗なる九谷の茶器を燒いておくり越せり、金泥うづたかく菅公を畫ける湯呑をも添へたり。

嘗に落ち葉の一つ二つをひろひて亡き人々をしのばんか。

この頃またお惡うございますつてね。お互さまに寒くなるとみじめですわ。私にはそれは變てこな面白い病氣が出ましたの。もうこのせつ手紙を書くなどいやでいやでしてね、二月餘り少しも筆を持ちません。只むつちりと床の中で人から話しか

けられると返事だけは致しますが、自分から言出すといふ事はなく、見倦きた襖の繪や天井の節穴を見入つて、ぼんやりしてゐます。別に退屈だとも思ひません。寂しい〳〵と思つたなど藥にしたくもありません。神經が鈍くなつたのでございませう。でもけふはなぜかはづんで何かして見たいような氣がしたのでこの手紙をかいたの。床の上へ起き上つて。

床ずれがいたくて。

この頃はおよつていらつしやいますのですか、私も腹這になつて書きます、ごめんなさい。お胸やお背中がお痛みなりませう。つまらぬではございませんか。生もまたばか臭いとおつしやつたお貌が目に見えます。

先月の二十日過から九度ほどの熱が時々出ましたが、すぐ冷めたので少しいたづらをしたら、又出て、夕方四十度二になつて、父はゐませず、母一人うろ〳〵して

泣きさうにして枕元に座つてゐました。こんな時は足のやりばがなくて、ほんたうに。

今まで夢のやうに暮しました。今日はさめてをりますけど、手がふるへているのに字が書けません。

へたゞ、だめだ、つまらぬ、嘘つきとよくおつしやいますが、今日のは書きやうがちくだとあつたので、またかと吹出して了ひました。あんまりですわ。

知きてるのやら死んでるのやら、私自分にも分らぬ事があります。人がおこさないと一日でも二日でもねてゐます。熟睡してるといふのではありません、周圍の事物は皆見えて聞えるのです。熱があつても別に苦しいとも思ひませんし、胸が痛んでも其痛むといふ事を意識出來ない。私は今まで病氣を口實に我儘ばかりしてゐました、どうせ長く生きるんぢやなしといふ氣でしたから、このまゝ固まつて今一年

も二年も生きねばならぬようだつたらどうしませう、いゝえ今こんなに胸が波うつて痛んでるのですもの、肋膜がひどいのでラッセルが聞えるのです。ま、にはかに胸が。これで。

何だか悲しいような、泣きたいような心もちがして毎日寂しくて時々泣けて來ます。人は極度に病んでは、生といふ事も死といふ事も考へず、無意識に呼吸を續けるものとこの度初めて知りました。死の恐ろしいのは病の出かけかと存じます。この頃何でもたべるの。けれどからだは痩た上に、また獨でね返る事も起る事も髮いふ事も出來ません。やはりねがへる度に泣かされます。母が先生がおかわいさうだ、どうしていらつしやるだらうと口ぐせに申してます。兄に先生のは治るだらうかと聞ましたら、さあと言つたばかりでした、せめておみ足だけでもと思ひ續けてをります。

仰臥のまま。

忘れたんぢやないけど、苦しくて。どうぞごぶさたはごめん遊ばせ。

二十日の夜はもう駄目だといはれました。已に息が切れてゐたのを注射されてまた戻つてきましたけど、弱つた體が尙更弱つて。

二十日の午後最後と思つて先生へかいた手紙を封入しておきます。此次死ぬ時かけるかどうかわかりません。もう遠くはないと思ひます。

面白い事があります。私は母を實の母だと思つてましたら、實の母は死んで母の妹が母になつてくれたのでした。私は不思議でならなかつたのは、私が二十五年九月生れで十八なのに、母は三十六です、そして結婚したのは十九の時だつていふでせう、ふしぎで〳〵しようがなかつた、やうやう分りました、をばさん(冬子)まで教へないんだもの、腹が立つてなりません。をばさんていへば、先だつて長崎へ行つて、すぐ病院へ入つたんですつて。甘へる人がなくて困ります。

太田きし子さんは何とかおつしやつても松本の女學校にいらしたにちがひないさうです、たしかに聞いたのよ。

よく死を言ふ者は死なず。君の見し彼のRの滑稽なる遺書はなほ吾手に有り。最上級の言葉を用ゐてみづから悲みし彼の『死』は何の『死』ぞ。其鐵面皮なる遺書を取りて、この哀音切々たる斷簡零墨にくらべ見よ。

『妻と呼ばるる幸無さは、妻となりてぞさとるなる。涙なかけそ少女子の魂の行方や迷ふべき』と歌つたのは君だ、昔のやさしい詩人の涙はもう心に涸れたことゝ思ふ。僕には『生』に責任が無いように、死に對しても殆ど沒交渉である。喰ふ爲めに働くといふ君達と違ふだけは幸である。君は四人の子の生先を守つて九十になるまで生きたいと思ふだらう。僕はよしんば生涯アイスクリームを喰ふ機會が來なくてもいゝから、入齒をもてあます年まで人の馬鹿なつらを見てゐたくない。死は如何

なる人にとりても幸福の最大限度であるとは言へまいが、少くとも廢人にとりては歡喜である。Poetとしての夜雨の名は不具者には過ぎた荷かも知れず。されど僕は終に慰められなかつた。

か黑き髮もほつれずに
花の小袖も其儒に
たゞ在りし世の姿にて
棺の內に歛めしを

山梔子の死を幸福とする者は天上天下僕一人であらうか。

廿四日夜十一時十分前。

風の聲？　雨の音？
寂しい　哉

S兄

峠より麓より

十月九日

ダリアがまた倒れた、しつとりと飛石濡れて庭は秋深く、柘榴の葉が散る。

八百屋の婆さん、嫁にいぢられて家にゐられないから首を吊つて死にたいと訴へに來る。『喰べんなと言やしまいし勝手に膳なりお櫃なり出したがいゝ』と嫁は言ふ。御亭主は無論あつちの組だ。

母の針箱に凭りかゝつて『美人毒語』を讀んで見た。長谷川天溪氏『女は機械だと思へ。機械だと思へば美人になれる。かう言うと皆般若のようになつて怒るだらうが其般若に亦愛嬌が有るものだ』

およねが納家で稲を扱いてゐる。あの音は矢つぱり藁を引つこく音としか言ひようが無い。默つて外を見てゐると合羽被の郵便屋が門からはひつて來た。

若草の　みそか人さへ　持たずして　かたはむすめは　ひとり住むかな
あめつちも　かたはむすめの　わが住むを　露おき渡し　なげくころ哉
みやび男を　犬のたぐひに　かぞへけり　この哀れなる　かたはむすめは

『天地のかたは娘』とあり、十年眼を病んで猶嫁がざる原田琴子である。其妹は二人共すでに笄を加へた、一人おくれて天地の秋に遭ひては、流石に涙の流れぬことはあるまい。

『また死にはぐりました、秩父の山根に小さな骸となつて歸るかと思つたに。

死ぬ日まで　われを欺き　おかんとす　つよきに似たる　わが弱さかな
そのかみと　なほ異ならぬ　おもむきを　われ悲しくも　明星に持つ
眼は眼にて泣きぬ　涙は　ぬぐはねば　額にみだるゝ　髪かかげねば
三ケ島よし子』

秋に入りてより病む者何ぞ多き。さらに一通有り、

『芳墨辱く拜見仕候。二女愛子結婚の儀『萬朝』にて御承知の由御祝詞被下難有御禮申上候。益江事は去八月より食慾舊に復せず漸次衰弱、今は唯臥したる儘にて短き文にても差上度申居候へ共、何分にも食事さへ三度三度母(愚妻)にたべさせてもらひ居候有樣にて失禮致居候次第に御座候。十月七日　島元恭』

病に過て後、强の寶なるを知り、亂に處りて後、平の福なるを知る。病める者の心には色慾も無くまた名利も無い、强て生きようとも望まねばもとより死を恐れもせぬ。わが晝を守る者母有り、わが夢を護る者も亦母なり。むかしは其乳に縋りし如く、今もその手に枕するのみ、天人の嘗むる醍醐味は知らず、匕にてすゝむる少量の食物と乾けば唇をぬらすいさゝかの水と、母によりて猶存らふる病者の命よ、自分も病める一人である。

夜、『幻影と夜曲』を見る。

十月十日

小雨

柘榴の葉日に日に散りて紅き實の葉に隱れてゐたのが又一つ見つかる。

鹿子百合車百合山百合みな掘つて戸袋の下へ生けさせる。竹を添へた白のダリアが向う向にばかり咲いて寂しいかなわが秋。

足を毛布でくるんで貰つたので寒くはなかつた。屏風を後へ立廻してくれた。『中の間か次の間へ行かないか、彼方は日が當る』と母。

昨夜夜中にランプを取りに來たら、一尺ばかり上の布團がまくれて盜汗がぽつしやだつた。暑い筈は無いのに、ね汗はいつも出るのかと訊く。通草の籠からりんごを取つて貰ふ。

冷たい朝である。ナイフに映る空氣の色を見たゞけで齒が寒いような氣がした。

林檎は剝かずに置いた。

『せん子さんや槇子さんの事を書いた内藤千代子さんの文を御覽なさいましたか。輕いそして浮いてゐる作だけれど。

刹那の眞、繭を出た蛾、それが初めて寂しい胸から出て、そつと筑波の陰に傳つた時の姿を、偲んでくれと槇子樣はノートの一片にかいて下さいました。柔かいお心には今となつて大切に世の風に觸れさせず藏つておきたかつたと言つてらつしやいます。嗚呼無言の詩人！奈佐房子』今の女は詩を書く心もちで手紙を書いてゐるのだ。

『今平塚白百合さんが一寸お立寄下さいました、いつ見ても美しい方。白粉は濃いけれど心もち紅い貌していらつしやるからなほよかつた。急ぐからつて上つてくれない。ぢや此次ごゆつくりと申したら、日曜にはいつも二人で出ますし――一人で歩いた事は御座いませんからと有仰る。一度は聞かないふりして上げたけれど、二度も三度も言ふ、母もゐたのでえゝ旦那樣と御一しよに入らつしやいて、しまひに

大笑しました。私も奥さんになつたらさう言つてやるわ。でどうしても上らないので、奥からつうちやんが出て來て、平塚さん、そんなにお大事ならお連の方は電信柱へしばつておいて、そしてお上り遊ばせと言つたもんだから、白百合さんたうとう逃げて行きました。草の戸』『私も奥さんになつたら』大變な事をいふ。

この日見た新聞、各種とり交ぜ五十四頁。

『朝日』の鼬庵、女子教育を罵つて、『メソメソ式トゲトゲ式の二つしか無い』といひ、『節操を賣て名譽と財産を買ふ女と、親の言ひつけなら何處へでも嫁に行く女と、二つの暗流に溺れて浮かむ瀬が無い』はなだしも『自分が娘を教育するなら速記術を教へる傍、淨瑠璃を讀ませる。淨瑠璃は淫だといふが寺小屋の何處に淫靡な點がある、またきの何處に卑猥な節が有る』といふに至つては鬼面人を威すのみ。『不如歸』に泣き『己が罪』をゑらがる女が有るからとて今どき腹がへつてもひもじうない人に同情する涙が出ようか、況んや寺小屋の前段には梅暦もはだしで逃出すくだ

りがあるぢやないか。速記術を授けておけばいかにも喰ひはぐるまい。序に按摩術も習はすれば一つには姑が嬉しがるし、經濟的には寒夜。月を踏んで一文笛を流すもよからずや。

夜、うしろの姉さん小説借に來て、こんなところにばかり居ては氣ちがひになる、おらちへちつと遊びに來た方がいゝと言ひおいて歸る。病みて籠る者われのみならんや。

『百人の男の子に許す唇はもたざるゆゑに病みて猶生く』北村よし子。

十月十一日

『女の方がお出になりました。もう起きなすつたら』と下女が枕元でいふ、先觸れなしに朝早く來るとは失敬だ。どんな女だと言へば、『やつぱりハイカラで十七八の綺麗な方、紫の風呂敷に本のような物を入れてゐます』仕方なしに起きる、青い空

に白い雲が飛ぶ。

花はダリアしか無き庭に向いて、母屋から斜に此方の軒へかけ渡した蜘の巣を見るともなしに見る、放射線の中心點に蜘はおなじ姿勢を取て動かずに居る。蜻蛉の頭位な黒い點がその周圍に散つて絲は黄金色に見える。體は横に黄筋の交つた圓こい大きな蜘だ。

擧羽は來なくなつた。鹽辛とんぼも來なくなつた。蚊のうなりが絶ゆると共に、矢の如く夕やみの空を飛ぶやんまも來なくなつた。蜘よ、田に行け。

もう秋だ。

母が廻し戸を明けて縁側へ下りて來た、女の人は後から？　と思つて椅子ごと向かへると、民法の本を賣に來たんだつたよ、驚いちまうね、中坪へ行けば患者が來たと思ふだらう、入(後)では大塚屋のかけ取と見なけりやいゝと笑つて言ふ。足袋を穿かしてくれた。

モチの根方に茂れる天門冬を拔かせる、蘭の中へ這込んでるといふので蘭も掘らせた。根ッ子は甘薯とおなじだねこりや喰べられるんでせうと安夫、かじりたい顏つきをする。

北の雨落へ龍の髯を植ゑさせる。孝が八幡宮の森で發見した何とかいふ蘭の茗荷の葉に似て長き氣根を出したのが一尺ほどのへだたりに有つて、何時の間にか白い小さな花が咲いた。

宮岡よりザボン贈らる。去年ひさ子が贈つて來た時は何といふのか誰も知らず、かりん、まろめろ、ぶしかんと途徹も無く主張し合つて、ジャボンだらうと言つた者があつたけれど『言海』も『辭林』も說明が當つてないので、四半分に割つた一つを中學校のH氏に持たせてやつたら、これはまた臺灣に產するふぢむらさきだとあつて、たうどう譯らず終ひ。當人のひさ子は濟して話さなんだ。

ひさ子と言へばこの頃はまた文學部の演藝會にソロでもやる積りで、學院の窓に

ばかり籠つてゐるのだらう、久しく其あをい顏を見ぬ。

『なぜ僕は白痴に生れなかつたらう。なぜ僕は狂人になれぬのだらう。神を信ぜよと說く者がある。如來の慈悲に縋れといふ人もある。勝手にしやがれ、うぬは丈夫なからだと好きな女を持つてゐるくせに、君は不具者には住まふべき世界無しと言ふ、わが心を慰めわが涙を鎭むるはたゞ君のみ。僕は切に妻をおもふ、私がこゝに居ますと言ふてくれる女があつたらと思ふ。木津省五』半身不隨、二十五年一室に籠れる友である。

『私は私を捨てたいにしへ人を今も持佛に崇めて居る、彼によりて愛の泉は湧いたのである。久遠永劫の法の光も見たのだ、われに辛かりしもの凡て我の愛護者也と觀じ來れば、草木國土一切みのりのかげを蒙らぬは無い。今は君よ、詩の國にかへれかし。かつて近つきし十七十九の君達は男ほしさの戯れなりしのみ、西山いほり子』

醉茗の書亦到る。

『進化論と自然科學に影響されたるわれ等の都會生活より見れば、君の生活は嚴肅にして且意義有り、われ〳〵の頽廢したるわが儘は、君の純潔なる放恣に若かず、われは徹底したる矛盾に生き、君は無意識に矛盾を言ふ。おなじ生の壓迫ながら、わが荒涼と君の潤澤と豈ひとしからんや。君猶死すべからず、幸に健康を恢復せよ』

かつてまき子の曰へる、君は不斷の坐禪に坐せり、清けれど苦しく　しづかなれど寂しと。然り、我は不斷の坐禪に在り、寂しけれど清し、誰か、わが日中の靜寂を疑ふや、わが夢は湖の水の如し、動けども終に鎭まり、行けどもやがてかへる、誰かわがベットに醜怪のかげをうかゞふや。

謝すべきかな。われ猶生く。

夜雨集　終

明治四十五年一月五日印刷
明治四十五年一月八日發行

定價　金八拾錢

著者　横瀨虎壽　東京市京橋區大鋸町十一番地
發行者　野口竹次郎　東京市芝區愛宕町二丁目十四番地
印刷者　金崎金平　東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷所　東洋印刷株式會社

出版元　東京市京橋區大鋸町十一番地　女子文壇社　（振替貯金口座東京第壹七貳九番）

◀全國書店取次販賣す▶

《複製不許》

東宮侍講本居豐穎先生題詠
文學博士小杉榲邨先生序文
實踐女學校長下田歌子先生題詠
國文學士　小森松風先生編

美文作法

全一冊洋裝
二百三十頁
特價貳拾錢
送料四錢

東京市京橋區大鋸町十一番地
女子文壇社出版

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者中村木公君編

實地精査　女子遊學便覽

全一冊洋裝
特價拾五錢
送料四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸嬢も之を讀め一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得ん

佐々木邦先生著　〔再版發賣〕

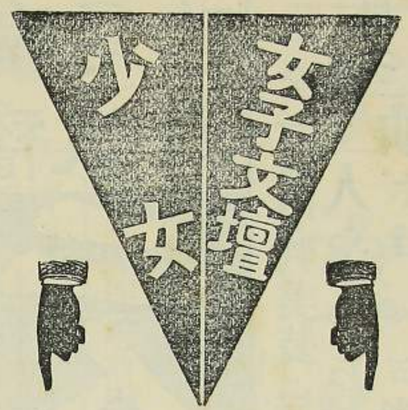
滑稽奇拔珍本　二人やんちゃん

全一冊中判美装　武田壽氏石版彩色畫木版色刷挿畫六葉入　定價金參拾五錢　送料金六錢

目次　二人やんちゃん　あまのじやく　仙ポコ　お猿さん　昔と今

大人にも、小供にも、面白い書物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも爭ふて購求され。近頃の好著として、持て囃されて居ります。

『女子文壇』は若き婦人の間に毎に評判となる雜誌なり、他の婦人雜誌とは異りて最も進歩的なり、現代的なり、特色顯著、試に其一冊を繙き給へ。



（女子文壇）

毎月一日發行

口繪名畫原色版、寫眞版挿入

▲一月、四月、八月、十月は特別號とす。他は普通號なり

定價 特別號金三拾錢送料二錢五厘 普通號金拾五錢送料壹錢五厘

『少女』は少女雜誌中一等評利の好い、面白くて爲になる優美な雜誌、女子小學生高等女學生の理想的讀物として名聲嘖々。

（少女）

毎月一日發行

紙數百餘頁挿畫

澤山挿入美裝

定價一冊金拾錢

送料金壹錢

◀發行所　東京市京橋區大鋸町振替口座壹七壹九貳番　女子文壇社▶

Logos Book-Store
SANNOMIYA 2, KOBE
ロゴス書店
神戸 三宮